



新説・人魚姫～わだつみの  
底にあるもの



ロシア



(イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」 <<http://www.first-moon.com/>>のもので  
すm(\_ )m)

シーポーラは美しい海の娘でした。世界に七つある海底神殿のひとつ、ミドルネシアで何ひとつ不自由のない暮らしをしておりましたし、その上シーポーラのお父さまとお母さまは世界の海の支配者、シーボルグとシーゲイルだったのですから。

美しい海の娘シーポーラは七人姉妹の末っ子として生まれたのですが、六人のお姉さま方はみなそれぞれ、エルヴァルト海、セスアラシア海、デュークセヴァリア海、サンエマルト海、カイスヴィリーフ海、ノヴァールスヴァルト海の王の元へと嫁ぎ、残る娘はシーポーラただひとりだけということになりました。

けれども七つの海を治めるミドルネシア海の王、シーボルグは末娘のシーポーラのことを殊の外可愛くて仕方ありませんでしたので、シーポーラに相応しい人魚が現れるまではと、<sup>アクアポリス</sup>海底神殿の奥深くにシーポーラのことをずっと隠したままでいたのです。

ところがある日、海の大王のお妃であるシーゲイルが、そろそろ末の娘も嫁に行く時期ではないかと判断し、七つの海に住むすべての人魚たちに伝令を発信したのです。それは『海の大王の後継者として我こそはと思うものは、貢ぎ物を持ってミドルネシアのアクアポリスに集うべし』というものでした。男の人魚たちのうちでまだ自分の伴侶を探しだせていないものはみな、「もしかしたら……」と思って遠くの海にいるものも近くの海にいるものもすべて、こぞってミドルネシアのアクアポリスまで泳いでやってきました。

あるものは近海から海の果実を携えて、またあるものは遠洋から珍しい海の宝石を携えて、また別のものはシーポーラのお目を楽しませようと、踊りの達者な魚たちの一群を引き連れてやって参りました。

心優しい海の娘シーポーラは、石造りの海底神殿にある一室で、毎日のように花婿候補と向きあってはテレパシーによって会話をしましたが、「この方こそは間違いなくわたしの伴侶」と

いう人魚はなかなか出会えないでいました。もちろん毎日会う花婿候補の方の中には、家柄のよい方もたくさんいらっしゃいましたし、黄金の珊瑚やルビーのヒトデ、海の涙と呼ばれるサファイアなど、珍しい貢ぎ物をたくさん納める人魚もいたのですが——シーポーラはそのうちの誰にも心の中にときめきの炎が宿るのを感じませんでした。

そうなのです。一年中のほとんどを海の中で過ごす人魚たちにとって、炎の熱さを理解できるのは恋をした時だけなのです。だからシーポーラのお姉さんのシーマリアもシーデリラもシーエルザもシーケイトもシーローラもシーセイラも、みな相手が王さまだったから恋をしたのではなく、恋をした相手がたまたま王さまだったという、ただそれだけだったのです。

海に暮らす人魚たちは地上に暮らす人間とは違って、＜本当に恋をしないと＞決して排卵したり射精したりできないよう、生物としての本能をそのように組みこまれているのです。ですから、三百年もの長い時間を生きる人魚にとって、恋は一生に一度、一体いつ訪れるのかわからないという代物でした。つまり、七つの海を支配する大王以外の人魚たちは一生に一度しか排卵・射精ができませんから、世界中の海を巡っても伴侶が見つからない場合、まだ自分の生涯のパートナーが生まれていないという可能性もあるということなのです。七つの海の大王シーボルグは、この広い海のどこかにシーポーラの伴侶となるべき人魚がいるのなら、シーポーラがどこにしようと必ず運命の導きによって出会うことになるはずと心の底で確信していましたが、それでもできるかぎり自分のそばに可愛い娘を置いておきたいという親心から、なかなか積極的に縁談話を進めるといことはしなかったのです。けれども大王のお妃であるシーゲイルは、そろそろ娘も百十歳、もしこの広い海のどこかに娘のよき伴侶となるべき人魚がいるのなら、一日でも早く出会わせてあげたいと、お母さんとしてそんなふうに思ったのです。

そしてシーポーラ自身、六人のお姉さんたちが実家へ帰ってくるたびに必ずする、「背びれにビビッ」とくる話を、自分も早く実際に経験したいものだと思っていました。毎日新しい花婿候補と虹色の貝模様のテーブルを挟んでテレパシーでお話するのですが、姉たちのいう「背びれにビビッと電流が走る現象」には、結局最後まで出会えずじまいでした。

シーポーラは岩盤の割り貫かれた窓辺に腰かけてほう、と溜息を着き、わたしの伴侶となるべき方はきっとまだこの海の中に生を受けてはいないのだと、とても悲しい気持ちになりました。こんなことなら、いつものように仲良しのイルカたちと戯れたり、クジラとテレパシーで知恵比べをしたりしながら、いつかそう遠くない時に必ず理想のマーマンに出会えるはずと、淡い期待に胸をときめかせていたほうがずっとよかったのに……シーポーラはそう思わずにはいられませんでした。

お父さまお母さまもお姉さま方もお義兄さま方もみな、シーポーラのことを心から慰めてくれましたが、自分のことを慰めるための宴会が催されるたびに、シーポーラはますます惨めな気持ちになりました。そうしてそんな惨めな気持ちを紛らわすために、シーポーラは頭の中が海と同じ深い碧色になるまで毎日、ミドルネシアの海を泳ぎ続けました——人魚たちがみな、自分と出会うたびに「あともう十年も待てば、必ずよき伴侶に出会えるさ」と異口同音に同じことばかりを繰り返すのが嫌で嫌でたまらなかったからです。

そしてそんなある日の夕方のこと、シーポーラがサイオニア領の七十の群島の間を泳ぎまわっ

っていると、その中の無人島の岩山のひとつに、セイレーンたちが何人も上陸しているのが見えました。

「ああ、今夜はきっと時化になるに違いないわ」

そう思ったシーポーラは、水平線に沈みゆく、紅玉髓のような夕陽に背を向け、早くアクアポリスのみんなに知らせなくちゃと海に潜りかけたのですが——その時、大きな三本マストの、船首に美しい女性の像をいただいた壮麗な帆船が落日の方向からやってくることに彼女は気づきました。ここから本土のほうまで帰るには、順調にいつて明日の明け方近くということになるでしょうから、船はきっと真夜中あたりに波でもみくちゃにされ、難破してしまうに違いありません。

そしてシーポーラが船の乗組員である人間たちのことを大変気の毒に思っていると、セイレーンたちのおしゃべりが、海の風に乗って彼女の耳に聞こえてきました。

「あの飛びきり豪華な帆船は、サイオニアのクリフトフ王子が乗っている船じゃないかえ」

「そうだと。なんでもあの王子は大変に信仰深くて、この七十いくつある群島のひとつひとつをまわって、そこに住む住人たちに『神の愛』とやらを説いてまわっているそうだよ。何しろ島の住人ときたら、そのほとんどが漁師だからね。みんな心の半分ではキリスト教を信奉し、もう半分では海の守り神ダゴンを信奉してるっていうありさまだからねえ。なんでもあの王子は海の神であるダゴンを崇拝するのをやめさせるために、方々にあるダゴン神殿の像を壊してまわったという話じゃないか」

「なんだって!? あたしたちの神、ダゴンさまを壊してまわったっていうのかい？」

「まったく、キリスト教が本土のほうで盛んになるのは、あたしたちにとっては迷惑千万な話さね。あの宗教の思想はあたしたちのような神話的存在をみな、駆逐しちまうんだから」

「ふふふ。でもまあいいじゃないか。今夜半にはあの豪華な帆船は海の藻屑となってわだつみに消えてしまうんだから。あの王子が泣いて叫んで縋っても、キリスト教の神とやらは決して助けてなんかくれないよ。そのことを思う存分、味わわせてやろうじゃないか」

「くくく。それはそれは楽しみだ。さあみんな、豎琴の調弦はすんだかい? あの信仰深いというサイオニアのクリフトフ王子の死を祝って、今日は夜通し饗宴を張ることにしようじゃないか！」

シーポーラはセイレーンたちが楽の音に合わせて、淫靡な性的儀式を思わせるおぞましい歌声を合わせているのを見ると、海の中で両足の尾びれをぶるると震わせました。

(——こうしてはられないわ!)

そう思ったシーポーラは、三本マストの豪華な帆船を追いかけて、紺碧の海の中をどこまでもどこまでも泳いでいきました。もちろん、シーポーラには俄に荒れはじめてきた海を沈める力もなければ、帆船に乗りこんでいる乗組員たち全員を助ける力もありません。でもシーポーラは、せめてそのとても信仰深いというクリフトフ王子だけでも助けることができたならと、そう思ったのです。

シーポーラたち人魚は、<造物主>(エホバ)と呼ばれる、海の中のすべてのものを造られた神を

信仰していましたが、ダゴンというのはこの<造物主>に逆らって海の中を勝手気ままに荒らした神話的海獣なのです。ですから、遙か昔に海底深くに封印されたこの海獣の像を破壊してまわるということは、シーポーラたち人魚にとってもとても喜ばしいことだったのでした。



(イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n様」<<http://www.first-moon.com/>>のもので  
すm(\_ )m)

サイオニア王国のクリフトフ王子は、船室のベッドに腰かけて、両手の指を組み合わせながら、自分のしたことは本当に正しかったのだろうか、ひとり思い悩んでいました。

すぐ隣の船室からは、葡萄酒やラム酒をたらふく飲んだサイオニア王国の司祭たちの高いびき  
が聞こえています。王子は、自分の国の墮落した宗教状態に憂いを感じ、この度七十の群島を  
まわってダゴン崇拝をやめるようにと民衆に説いてまわったのですが、効果のほどはさほど上  
がってはいませんでした。特に本土の人間以上に島の住人たちは、キリスト教の神ではなく半神半  
魚の姿をしたダゴンこそが魚を大量に採らせてくれたり海の災害から守ってくれるのだと信じ  
て疑っていないために——ダゴンの神殿を破壊する王子の一行を少しも快く思っていなかったの  
でした。

クリフ王子がキリスト教の神の愛について説いたあと、ダゴンの神殿を軍の隊長たちに命じ  
てロープで引き倒し、ハンマーなどで木っ端微塵に砕きはじめると、民衆はこぞって泣きはじめ  
ました。みな口々に「海の神の崇りが……」とか「これで来年の漁は全滅だ」といったようなこ  
とを呟きはじめ、最後には「ダゴンさま、どうぞ何卒お許してください」と数珠を手に海に向かっ  
て祈る者まで現れる始末でした。

つまり、クリフ王子が説いた神の愛とはこういうことだったのです。キリスト教というのは一  
神教であり、他の神の存在を認めていませんから、この方だけを信じて礼拝するようにとクリフ  
王子は説いてまわったのですが、漁師たちはみなキリスト教の神のことを日曜日だけ礼拝される  
神であり、地上のことをすべて支配なさっておられるけれども、海中のことを支配しているのは

海の神ダゴンである、というようにしか決して理解しようとしませんでした。

もちろん島民の中には、クリフ王子や神父たちの説教を聞き、心の底から悔い改めて地に涙を流し、平伏してイエス・キリストを礼拝する者も現れましたが、そうした人は本当に極少数だったのです。

クリフ王子はダゴンを崇拝するのをやめてイエス・キリストを信じさえすれば、今よりも暮らし向きがもっと豊かになると説いてまわったのですが、漁師をはじめとする島民たちの頑なな心を真の生ける神ご自身に向けることはほとんどできなかつたのでした。

王子が今のサイオニア王国の墮落した宗教状態に憂いを感じ、王に宗教改革をすべきではないかと進言したところ、サイオニアの現国王、ラドクリフさまはこうお答えになりました——「まあ、よいではないか」と。

クリフ王子は父君のこの「まあ、よいではないか」という口癖が大嫌いでした。クリフ王子の母君である王のお妃が自分の廷臣と浮気をしているにも関わらず、「まあ、よいではないか」と見て見ぬふりをし、富裕な貴族たちが農民や漁師たちを圧制して重税をとり立てていても「まあ、よいではないか」と軽く受け流す——それがクリフ王子の父君、ラドクリフ王の国の治め方でした。

お陰で金持ちの貴族たちばかりが私腹を肥やし、貧しい農民や漁民たちはますます貧しくなるばかりという大きな悪循環が国土のすべてを覆い、不正をする者の悪はいつまでたっても裁かれず、正しい者が代わりに鞭打たれねばならないという悲劇が国内のそこかしこに横行していました。そこで国のそうした悪い状況を打開するために、クリフ王子が考えだしたのが『宗教改革』であったというわけです。

クリフ王子の宗教改革の第一の目的は、貴族も含めた国民の道德心の向上という点にあったのですが、王子は民衆の心の拠り所であるダゴンの像を打ち壊しただけで、結局のところ自分は何もしなかつたのではないかという罪悪感に苦しんでいました。ダゴンの像の安置された神殿が破壊される時の、漁民たちの恨みがましいような、抑圧された表情を思い出すたび、国は税金だけでなく我々の心の拠り所まで破壊しようというのかと問い詰められているような気がして、王子はその夜、なかなか寝つかれなかつたのです。

そしてクリフ王子がベッドの上で手の指を組み、「おお神よ、わたしは果たして本当に正しいことをしたのでしょうか？」と心の中で祈りながら神に問いかけていると——ググッと船体が大きく斜めにかしぎました。それから、パタンパタンと天井に大粒の雨が当たる音が聞こえ、その音の量が次第に大きくなってきたのです。クリフ王子は外の様子がどうなっているかを見るために、一度甲板へ上がることにしようと思いました。

「どうかしたのですか、船長」

クリフ王子は甲板へ続く階段を上ると、白い髭を生やした、恰幅のいいスティーブ船長にそう聞きました。

「いえ、なんでもないので、クリフ王子。どうか王子は何も心配なさらずに、船室のほうでゆっくりお休みになってください」

そうは言いながらも、スティーブ船長の顔色は明らかに優れませんでした。それでクリフ王子も何か不測の事態が起きたらしいと直感したのですが、かといって王子には船の操縦について特



別知識があるわけでもありませんでしたから、その場はとりあえず船長の言葉を信じて、彼の言うとおりにしようと思いました。甲板上で忙しく立ち働いている乗組員たちや水夫の姿を眺めると、どうもただごとではないらしいという張り詰めた空気が漲っているのを感じはしたのですが。

赤い十字架と双頭の鷲の描かれた帆はすべて下ろされており、いざとなったらメインマストを残して他のマストはすべて切り倒してしまおうといったような話が、水夫や乗組員たちの間ではなされているようです。

「さあ、王子。王子はどうぞ船室のほうへお戻りください。こんなことは船乗りたちにとってはよくあることなのです。遅くとも明日の正午までには、我らが誇りとする港町、ダニスの岸辺に無事たどり着くことができますよから……」

クリフ王子はスティーブ船長に促されるまま、階段を下りて上甲板にある自分の船室の前まで来ていましたが、隣の部屋では相も変わらず、司教や司祭たちの高いびきが聞こえています。船長は船長で、見るからに落ち着かなげに船長室を出たり入ったり、甲板へ上がったかと思うと今度は中甲板のほうや大甲板のほうに下り、何やら船員たちにしきりと檄を飛ばしているようです。

クリフ王子はランタンの明かりに照らされながら、甲板に上がった時に濡れてしまった髪を白いタオルで拭いていましたが、いかに航海に不慣れな王子といえども、嵐が近づいてきているらしいということくらいは、甲板に上がった時にわかっていました。船上で焚かれていたかがり火は大粒の雨によってすべてかき消され、水夫や乗組員たちはみな、真っ暗な闇の中、ほとんど手探り状態で作業を行っていたのです。

ああ、あの空の闇の色の、なんと濃かったことでしょう！月の光も星の光も何もなく、ただ不気味な波のうねりと風のうなり声だけが、ギイギイと船体のどこかを軋らせていて——あんなに不気味で不吉な音は、これまでに一度も耳にしたことがない、王子はそう思いました。そして自分がほんの数分程度甲板に出ただけでこれほど濡れたのだから、甲板上の船員たちは冷たい波をかぶって、ほとんどずぶ濡れになりながら作業を続けているに違いないと、水夫たちのことをとても気の毒に思ったのです。

(自分だけ、このように立派にしつらえられた船室で、のんびり休んでいてよいものだろうか)

クリフ王子がそう思い、もう一度甲板へ上がろうとした時、激しく大きな縦揺れの衝撃が、船に襲いかかってきました！

クリフ王子は壁に体を張りつけて、転倒しそうになるのをなんとか回避しましたが、机の上にあったまだ封の切られていないワインボトルなどは、床の上で勢いよく割れてしまったくらいでした。

王子は次にきた横揺れの大きさにもなんとか耐え、船室の外へ出てみると、呆れたことに隣の部屋からはまだ大きな高いびきが聞こえています。

(なんということだ。このような時に神に祈ることこそ、聖職者の務めではないのか)

王子が苦々しい思いで唇をかみしめていると、食堂からはガラス食器や陶器の皿などが割れる音が響いて来、外では乗組員や水夫たちの慌ただしい足音が上へいたり下へいたりしていま



した。

「船長、船はどうなるのですか！」

クリフ王子は操舵室に飛びこむなり、そうスティーブ船長に訊ねました。操舵室では副船長が舵を波にもぎりとられそうになりながらも、まだなんとかこらえている様子でした。しかし船長はといえば、必死に踏ん張っているそんな副船長のことを、まるで他人ごとのように横で眺めているだけなのでした。

その顔は色を失って青白く、唇などは青紫色をしており、船長はただひたすら「神よ、助けたまえ、憐れみたまえ」と唇の端に泡をためながら唱えるばかりでした。

そしてクリフ王子が操舵室を出ると、下甲板のほうから水夫の一団が甲板目がけて突き進んできました。

「ポンプがやられた！もう終わりだ！」

「船倉にはもう半分以上、浸水しているぞ！」

水夫たちは誰に言い聞かせるでもなく、口々に絶望的な言葉を吐きながら甲板へと上がっていききました。そしてずぶ濡れになっては中甲板や下甲板へおりていくというのを何度も繰り返しているのです。クリフ王子には何故彼らがそんな意味のないことを繰り返しているのか理解できませんでしたが、彼らはみな明らかに混乱していたのでした。

クリフ王子は航海に不慣れだったせいも、航海術に長けた彼らよりも、むしろずっと冷静でした。水夫や船員たちには「もはやこうなっておしまい」と思える状況でも「いや、まだなんとか持ちこたえられるはずだ」という希望を持ち続けることができたのです。

クリフ王子は意を決して甲板に上がりましたが、それと同時に大きな波が、甲板へと続く階段の入口にまで押し寄せてきました。おそらく、このままでいけば、下の船倉からは水がせり上がって来、また上甲板のほうも上からの波で水浸しになることは間違いなかったでしょう。

クリフ王子は舷側の柵に必死でしがみつきのながら、暗闇の中、海兵隊の隊長の名を呼びました。

「クロイツネイル将軍！」

クリフ王子が上からの波にもまれ、また激しい雨に口の中を塞がれそうになりながらそう叫ぶと、甲板の上を滑るようにしてやってくる、ひとつの濃い影がありました。

「クリフ王子！このようなところで何をしておられるのですか。救命艇の準備が整い次第、お呼びしようと思っておりましたのに……」

「救命艇？こんなにひどい嵐の中、救命艇などに乗ったとして、果たして助かるものだろうか？それよりも混乱している水夫たちを落ち着かせ、船が沈まぬよう神に祈りを捧げてはどうだろうか」

黒く波打つ髪、美丈夫として知られる若き将軍は、暗闇の中で失笑しましたが、王子にはあたりが暗かったため、クロイツネイル将軍の表情がわかりませんでした。

気を取り直した将軍は、王子に答えました。

「わかりました。兵士や水夫たちの全員を、一度食堂のほうへ集めましょう。もしや神が我々のことを憐れんでくださり、奇跡的に助かるやもしれません」

上甲板にある食堂に集められた兵士と水夫の数は合計で七十七名でした。この三本マストの口

イヤル・サイオニア号には、陸を離れる前には全員できっかり百人乗船していましたが、死人のようにいまだ眠り続ける神官たち七名と、甲板で作業中に不幸にも波に飲みこまれた者十三名、それから操舵室に閉じこもっている者二名を除くと、合計の人数が七十七名でした。

クロイツネイル将軍とスティーブ船長はメインマストを切り倒すか切り倒さないかで激しい論争になっており——というのも、すでにフォアマストとミズンマストはとっくに切り倒された後だったので——兵士たちや水夫たちはみな、死人のような顔をしながらも、かろうじて狂気に駆られそうになるのをこらえているといったような表情で、船長と将軍の激しい論争を聞いていたのです。

クリフ王子もまた、船体が波にかしぐたびによろけそうになりつつも、クロイツネイル将軍とスティーブ船長のそれぞれの言い分に耳を傾けていましたが、王子の心はメインマストを切り倒す、切り倒さないということではなく、七名の神官たちのほうに向かっていました。

クリフ王子は甲板からずぶ濡れになって戻ってきたあと、神官たちの部屋の中へ入り、彼らひとりひとりの顔をはたいて何度も起きるように言ったのですが、彼らは酔いつぶれていて誰ひとり目を覚まそうとはしなかったのです。船の揺れが激しいために、みなほとんどベッドから転がり落ちているという始末でしたが、それでもまだいびきをかいて床の上で大の字になって寝入っているのです。

王子は兵士や水夫たちの中に、海水でずぶ濡れになっていない者がひとりもないのを見てとると、自分が連れてきた神官たちのことがとても恥かしくなりました。そして自分がしようとした宗教改革が誤りだったのではなく、司教や司祭をはじめとする神官たちの宗教心が腐り果ていることのほうにこそ問題があったのだと、初めて気づかされたのです。

「我、たとい死の陰の谷を歩む時も！」

クリフ王子は突然立ち上がると、右手を突きだして叫びました。

「我、たとい死の陰の谷を歩む時も！」

すると兵士と水夫の全員が、ある者は力強く、ある者は小さな声で、王子に続いて唱和します。

「我、決して災いをおそれず！」

そしてクロイツネイル将軍もスティーブ船長もハッと我に返り、聖書のある詩篇の句を大きな声でともに唱和したのです。

「神が我らとともにおられるゆえに！」

この詩句を全員が言い終わるか終わらないかのうちに——ドーン！という鈍い垂直的な衝撃が、船全体に走りました。

兵士たちも水夫たちもみな、一様に甲板へ駆け上がり、メインマストが雷に打たれて真っ二つに裂け、荒波の中へと消え去るのを目撃しましたが、不思議と誰も神の怒りの結果であるというようには感じていませんでした。むしろ神は確かに間違いなく存在しておられ、我々のことを今まさに稲光の彼方からごらんになっておられるのだと、そのように感じたのです。

兵士と水夫たちの間からは歓声がわき起こり、クロイツネイル将軍とスティーブ船長は互いに和を講じました。とはいえ、このままいけば船が沈没するのは間違いなく時間の問題であり、事態が好転したわけでは決してないのです。それにも関わらず、水夫たちも兵士たちもみな喜び勇

んでおり、王子と死をともにできることを誓めたたえあっていました。

クリフ王子自身は「サイオニア王国万歳！」と唱える彼らの声を、内心複雑な思いで聞いていたのですが、やがて夜明け前のもっとも濃い闇の時刻が過ぎゆき、東の水平線から、太陽が白々と昇りはじめました。波はまだ荒れていましたが、嵐は太陽が昇ると同時に、徐々に力を弱めつつあるようでした。

「王子、どうか救命艇にお乗りください」

クリフ王子よりも頭一個分背の高いクロイツネイル将軍が、王子の御前に膝をついてそう申し上げました。

「だが、救命艇は二艘しかないのであろう。それでは助かる者はほんの二十名足らずではないのか。それよりも今のようにみなで心をひとつにして祈り、神の助けを待ったほうがよくはないだろうか」

クリフ王子が王子らしい威厳をもってそう答えると、クロイツネイル将軍は頭を垂れたままで——将軍は内心、神にどんなに祈りを捧げたところで、この船は沈む運命なのだと思っていました——「お言葉ではございますが」と、王子に向かって苦言を呈しました。

「御自身の御身分のことをどうかよくお考えくださいませ。ラドクリフ王には今、クリフさま以外、お世継ぎがひとりもいらっしゃらないではありませんか。ここで万一王子がお命を落とされるようなことになったとしたら……政権は国王さまの弟君、カイザルベルクさまとその一派の思うがままになってしまうのですよ。よしんばそのようなことになったとしたら、国民は今以上に重税を課され、富んでいる者と不正をする者だけが得をする社会がこのまま続いていくということになるのです。王子は本当にそれでよろしいのですか」

クロイツネイル将軍が志しを同じくする者として真摯な眼差しを王子に向けると、クリフ王子が口から何か言葉を発する前に、

「そうだ、そうだ。クリフ王子こそ我々民衆のことを本当に考えてくれる真の統治者だ」

「どうか王子、我々のことは構わずに早くボートにお乗りください」

「我々は天国で、王子がこれからなされるであろう改革のことを見守っています」

といったような声が兵士たちや水夫たちの口から、次々と溢れでました。そしてみな「サイオニア王国、万歳！」、「クリフ王子に神の祝福のあらんことを！」と、誰からともなく声を合わせて唱和したのでした。

実際のところ、兵士たちや水夫たちはみな、クリフ王子の神に対する信仰がうわべだけのものではなく、死に直面しても揺るぐことのないのを見て、尊敬の念に打たれていたのです。

甲板上で王子は、自分よりもずっと身分の低い者たちに見送られながら、胸の内にあるものをぐっと堪えるようにして、舷側にロープで吊るされている救命艇の中へ乗りこもうとしました——兵士も水夫もみな、額に斜めに手をあて、直立不動で敬礼していたのですが、そんなみな姿を見まわして、クリフ王子はそこでふと立ち止まりました。

「王子、どうかお早く」とクロイツネイル将軍が促しますが、王子は首を振りました。

「このボートは一艘の定員が十名だ。まだふたり、乗れるではないか」

クロイツネイル将軍は内心舌打ちしたい思いでしたが、王子の気のすむようにと、最前列に並

んでいた自分の配下の准尉をふたり、手招きして呼ぼうとしました——と、そこへ……。

「待ちなさい。ボートに乗るのはわたしたちじゃ」

寝乱れた僧服を直しもせず、灰色のもしやもしやした髭を胸のあたりまで伸ばした僧侶ふたりが、名乗りを上げました。それはゴードン司教とサルツェル司祭でした。ふたりはようやく今に至って目を覚まし、ふらつく足で慌てて甲板へ上がってきたのです。

ふたりは王子の前まできて軽く頭を下げると、我先にと救命艇に足を乗り入れています。クリフ王子はそんなふたりを見て深い溜息を着き、

「君たち、乗りなさい」と、准尉ふたりに向かって合図しました。

「十人でも十一人でも、命の助かる確率にさして違いはないだろう。わたしはここに残る。もしかしたら朝一番に漁へでた漁船が通りかかり、助かるかもしれないゆえ……」

そして王子が生きるも死ぬも神の御心次第と言おうとした、まさにその時——王子の鳩尾のあたりを、サーベルの柄が襲いました。

「どうか、お許しを」

クロイツネイル将軍でした。将軍は顎をしゃくって自分の部下に王子を救命艇へ運ぶよう無言で指示しました。そして見送る兵士と水夫たちに敬礼を返し、断腸の思いで自分もボートの中へと乗りこんだのでした。

クリフ王子はずっと気絶なさまだったもので、まるで王子の脱出を待っていたかのようにロイヤル・サイオニア号が波間にくずおれるように沈んでいったことも、将軍の選り抜きの将校たちが乗っているもう一艘の救命艇が転覆する様も目にすることはありませんでした。

そしてまるで生き物のような高い波をかき分けるようにして、もう一艘の船からただひとり、こちらの船に辿り着いた兵士が、

「助けてくれ！」

と必死の形相で、船縁を掴みながら懇願しました。

ところが、その兵士が船の上にも乗りこもうとするやいなや——他の者もオールを漕ぐのをやめ、なんとか助けてやろうとしたのですが——ぐらりと船の重心が傾き、船尾にいたゴードン司教の体が危うく、波間に滑り落ちそうになりました。

すると、サルツェル司祭は怒りの形相でもってオールを引っ掴み、やっとのことで命からがらここまで泳いできた者の頭に向かって、それをなんのためらいもなく振り下ろしたのでした。その者が気を失って船縁から手を離すまで、五度も六度も……その時のサルツェル司祭は恐ろしい顔つきといたら、とても神さまにお仕えする信徒とは思えないくらいでした。

オールを漕ぐ役目に着いていた六人の兵士たちはみな、胸に五つ以上の徽章をつけている、実に誇り高い勇敢な人たちであり、普段は思慮と分別のある、大変優秀な人たちではありましたが、自分たちの親しい仲間が目の前で殺されるのを目にするやいなや——ゴードン司教とサルツェル司祭のことを、逞しい両腕でもってふたりとも船から突き落としてしまいました。

そしてゴードン司教とサルツェル司祭があっぴあっぱと溺れ——どうやらふたりとも、あまり泳ぎが得意ではない様子でした——「助けてくれ！」と何度叫んでも耳を貸さず、船べりに伸ばしてきた手を、容赦なくオールで打ち叩きました。

ゴードン司教もサルツェル司祭も、自分たちは指一本動かさないくせに、口だけは達者で、「もっと早くオールを漕げ」だのなんだのうるさかったので、ちょうどよい厄介払いができたとかみな思いませんでしたし、それどころかこんな奴らふたりのために、先ほどみすみす仲間の命を失ったかと思うと、悔しくて悔しくてたまりませんでした。

けれどもみな、とても疲れておりましたし、骨の髄まで冷えきっておりましたので、このことについてはお互い一言も何も話さずに、荒ぶる波を何度もかぶりながら、ひたすら船にしがみつくようにして、オールを漕ぎ続けました。

クロイツネイル将軍もまた、一言も言葉を発しませんでした。将軍はただひたすら王子の体のことを気遣い、黒のマントを王子の体の上に掲げ持ち、できるだけ王子が波をかぶらずにすむようにしていたのでした。しかし、将軍のそのような涙ぐましい努力も虚しく、救命艇は何度も高波をかぶったあとでもみくちやにされ、先に転覆したボートと同じ運命を辿ることになったのです。

クロイツネイル将軍もクリフ王子も、海軍大佐も中佐もみなも身分の違いも差も何もなく、同じように等しく紺碧の冷たい海の中へと投げだされました。ある者はオールを掴み、またある者は引っくり返ったボートにまでなんとか泳ぎつきましたが、みなそれほど長い時を隔てずして、岬に墓標を立てられている人々のところへゆきました。

そしてクロイツネイル将軍もまた、王子を波の狭間に見失ったあと、遠くに陸の幻を見ながら、泳ぎ疲れて自分の部下たちと同じところへ下っていったのでした。

クリフ王子は、冷たい波の中にあっても一向に目を覚まさず、もはや死んだ人のようでしたが、それでもまだかろうじて生きていました。そして彼が海に投げだされるのをずっと待っていた、虹色をした何者かが、彼のことを背中に背負い、陸地に向かって波の間を縫うようにして進んでいたのです！



(イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」 <<http://www.first-moon.com/>>のもので  
すm(\_ )m)

みなさんはきっと人魚、という言葉を知ると、上半身は人間で、下半身が魚の尾びれという、半魚人の姿を想像するでしょう。でも本当の人魚というのは、上半身も下半身も硬い鱗で覆われていて、魚のような両目と爬虫類のような頭を持っているのです。そして足も人間のようにふたつに分かれていて、大変泳ぎが上手なのです。

虹色の鱗にびっしりと覆われている人魚のシーポーラは、きのうの日没から今に至るまで、ずっとロイヤル=サイオニア号及び、クリフ王子の乗った救命艇のゆくえを追ってきていました。

本当のところをいうと、人間たちの目に見つからないよう注意しながらずっと後ろを追ってきていたシーポーラには、海に投げだされたうちの誰がクリフ王子なのか、はっきりとはわかっていませんでした。ただ、クロイツネイル将軍の王子に対する無念の思いを最期にテレパシーによって感じた時——おそらくはこの人がクリフ王子なのだろうと、初めて見当をつけたのでした。

それにしても、クリフ王子が気を失っていたというのは、シーポーラにとって非常に好都合なことでした。何故って、顔も体も全身びっしりと鱗で覆われた人魚を見て、驚かない人間はひとりもいないでしょうから、クリフ王子がクロイツネイル将軍に鳩尾を突かれて気絶していたということは、本当に奇跡的な偶然といってなんら差し支えなかったでしょう。

シーポーラはイルカが人間を背負うような形でクリフ王子のことを背中に背負い、渾身の力を振り絞って陸地を目指しました。何しろきのうの夜からシーポーラ自身もずっと、波と嵐にもみくちゃにされていたから、いくら人魚とはいえかなりのところ体力を消耗しきっていたのです。それでもなんとか、シーポーラはサイオニア湾頭の港町、ダニスの切り立った白亜の入江へと辿り着き、漁師たちの船が幾艘も泊まる港を避けて、入江の断崖の奥深くへとクリフ王子の

体を運んでいったのでした。

その場所はちょうど、岩盤を割り貫いた洞窟のようになっていて、すぐそばに町の漁師たちがサキュバス海門と呼ぶ、海の波に自然と抉られてできた天然の岩のアーチがある場所でした。シーポーラはその漁師たちが海の<sup>サキュバス</sup>玄関と呼んでいる、サキュバス海門をくぐって、洞窟の入口へとクリフ王子を運んだのでした。クリフ王子の体はすでに海の温度と同じかそれ以下に冷えきっており、その顔色は蒼白というよりも、より死人に近い土気色をしていました。

シーポーラはまずクリフ王子の胸部を圧迫して水を吐きださせ、それからえら呼吸を肺呼吸に切り換えると、空気を大量に吸いこんで、自分の紫色の唇を王子のそれに与えました。

そして王子が激しく嘔せる様子を見届けると、もうこれで大丈夫と思い、何も言わずに黙ってその場から姿を消し、サキュバス海門の遥か彼方にある自分の海の住みかへと帰っていったのでした。

実をいうとその洞窟の奥深くには、海の神を祀った祭壇が安置されており、毎日朝と夕、どんなに海が荒れていても、必ず修行僧が祭壇に蠟燭の明かりを灯しにくるという場所でした。

そしてその朝もやはり港町の寺院から、ふたりの修行僧が一艘の小舟に乗ってやってきました。ふたりの若い僧たちは、クリフ王子の着ている服の胸元に縫いとめられた、王家の紋章に目をとめるやいなや、慌てふためいて王子のことを舟の中へお運びし、港町の岸辺へ着くとすぐに、医者呼びにいったのでした。

こうして、サイオニア王国唯一の正統なる王位継承者、クリフトフ王子は、その一命をとり留められたのです。

クリフ王子が目を覚ましたのは、自分の寝室の天蓋つきベッドの上でのことでした。

クリフ王子はずっと夢を見ていて、その夢の中では何もかもがすっかり幸福でした。自分は虹色の鱗を持つ人魚で、すぐそばには同じような姿形をした、もうひとりの人魚の乙女がいます。そして何故なのかはわからないけれど、王子はもうひとりのその人魚と、人間が使うような言葉なしで心を通いあわせることができ、以心伝心で心の中にあることをすべて伝えあいながら、深い海の中を泳ぎまわっているのです。

王子はまるで、遠洋漁業にでて丸三年陸地に戻らなかった者のように覚束ない足どりでベッドからおりると、赤い絨毯の上をふらつきながら歩きました。

クリフ王子は夢の中で波にたゆたっていた感覚がどうにも忘れられず、夢遊病者のようにふらふらしながら、ぐるぐるとベッドのまわりを泳ぎまわっています——とそこへ、王子つきの従者のひとりがやってきました。二十一歳の王子よりもひとつ年下のその若者は、王子の様子が尋常ではないのを見てとると、すぐに医者呼びにいきました。

王宮つきの年老いた侍医は、王子の手をとって脈を測り、王子の額に手をあてて熱がないのを確認すると、彼のことをゆっくりと慎重に、ベッドの脇へ座らせました。

「ここがどこかわかりますかな、クリフ王子？」と、カール先生は聞きました。

「……わたしの部屋だ」



ぼんやりとした、どこか焦点の定まらない目で王子が答えます。

「では今、王子は部屋の中で何をしていたのでございますか？」

「泳いでいたのだ」

「空気の中をですか？」

「いや、海の中をだ。わたしは人魚の虹色の鱗を食べて、彼らの仲間になったのだよ」

王子の乳兄弟にあたる従者は「王子、お気を確かに」と心配そうに言いましたが、カリール先生は彼のことを目で制し、質問を続けました。

「王子、ロイヤル＝サイオニア号が沈没したことはご存じですか？」

途端、クリフ王子の両方の青い瞳に、生気が戻ってきました。そして暫くすると、王子はそのサファイア・ブルーの瞳に涙をためて、声を殺して泣きはじめました。

「……ロイヤル＝サイオニア号はどうなったのだ？」

クリフ王子は現実の記憶を遡ると、クロイツネイル将軍の剣の柄のことを思い出したのでした。そうだ。自分はその時、そのまま気を失ったのだ、と。

「大変申し上げにくいのですが、王子。乗組員は全員、ほぼ絶望的なものと見て、間違いないようでございます。遺体のほうも何体かは収容されたと聞いておりますが、その中にはクロイツネイル将軍のものは見当らなかった模様です。それから、スティーブ船長のものも……」

カリール先生が慰めるように王子の背中に手をまわそうとすると、

「申し訳ないが、出ていってくれ」

王子は両手で顔を覆ったまま、押し殺したような低い声でそう言いました。「悪いが、暫くの間ひとりにさせてくれ」と。

カリール先生は従者に目で部屋から出ていくよう伝え、自分も一緒に王子の寝室を辞去したのち、何か王子に軽いお食事をお持ちするよう彼に命じました。もし食べ物が喉に通らなかったとしても、せめて何かお飲み物だけでも召し上がるようにと勧めるよう、従者のアントニオに申しつけたのでした。

シーポーラは深い海の底にあるアクアポリスで、アンモナイトの化石のテーブルに頬杖をつきながら、何度も深い溜息を着いていました。人魚たちの主食である、ウニもアワビもカキも喉を通らず、ただじっと自分の部屋に閉じこもり、クリフ王子のことばかりを考え続けていたのでした。

実をいうとクリフ王子は、人間の男性としては、それほど人が見惚れるような顔立ちをされているというわけではありませんでした。王子さまにこんなことを申し上げるのは失礼なことかもしれませんが、せいぜいって十人並みといったところだったでしょうか。今は亡きクロイツネイル将軍の美貌を夜空の星に譬えたとしたら、クリフ王子は地上のなんの変哲もない石ころといった感じでした。けれどもシーポーラは、生まれて初めて口接けを交わした相手にすっかりのぼせ上がっていたので、なんとかしてもう一度王子さまにお目にかかりたいと、ただそればかりを夢想し続けていたのです。

シーポーラは沈没船の底にあった鏡で、自分の容姿を一度だけ見たことがあります。人間の女性の美しさに比べると、それは到底見劣りのするものでした。シーポーラの虹色の鱗などは、

人魚たちの間でも珍しいものでしたが、人間にはもともと鱗の部分がひとつもないので、シーポーラが王子の美の対象になったりすることは、到底不可能なことのようには思われませんでした。

シーポーラは自分の両親や姉や義兄たちが、自分の塞ぎこんでいる様子をととても心配しているのを知っていましたが、自分の伴侶を海の中で見つけれなかったときのように、うわべだけでも明るくしようとする気力がもはや少しもありませんでした。何故なら、シーポーラは生まれて初めての恋に身を焦がしていたけれど、それは最初から叶わぬ恋だったからです。地上の人間と海底の人魚……どうしたってふたりが結ばれるわけはありません。

シーポーラは人魚のみなが美しいと褒めそやしてくれる、虹色の鱗が恨めしくて仕方ありませんでした。

(ああ！この虹色の鱗が、人間のようにきめの細かい、滑らかな肌だったらよかったのに！それにこの紫色の唇が、かつて口接けたあの方のように、薄い桃色をしていたらどんなにかよかったですよ！わたしはもう一度あの方にお会いしたいけれど、あの方はきっとわたしの姿を見るなり、怯えて逃げだすに違いないわ……ああ！どうしてわたし、人魚にではなく、人間に生まれてこなかったの？)

そしてシーポーラが今日何度目になるかわからない溜息の泡をぶくぶくと吐きだしているところ——半人半魚の海の魔女、セイレーンが岩の窓からシーポーラの部屋の中へと泳いできました。

セイレーンたちはシーポーラたち人魚と違って、大体一か月のサイクルで、人魚から人間へと変身していくという種族でした。今シーポーラの目の前に現れたセイレーンは、シーポーラたち人魚と同じように、びっしりと緑色の鱗で全身を覆われていますが、ただひとつの違いは足が二股に分かれておらず、魚のような尾びれを持っているということでした。セイレーンたちはこの姿からやがて人間の姿へ近くなっていき、月に一度だけ完全に人間の姿になることができます。そして人間を誘惑するための饗宴を開いたあと、人間の姿に近い間は陸地や浅瀬などで過ごし、だんだん人魚の姿に近くなってくると、こうして海底の奥深くにまでやってくるというわけなのです。

「どうしたんだい、シーポーラ。なんだか元気がないみたいじゃないか」

セイレーンのセイラは、テレパシーでシーポーラに話しかけました。

「だってわたし……」と言いかけて、シーポーラは思念を飛ばすのを途切らせました。セイレーンとは口を聞いてはいけないと、小さな頃から父や母やおじいさまやおばあさまにきつく言いつけられていたからです。

「おやおや。そう警戒おしでないよ。あたしはあんたがあんまり不憫で、こうしてわざわざ親切にも海底神殿までやってきたんじゃないか。シーポーラ、おまえは恋をしているんだろう？ さあ、洗いざらいすべて話しておしまい。あたしはあんたの悩みごとを他の誰にも言う気はないからね。シーポーラ、おまえのお父上もお母上も六人の姫君たちも、決しておまえの今の気持ちを理解してくれやしないだろう。だけどあたしにはあんたの気持ちがよくわかるんだよ。だからもしあたしにできることがあったら、なんでも協力してあげよう……もちろん条件つきではあるけどね」

シーポーラは、セイレーンたちが月に一度だけ人間の女の姿になって、<sup>おか</sup>陸の人間の男たちと交

わりを深めるという話を知っていました。そして身ごもって十月十日たち、生まれた子供が女の子なら自分たちの仲間に加え、男の子なら、海辺の砂浜に置き去りにしてしまうということも……。

「あたしたちセイレーンにとって恋ってというのは、いつもつらいものだからね。だけど、だからこそあたしにはあんたの気持ちがよくわかるのさ。もしあんたさえよかったら、人間になるための〈進化の秘薬〉をあんたに授けてあげよう。だけどそのためには、あんたのその美しい虹色の鱗が百枚必要だよ。もちろんまあ、無理にとは言わないけどね……」

シーポーラはセイレーンが深海魚のような目をギョロつかせ、蛇のような醜い体で踊るように波にくねる姿を見て、一瞬躊躇しました。セイレーンが何か取り引きを仕掛けてきても、絶対に応じてはならないというのが、海の統治者である父と母の、小さい頃からの厳しい言いつけだったからです。

「お父さまやお母さまや、お姉さまたちにも相談してみないことには、なんともお答えの仕様がありませんわ。二、三日、考える時間を与えてはもらえないかしら？」

セイレーンのセイラは、緑色の鱗にびっしりと覆われた顔を歪めて、

「もちろん、いいともさ」

と、さも気前よさげに答えました。

「じゃあまた三日後にここへやってくる時、あたしは〈進化の秘薬〉を持ってくることにするよ。あんたの心がもし決まったら、その三日の間に虹色の鱗を百枚用意しておいておくれ」

「わかりましたわ」

シーポーラは岩の窓からセイレーンを見送ると、身支度を整え、海底神殿の中央にある王と王妃の広間へと、静々と泳いでいきました。そしてそこで、珊瑚の玉座に座っておられるお父さまとお母さまにご挨拶したのです。それから六人の姉君と義兄たち全員と、久しぶりに晩餐会を開き、波に乗ってダンスを踊ったり、お別れのしるしとして、クジラのヒゲで作ったハーブで美しい音楽を奏でたりしました。

そうなのです。実をいうとシーポーラの心はもうすでに決まっていたのです。きっと父上や母上や姫君たちに相談したとしたら、何を馬鹿なことをと一笑に付されていたことでしょう。もしかしたら正気に戻るまでと、深海魚たちの住む暗黒の牢屋へ幽閉されていたかも知りません。

『シーポーラ、おまえ何を言っているの。人間なんてせいぜいたったの百年ぼっちしか生きられない、寿命の短い生き物じゃないの』

『そうだよ。人間はこの地球の、およそ三割程度しか治めていない、しかも戦争ばかりを繰り返す、愚かで野蛮な生き物じゃないか』

『そうよ。それに人間なんて、海の深みにくだってくると、水圧でぺしゃんこになってしまうような、脆弱な生き物じゃない。あたしたち人魚の、地球の七割を占める広大な領土と、三百年も生きられる寿命のことをもっとよく考えてごらんなさいな』

『いくら伴侶が見つからなかったからって、やけを起こしちゃいけないよ』

……シーポーラには、みながこぞってどんなふうにしてシーポーラのことを諫めようとするかが、テレパシーで聞くまでもなくよくわかっていました。だからせめて最後のお別れのしるしとして、『みんなが大好きなシーポーラ』を演じることにしようと思ったのです。

(わたしはもう、サイオニア王国のクリフ王子に出会う前の自分には戻れない.....お父さま、お母さま。どうか親不孝をお許してください。そしてお姉さまとお義兄さま。いつまでも仲睦まじく、お元気で.....)

シーポーラは三日かけて自分の鱗を百枚、やっとの思いで引き剥がすことができました。鱗を一枚剥がすたびに、人間が髪の毛を十本同時に抜かれるような激痛が走りましたが、その激痛にシーポーラは百度も耐え抜いたのです。

しかも鱗を剥がした部分から血が滲み、そこに海水がしみこんだため、鱗を剥がしたところはみな、化膿して醜く腫れ上がっていました。けれどもシーポーラはその痛みさえ、クリフ王子のことを想うと、甘美なものとして受け入れることができました。

(ああ、もう少しであの方にもう一度お会いできるだなんて、夢みたい.....)

シーポーラはずきずきと痛む両足を、鱗のある指でさすりながら、クリフ王子の凜々しい顔立ちや真っ白な肌のこと、金色とも銀色ともつかぬ、美しい髪のことなどを思い浮かべました。

(わたしももう少ししたら、あの方と同じように、きめの細かい滑らかな肌と、鱗がひとつもない顔とを手に入れることができるんだわ)

シーポーラが海藻のふかふかしたベッドの上で、痛みを悶えながらも地上の夢の生活に思いを馳せていると、

「待たせたね」

セイレーンのセイラが、左手に水晶の小瓶を持ってやってきました。

「どうやらその様子だと、もう決心はついているようだね。なあと、あんたの化膿した足については何も心配いらないよ。この薬を飲みさえすれば、どんな傷だってあっという間に治っちゃう。化膿した皮膚はみんな、新しく生まれ変わった細胞にとって変わるだろうよ。さあ、交換だ。あんたが血を滲ませながら剥がした虹の鱗を百枚、こちらへ寄こしとくれ」

シーポーラはコルクで栓をした瓶を、セイレーンの右手に渡しました。そしてセイラの左手から<進化の秘薬>を受けとり、その透明な美しい液体にじっと見入っていました。

「それが何でできているのか気になるのかい？知りたきゃ教えてやるがね、そりゃあたしたちセイレーンの性ホルモンさ。あんたはこれから陸地へ行って、その透明な液体を瓶が空になるまで一気に飲み干すんだ。変化はすぐに現れるだろうが、鱗が全部透明になって剥がれ落ちるまでの間、あんたは猛烈な睡魔に襲われるだろう。だからあんたは自分の身を守るために、陸地の安全な場所でその薬を飲まなけりゃいけないよ。それともうひとつ、ここからが重要だ。その薬には副作用があってね、一日に一度、ほんの半刻程度だが、元の姿に戻っちゃうんだよ。だからシーポーラ、あんたはよく時間を考えて、その薬をお飲み。大体薬を飲んだ時間と同じ時刻に変身がはじまるはずだからね。まかり間違っても真っ昼間にその薬を飲んだりしちゃいけないよ。そうさね.....わたしの考えでは、夜明け前、闇のもっとも濃い時刻にその薬を飲むのが最適なように思われるがね、ま、そりゃあんたの自由にするがいい」

シーポーラは副作用のことを聞くと、途端に不安になって、全身が強張ってきてしまいました。

「そんなに不安そうな顔をおしでないよ。そのかわりと言ってはなんだけど、この薬を飲めばあ

んたは、人間の中でもとびきりの美人になることができるんだからね。だけど副作用の他にもうひとつだけ注意しなけりゃならないことがある。あんたが契りを結んだ相手にだけは、決して本当の姿を見られちゃいけないよ。他の人間には人魚の姿を見られてもどうってこともないけれど、本気で惚れた相手に本当の姿を見られちゃうと——人魚の姿のまま、もう二度とは人間の姿に変身できなくなるんだからね」

「……わかりましたわ」

シーポーラはセイレーンたちの透明な性ホルモンの入った小瓶を握りしめ、決意も新たに、サイオニア王国の首都、サイネリアにもっとも近い海港ダニス目指して泳いでゆきました。

そしてセイレーンのセイラはといえば、きっとシーポーラのこの恋はうまくゆかないだろうとわかっていながらも、とにもかくにも自分は望みの物を手に入れたと思い、ほくそ笑みながら他の仲間たちの元へと戻っていったのでした。



(イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」 <<http://www.first-moon.com/>>のもので  
すm(\_ )m)

ロイヤル＝サイオニア号が難破して、半月あまりが経過したある日のこと、クリフ王子は高台にある王城から入江へと続くなだらかな下り坂を、暗い面持ちでゆっくりと歩いてゆきました。

埃っぽい道の両脇には、薄紅色のハマナスの花が咲き乱れて快い芳香を放っておりますし、遠くのほうに目をやるとそこには、夏の陽射しに照り輝く紺碧の海の穏やかなさざ波があるというのに——王子の心は急峻な坂道を転げ落ちるかの如く、どこまでも落ちこんでいました。

王子は二十一年生きてきた人生の中で、今以上につらい季節を迎えたことが、一度としてありませんでした。クロイツネイル将軍という、名門貴族出身の、これから自分の片腕となるべき友人を失ったこともさることながら、自分以外の船の乗員、九十九名の命を奪ったという罪の重さのことを考えると——瞳の中にうっすらと涙が滲み、絶望で頭の中が真っ暗になるのを感じました。

クリフ王子はこの半月あまりの間、何度も同じことを初めから考え、冷静に、客観的かつ論理的に、何故あの夜、ロイヤル・サイオニア号が沈まなければならなかったのか、自分以外の乗員九十九名の命が失われなくてはならなかったのかについて、ずっと考え続けていました。

まず一番最初に挙げられるのは、ロイヤル・サイオニア号が本土の海港から離れて七十の群島に向かったその目的と動機についてです。クリフ王子はこの第一の柱について考える時、一番最初の動機は間違いなく、疑いようもなく正しいものだと、そう思いました。もっとも、<宗教改革>のために船団を整えて出帆したいと父王に願いでた時、父王も貴族のみなも大反対したのですが、クリフ王子はフィッツジェラルド枢機卿を味方につけて、なんとか宗教改革法案を貴族院に押し通したのです。

しかし、いざ実際にダゴンを祀る神殿をとり壊しにかかる時、民衆は手に石を握りしめて歯ざしりするような反応を返してよこし、本当の意味での回心の光に導かれた者は、ほんの少数だけだったのでした。この少数の人々は、キリスト教の神だけがただひとりの神であり、ダゴンと

いうのは漁師たちが魚を大量に採らせてくれると都合よく勝手に信じているだけの、まやかしの神であるということを告白した人たちでした。彼らはみなクリフ王子や神官たちの御元にきて平伏し、回心の涙に溢れながら信仰告白しました——王子はこうした真に悔い改めた者のことを思うと、収穫は少なかったかもしれないが、自分が行ったことはやはり正しかったのだと確信することができました。けれどもその帰り道の途中で船が難破したおそろしい夜のことを思い出すと、どうして自分以外の者が全員、死ななければならなかったのかがわかりませんでした。

（神よ、わたしはあなたの御心のとおりに行ったのではないのですか？それともあなたはわたしの努力不足を責められようとする方なののでしょうか？一体、あの夜に死んだ水夫のひとりの命とわたしの命とに、どれだけの違いがあったというのでしょうか……クロイツネイル将軍もスティーブ船長も、統率力のある、部下のみながら慕われていた人たちでした。むしろわたしのほうこそが、彼らのひとりのかわりに、海の藻屑となって消えていけばよかったものを……）

それから王子は、海港にある波止場のひとつから小さな舟に乗り、ひとり櫂を漕いでかつて自分が投げだされていた洞窟の入口へと向かいました。王子は海鳥の鳴き声とさざ波の音しか聞こえない小さな舟の中で、自分はどうやってあの時この洞窟まで辿り着くことができたのだろうと、何度考えてもわからない難問を解こうとする人のように、自問自答し続けました。

（まず自然のうちに波に運ばれて、あそこまで辿り着いたとは、到底考えにくいだろう……貴族たちはみな、おべっかを使って『海の神の守りが王子とともにあったのでしょうか』などと言うが、わたしはその海の神の神殿を破壊した張本人なのだ。国の者がみな、ロイヤル・サイオニア号沈没の報を聞いて、心密かに思っていることを、わたしは知っている。みな、海の守り神ダゴンの崇りだと思っているのであろう。ああ、わたしという人間はどうしていつもこうなのだ。わたしが正しく良いことを行おうとすると、何かしら問題が起こって躓くことになるのだから……）

クリフ王子は溜息を着きながら、複雑な地形をしている海洞海門をくぐり抜け、海の神が祀られている洞窟の入口にまでやってきました。もしかしたらここに何度か来ているうちに、失われた記憶が少しでも甦りはしないかと、そんなふうに思っていたからです。そして王子が、今日もどうせまた何も思い出すことはないだろうと諦めつつ、舟を洞窟の入口に乗り入れてみると、どうでしょう！自分が倒れていたのとまったく同じ場所に、人が倒れているではありませんか！

クリフ王子は驚きましたが、それというのも倒れているのが女性で、その上その女性が一糸纏わぬ姿で岩の上に横たわっていたからでした。

「君！しっかりしたまえ！」

薄暗がりの中で王子は女性の体を抱き起こして揺すぶりましたが、女性のほうからはなんの反応もありません。王子は女性の鼻の下に手をあて、息があるのを確認すると、乳房の間に耳をあてて、心臓の鼓動を確認しました。そして手首の脈をとってみると、極端に脈が少なくなっているのに驚き、とにもかくにもこの女性をもっと暖かい場所へと移動させ、服を着せてあげなくてはいけないと思いました。

クリフ王子はこの夏の暑さにも関わらず、身分を隠すためにマントを羽織ってきていたので、その灰色のマントを女性の体にかけて、舟の中へそっと運び入れました。そして自分も舟に乗りこむと、急いで櫂を漕ぎ、元きた海の道に戻っていったのです。



シーポーラは夢を見ていました。クリフ王子が海のほこらの前で倒れている自分の体を助け起こし、灰色のマントを着せて舟の中へ運んでくれるという夢です。そしてシーポーラが波にゆらゆらと揺られながら、

（これから王子さまはわたしのことをどこへ連れてゆかれるのかしら）

と思ったところで目が覚めたのでした。

シーポーラは柔らかな暖かい羽毛布団の中で目を覚ますと、（ここは一体どこなのかしら）と思いました。部屋の中を見渡してみると、今までに見たことのない物が、随分たくさんあります。天蓋つきのベッドに、美しい装飾の施された壁、金箔の張られた寄せ木細工の素敵な家具類や調度品などなど……。

（わたし、まだ夢を見ているのかしら？）

シーポーラがそう思っていると、部屋のドアをノックする音が聞こえてきました。きっとドアをノックした人は、シーポーラがまだ眠っているものと思ったのでしょう。どこか儀礼的に小さな音を二度鳴らしただけで、すぐ室内につかつかと入ってきました。そしてその途端、シーポーラの胸はどきどきと高鳴り、どうしたらいいのかわからなくなって、すっかり頭の中が混乱してしまいました。

シーポーラは裸の胸を羽毛布団を引きよせて隠しながらも、自分が何故そんなことをしているのかがさっぱりわかりませんでした。ただたまらなく自分が裸でいることが恥かしいと思いました。虹色の鱗で体をびっしりと覆われていた時には、一度もそんなふう感じたことはなかったはずなのに……。

「やあ、やっと目を覚ましたんだね。よかった。カリアル先生も、体のどこにも異常はないとおっしゃっておられたから、あとは何か美味しいものでも食べて、もう少し横になっているといい。僕が君を見つけた時には脈が極端に少なかったからびっくりしたけど、今はもう正常な値に戻っていると、先生も言っていたし……でも一応念のために、もう一度だけ」

シーポーラには、ミャクヲハカルというのがどういうことなのかさっぱりわかりませんでした。クリフ王子が腕を差しだしてほしいと思っているらしいということはわかったので、大人しく素直に、右の手首を差しだしました——そしてあらためてびっくりしたのでした！自分の手の指と指の間にひれがないこと、それから腕にも肩にも肘にも、皮膚を守るための鱗がひとつもなく、透きとおるように美しいということに。

クリフ王子もまた、名も知らぬ美少女の手首の脈を測りながら、（この娘はなんと美しいのだろう）と、白い肌にうっすらと浮きでている青い静脈を、見とれるようにじっと見入っていました。そして脈を測り終わってからも、自分が随分長い間ぼうっと少女の手首を掴んでいたことに気づき、慌ててぱっと彼女の手を離したのでした。

「う……うん。もう脈のほうは大丈夫みたいだね。ところで君、名前はなんていうの？」

クリフ王子は顔が熱くなってくるのを感じ、ベッドサイドから離れると、涼むためにバルコニーへ通じる窓を開けることにしました。

「……ポーラ」

シーポーラは、本当は<シー>ポーラと発音したかったのですが、舌がこわばっていてうまく自分の名前を言うことができませんでした。けれども王子は、シーポーラが名前を言い直そうと

する前に、

「＜真珠＞（ポーラ）か。君にぴったりの綺麗な名前だね。僕の名前はクリフトフ＝ラヴィニエール＝サイオニア。聞いたことがあるかい？」

遠くの、光輝く青い海から流れてくる潮の香りを一息吸うと、王子は再びシーポーラのいるベッドまで戻ってきて、さっきと同じ場所に腰かけました。

「わたし……わからない」

ポーラは美しい声で、けれどもどこかたどたどしい発音でそう答えました。知っているかと答えれば、どうして知っているのかと聞かれそうでしたし、かといって知らないと答えたら、どうしてサイオニア王国の王子である自分の名前を知らないのかと聞かれそうな気がしたからです。こうした矛盾は、人魚がテレパシーで会話をする分にはまずほとんど生じるはずのない種類のものでしたので、ポーラはすっかり混乱してしまっていたのです。

「ああ、ポーラ。泣かないでくれ」

目の前の美しい娘が突然細い肩を震わせてすすり泣きはじめたのを見て、クリフ王子はすっかりその涙に打たれてしまいました。

「怖がらなくても大丈夫だよ、ポーラ。君が僕のことを知っていようと知っていまいと、そんなのは大したことじゃないんだ。ただ僕はなんとなく、以前に一度君に会ったことがあるような、そんな気がしたものだから……」

それは本当のことでした。でももし以前に一度、こんなに美しい娘に会っていたとしたら——決して自分は彼女のことを忘れやしないだろうに、思いだせないのは何故なのだろうとも思うのでした。

クリフ王子はこれまで、＜王子さま＞という立場上、特定の女性と深いおつきあいというものをしたことがなかったせいか、女性が泣いている時、ことに彼女のように華奢で可愛い女性が涙をこぼしている時、どうしたらいいのかがさっぱりわかりませんでした。そしてある考えにはっと気づかされると、王子は先ほどと同じように——あるいは先ほど以上に——顔を真っ赤にしながらか、後ずさりするようにしてベッドから離れたのでした。

「僕……いや、わたしは君に何もしていない。神にかけて誓ってもいいが、脈を測った以外、君には指一本触れていない。だから何も心配する必要はないし、君が裸なのはもともと君がその姿で倒れていたからなのであって……そうだ！これから侍女のひとりに頼んで、服を持ってこさせることにしよう。それがいい」

ほとんど独り言を呟くようにクリフ王子はぶつぶつそんなことを言い、まるで盗みを働いたことがばれた盗賊みたいに慌てて＜貴人の間＞と呼ばれる客用寝室を出てゆきました。そして侍女頭のアメリアに、何着かのドレスと寝間着、一揃いの下着を用意するよう命じると、そのまま直接自分の足で、カリエール先生のいる北翼の棟へ向かいました。

王子は王の寝室のそばにある医務室で、ポーラが目覚めたということをカリエール先生に伝え、それと何やら様子がおかしいようだということも話しました。

「うむ。もしかしたら王子が倒れていた時と同じように、精神が錯乱しているか記憶が混乱しているのかもしれないな。ここはひとつ、少し順序立てて色々な質問を試してみることにしまし

よう」

クリフ王子は王宮の廊下を、カリエール先生と並んで歩きながら、彼女が何か思い違いをしていないといいのだがと、そのことばかりをずっと心配していました。ポーラのいる西翼の宮殿の＜貴人の間＞から、カリエール先生の医務室のある北翼の宮殿までは、歩いてゆうに十分はかかりましたが、ポーラのいる寝室では、まだ着替え中でした。それでクリフ王子は入室を遠慮したわけですが、カリエール先生は医師という職業柄もさることながら、お年を召していらっしゃるということもあり、「失礼します」と言うが早いか、さっさと室内へ入ってゆかれました。

クリフ王子はなんとはなし、そわそわしながら細かい彫刻の施された櫪の扉の前をうろうろ歩きまわっていましたが、そのうち侍女頭のアメリアの甲高い声などによって、ポーラが何故「わからない」と言ってさめざめと泣きだしたのかが、次第に少しずつわかるようになってきました。

「先生、この方少しおかしいですよ。下着の身に着け方がわからなかったり、服を後ろ前に着てみたり……ふざけているんだか、なんなんだか。あっこれ、お待ちなさいっ！」

クリフ王子が、どうやら一応のところ着替えは終わったらしいと思って室内に入ってゆくと、途端にポーラが彼目がけて走りよってきました。そして王子の背後へ、怯えたように隠れてしまったのでした。

「クリフ王子。クリフさまからも一言、なんとかその娘に言ってやってくださいましな。まったく、この人ときたら……」

サイネリア王宮、最古参の侍女、アメリアは両手を腰にあて、怒っているというよりは呆れたように溜息を着いていました。

「服の着方はおろか、口の聞き方すら知らないんですから。ただひたすらオロオロして、ぼろぼろ泣くばかりなんですもの。これじゃあなんだか、あたくしがいじめてでもいるような具合じゃありませんか」

「すまなかったね、アメリア」と、クリフ王子はすっかり怯えて震えているポーラのことを振り返り、微笑して言いました。「あとのことは僕と先生でなんとかするから、とりあえず今のところは下がっていておくれ。また何かあったら呼ぶと思うけど……」

「承知いたしました。それではあたくしはこれで」

アメリアはドアの前でスカートをつまんで会釈すると、部屋から退出してゆきました。

「大丈夫だよ、心配しないで。何も怖がることはないんだ。カリエール先生は君の具合を見てくれるお医者さんなんだよ。ほら、僕がついてるから……」

クリフ王子は、白い絹の寝間着を後ろ前に着ているポーラのほっそりとした白い手を握りしめると、安心させるように肩にも手をまわして、彼女と一緒にベッドの縁に腰かけました。

カリエール先生はバルコニーのそばから籐で編んだ椅子をベッドの前まで持ってきて座ると、何やら考えごとでもするように銀灰色の髪を何度も搔いています。

「君の名前はポーラ。それで合っているのかな？」

カリエール先生は山羊の毛のように白い眉の下から、優しい眼差しを投げかけるようにして、ポーラにそう聞きました。ポーラはこくりと頷き、それから隣のクリフ王子に向かってにっこりと微笑みかけました——ポーラの名前は本当はシーポーラというのでしたけれども、クリフ王子が

<ポーラ>という名前が自分にぴったりだと言っていたのを思いだし、その名前で呼ばれたように思ったからです。

「じゃあ、ポーラ。これが何がわかるかな」

カリール先生は真鍮の鏡台の上から鼈甲の櫛を持ってくると、それがまるで人を叩く道具であるかのように、空中に振りかざしながら聞きました。

「先生、それはクシというものです」

ポーラはたどたどしい口調で答えました。でも本当のことをいうとポーラは、そのクシというのが何をするものなのか、全然わかっていませんでした。けれども、クリフ王子の握った手の先から思念のようなものが流れこんできて、それが髪の毛を梳かす道具であるということがわかったのです。アメリカの心も、またカリール先生の心も、ポーラが読もうと思って読めないことはないのですが、アメリカの心は石のように硬く強張っており、カリール先生の心は棺の蓋のようなもので閉ざされているため、クリフ王子の心がポーラには一番読みとりやすかったのです。

「ふうむ」

さっきとはまったく様子の違うポーラのことを訝しく思いながらも、カリール先生は質問を続けることにしました。先ほど、アメリカが櫛を手にしてポーラの髪にあてようとした時には、彼女は半狂乱になって逃げだしたのですが。

「じゃあね、君が今着ているその服はなんというのかね？」

「パジャマです、先生」と、シーポーラはすぐに答えました。それから人は夜眠る時、今自分が着ているのと似たような格好をするのだということも、クリフ王子の心を読むことによって理解したのです。

「ふむ。じゃあ君は何故、そのパジャマを後ろ前に着ているのかな？」

「それは……先生。それはアメリカさんが無理にわたしをパジャマに着せようとしたからです」

ポーラはつかえつかえしながら、やっとそう答えたのですが、文法が間違っていました。それでカリール先生とクリフ王子は目を合わせて思わず笑いだしそうになってしまいましたが、ポーラには自分の言った言葉のどこがおかしかったのか、さっぱりわかりません。

「ふうむ。じゃあこれが最後の質問だよ。ポーラ、君は何故、あの海のほこらの中で倒れていたのかな？」

固く握りしめていたクリフ王子の手をそっと離すと、ポーラは白い絹の寝間着の裾をいじりながら、黙りこくったままです。

「話したくないのかい？それとも……何も覚えてないのかい？」

すぐ隣のクリフ王子が、心配そうに彼女の顔を横からのぞきこみ、優しい口調でそう聞きました。

「わたし……わかりません」

カリール先生は立ち上がると、ポーラの頭を撫でようとしたのですが、彼女は顔を両手で覆ったまま、また泣きだしてしまいました。それでカリール先生は、ちょっと外に出るよう王子に目で合図し、ドアを閉めるとポーラに聞こえぬよう、小さな囁き声でこう言いました。

「あの娘はおそらく……記憶喪失ですな」

「記憶喪失!？」と、王子が思わず大きな声をだしたので、カリール先生はしーっと、人差し指

を口にあてました。

「わたしも一度しか記憶喪失の患者を扱ったことはありませんが、その患者は馬車に轢かれた時のショックで、記憶を失ってしまったのです。その男も、自分の名前以外は何も思い出せませんでした。しかし、馬の蹄の音や馬車の車輪のまわる音なんか怖くて怖くて仕方ないんですな。他の医者仲間とも彼のことについては色々話しあったんですが、記憶喪失というのはどうも、極度にショックな出来事に出会うことによって引き起こされるものらしいのです。そして記憶を失った鍵となる現象に近づくのを、極度に怖れるのですな。その患者は結局、記憶をとり戻す前に不幸にも、もう一度馬車に轢かれて亡くなりましたが……」

「もう一度馬車に轢かれてだって？」と、王子はカリエール先生に怪訝そうに聞き返しました。

「だって、その男は馬の蹄の音や馬車の車輪のまわる音なんかを極端に怖がっていたのでしょうか？ だったら、馬や馬車のいる方へなど、自分から近づいていくわけがない。それなのに何故……」

「いえ、そうではないのです。実はその男、馬車に轢かれた時に左脚を駄目にしておりましてな、しかもその馬車の持ち主というのがどうも、地方の領主である有力貴族だったらしいのです。それで記憶をとり戻したあとに賠償金などを請求するための裁判を起こされては迷惑と、今度は事故ではなく故意に何者かの手によって消されたというわけです」

「そんな馬鹿な……そんな馬鹿な話があっというはずがない」王子は憤激しました。「その記憶喪失の男の家族か誰か、訴訟を起こす者はいなかったのですか」

「王子、どうか冷静になって考えていただきたい。ど田舎のびっこになった記憶喪失の農夫が貴族階級の人間に対して、果たして訴訟など起こせるものかどうかを」

「だが、しかし、それは……」と、クリフ王子は喉を詰まらせました。

「いや、失礼しました。わたしはその記憶喪失の男がどうこうというのではなく、あのポーラという娘のことをくれぐれもお気をつけなさいませう、王子に申し上げたかっただけなのです。どうか彼女が何か思いだしかけても、無理には記憶をとり戻させぬよう、お気をつけください。無理に記憶をとり戻させようとすると、廃人になる可能性もありますゆえ。それから……」

「それから？」

「あの娘は確かに美しい。ですが王子。王子は御自分のお立場というものをどうか肝にお命じください。下着や服の着方がまるでわからぬところを見ると、もしかしたら身分の高い生まれの娘なのかもしれませぬが、せめてあの娘の素性がわかるまでは……」

「わかっている」と、クリフ王子は不承不承といった体で、老侍医とは目を合わせないようにしながら答えました。でも正直なところ、内心では王子はまるで自信がありませんでした。ポーラの、自分のことを信じて疑わない純真な眼差しのことや、しみひとつなく美しい柔らかな白い素肌のことを思うと——王子はもう、あの娘がどこの誰であれ、ここへ閉じこめて王宮の外へはだしたくないと、そんなふうにする感じていたからです。

クリフ王子は、ポーラと出会ったその次の日には、もう彼女のことを愛しはじめていました。いいえ、もしかしたら出会ったその瞬間に、すでに恋に落ちていたのかもしれない……とすら思いました。

王子はポーラが侍女頭のアメリアと気が合わないらしいのを見てとると、侍女の中で一番大人しくて気弱そうなメアリーを、ポーラ付きの侍女にすることにしました。

実をいうとこのメアリーは、ひとつの仕事をするのにとても時間がかかるので、侍女たちの間では『のろまで愚図のそばかすメアリー』と呼ばれて馬鹿にされている侍女でした。

メアリーはクリフ王子の名前でポーラのいる<貴人の間>へと呼ばれましたので、最初はてっきり首になるものと思い、内心どぎまぎしていたのですが、櫛の扉を開けた先にはとても美しい女性がひとりいるきりでしたので、どうしたものかとすっかりおろおろしてしまいました。

「あっあのう……わたくし、何か王子さまの御気分を損なうようなことを、いつの間にかしてしまったのでございましょうか」

メアリーはスカートをつまんで会釈するやいなや、ポーラの足許に身を投げだすようにして、懇願する眼差しでもってポーラのことを見上げました。

「ああ、どなたかは存じませんが、お美しい方。どうか王子さまにとりなしてはいただけませんかでしょうか。我が家は貧しい農家でして、わたしの下には六人もの妹や弟がいるのでございます。ここのお給金をもらえなくなったとしたら、わたくし……身を売ってでもお金を稼がなくてはなりませんわ」

あんまり早口にメアリーがまくしたてるので、ポーラには彼女の言っている言葉の意味が半分も理解できませんでしたが、それでも彼女が何か必死に頼みごとをしているらしいということだけはわかりました。それでポーラはメアリーのひどく荒れてごわごわした手に鼈甲の櫛を握らせると、清冽な川の流れのような澄んだ声でこう言いました。

「たぶん、わたしの髪をこの櫛で梳かしてくださったら、クリフさまがなんとかしてくださることでしょう」

にっこりと微笑んでいるポーラのことを、メアリーはとても不思議な方だと思いました。そして彼女の深緑色がかった、豊かな黒髪を一櫛一櫛心をこめて梳かしていると、何故だか自分も嬉しいような楽しいような、清らかな気持ちになり、まだポーラがどのような人かもわからぬうちから、彼女のことが好きでたまらなくなってしまうました。

ポーラはといえば、メアリーが自分の髪をととても丁寧に梳かしてくれているうちに、彼女の心の内を読みとって、メアリーがとても清らかな、心の美しい女性であることを知りました。侍女頭のアメリアの心は石のように硬く黒ずんでいたもので、ポーラには読みとることが難しかったのですが、メアリーの心を読むことは、ポーラにとってとても心地好いことでした。それで、服の着方や脱ぎ方などを、言葉によって教わる前からポーラには理解できましたし、メアリーはほんの少しお手伝いするだけでした。

珊瑚礁のように青く澄んだ水色のタフタのドレスはポーラにぴったりでしたし、真珠の髪飾りで結った髪もとても彼女に似合っていました。今、宮廷の女性たちの間では、襟ぐりを大きく開いた形の、胸の谷間をあらわにさせるタイプのドレスが大流行していましたが、王子は首までぴったりと覆い隠すタイプのドレスを、ポーラのために特に選んでいたのです。

「まあ、なんてお似合いなんでしょう」

部屋のドレッサーの横にある、全身を映すための姿見をポーラの前まで持ってくると、メアリーはまるで自分がそのドレスを着てでもいるかのように、ほうっと甘い溜息を着きました。

「きっとこれなら王子さまも、御満足あそばされることでしょう」

ポーラは、セイレーンのセイラが言ったとおり、自分が人間の美しい娘であることを再確認し、驚愕のあまり震えおののいているくらいでした。

「ああ、メアリー……」

喘ぐようにポーラは呟くと、まるでおそろしいものでも見たように姿見に背を向けました。そしてシルクの絨毯の上に膝をつき、助けを求めるようにメアリーに抱きつきました。

「わたし、これから一体どうしたらいいのかしら？」

メアリーはポーラの瞳にうっすらと涙が浮かんでいるのを見ると、彼女と同じように膝を屈めましたが、ドアをノックする音が響いてきたので、先にそちらへ返事をしました。

「どうやら、すっかり仲良くなったみたいだね」

クリフ王子は、ドレスに着替えてますます美しくなったポーラに見惚れながら、ジャケットの内ポケットから金の懐中時計をとりだすと、それを褒美としてメアリーに渡しました。

「これから君には、ポーラ付きの侍女になってもらうけれど、このお嬢さんはびっくりするくらい本当に何も知らないから、どうかそこのところを踏まえて、よろしく頼むよ」

メアリーは、王子さまのことをこんなに近くで拝するの初めてなら、じかにお言葉を頂戴するのも初めてでしたので、

「わたくしのような者に、もったいないお言葉でございます。わたくしのほうこそ、ポーラさまには誠心誠意仕えさせていただきとう存じます」

その場に平伏して、王子のささやかばかりの心遣いである金の懐中時計を受け取ることも辞退して、慎ましやかに<貴人の間>から退出していったのでした。

この時メアリーは、王子のお心遣いを受けとりはしませんでしたでしたが、実際のところ、その後のメアリーのお給金は今までの三倍以上になり、仕事のほうはといえば今までの五倍以上楽になったのです。今までメアリーは、洗濯や掃除や調理や皿洗い、裁縫など、一日中目のまわる忙しさを片付けていたのですが、これからはただひたすらポーラのお世話だけをすればよかったです。しかもポーラはとても優しくかったので、メアリーが早く急いで仕事をしなくちゃと、焦らなくてはいけないようなことは、一度もありませんでした。だからメアリーにとってポーラに仕えるということは、毎日宮廷に親しい友達を訪ねて遊びにきているような、そんな感じのすることでさえあったのでした。



ポーラにとって王宮での生活は、まるで夢のように瞬く間に過ぎ去っていくもののように思われましたが、クリフ王子にとっては夢のようとはばかりも言っておられず、現実的な問題がカントオーネ王国との国境である、マスキル山脈にまで山積しているように思われました。けれども、ロイヤル＝サイオニア号難破事件以来、暗い海の底に沈んだ錨のようだった王子の心に、真珠の光沢のような虹色をした歓喜の輝きが、ポーラをとおして差しこんできたことも、また事実だったのです。

王子はまず、ポーラと正式に結婚するためにはどうしたらよいかということ、順序立ててよく考えてみることにしました。クリフ王子は、大変真面目な信仰深い方でしたので、父君のラドクリフ王のように愛妾を持つ、ということをお考えするのがまず不可能でした。それに、自分の父と母のような政略結婚だけはしたくないと思っておりましたし、愛のない結婚をしたがゆえに父は何人もの妾を召しかかえ、母は若いツバメを持つに至ったのだらうと、そのように解釈しておりました。

クリフ王子の初恋のお相手は、王子の家庭教師をしていたシャーロット先生という、優雅な気品ある美しい方でしたが、王子はシャーロット先生に恋している間中、何がどうあろうと彼女のことをお妃にしたいと心密かに願っていました。といっても、その時王子は十四歳で、シャーロット先生との年の差は一まわり以上ありましたし、先生には婚約者の方がいらっしまったのですが.....。

ともかくにも王子は、その時にはもう心に堅く決意していたのです。自分は必ず心の底から愛する人と結婚し、両親のような愛のない政略結婚だけはするものか、と。

そして王子がポーラのことを拾ってきてから一月あまりが過ぎたある日のこと、王子は病いの床にある父上から、朝の奏上のあとに呼びだしを受けました。実をいうとお父君のラドクリフ王はもう一年半以上も病いの床から下りられないという状態で、右半身が麻痺しておりました。それでクリフ王子との共同統治期間を設け、仕事の引き継ぎの間は王子が貴族院に出席して彼らの意見や苦情などを聞き、それを病臥の王に言上し、最終的にもっとも重要な書類には王がサインをするという形式がとられていました。

ラドクリフ王は病いの床に伏しておられるとはいえ、右半身が麻痺しているという以外は、非常に澆刺とされてお元気でしたので、国の政策方針やその骨子などについて、クリフ王子とたびたびぶつかりあっていました。ラドクリフ王としても、一日も早く自分の王の称号を息子に譲りたいと思っはいるものの、クリフ王子が今の潔癖な性格を曲げないでいるかぎりには、とても安心して王政を任せられないと、大変危惧しておいでだったのです。

クリフ王子は、サイオニア王国の今の現状を、一日も早く断固たる決意をもって変革する必要があると切実に感じておいででしたが、王子のあまりにストレートなやり方では、変革の前に暗殺されてしまうのではないかと、王は自分のひとり息子のことを大変心配しておられたのです。ですから、ロイヤル・サイオニア号沈没事件は、ある意味でクリフ王子にとってちょうどよい薬になったのではないかと、そんなふうに感じておいらっしまったのでした。もっとも、そのせいでこれからクリフ王子の片腕として働くべき、荣誉あるクロイツネイル家の嫡男を失ったことは

、王にとっても大変な痛手ではあったのですが……。

ロイヤル・サイオニア号難船の報を最初に聞いた時には、王は再び脳溢血を起こされるのではないかと思われるくらい、気落ちしておられました。息子が無事王宮に戻ってくるやいなや、鋭い剣のような冷たい言葉の数々を、彼は息子に浴びせたのでした——王はこれを機に〈宗教改革〉をはじめとする、政治全般における抜本的改革など諦めるよう、王子の心にお灸を据えようとしたのです。

「おまえは今回、ほとんど強引に宗教改革とやらを断行しようとしたが、そのおまえひとりの我儘のためにおまえ以外の九十九名もの尊い生命が失われることになったのだ。とりわけクロイツネイル将軍の死は、彼の父君にどう言い訳したらよいのかわしにもわからぬ。よもやクロイツネイル公爵がこの件を機に王家に叛意を持つとも思えぬが——クロイツネイル家は過去四百年以上にも渡って王家を支えた、武人の家系ゆえ——しかしおまえはくだらぬ宗教改革などのために失われた多くの人命のことに思いをひそめ、そのことをとくとよく考えてみよ！こんなことではわしは、おちおち安心して死ぬこともできぬわ」

王宮の廊下を大股に歩きながら、クリフ王子は王に叱責された時のことを思いだし、苛立たしさと腹立たしさとで胸がむかむかしてきました。実をいうとクリフ王子は、自分のお父さまのことが大嫌いだったのです。実際のところ、自分の父上が死んだところで、涙が頬をつたっていくかどうか、王子にはわかりませんでした。確かに王侯貴族の手前、悲しいふりをしたり、今にも泣きだしそうな演技をするには違いないと思うのですが、自分は何故あんな父親の息子なのだろうと、王子は王としてではなく、人間として自分の父親のことを軽蔑しきっていたのです。

クリフ王子は北翼にある、王の寝室の扉の前までくると、敬礼している近衛兵に向かって王に王子が参上した旨伝えるよう命じました。

重厚なオーク材の扉の前にいた二名の兵士のうちひとりが、  
「王さまからは、クリフさまが参りましたら、黙ってそのままお通ししてよいとのことでした」

敬礼の姿勢のままそう答え、もうひとりの兵が恭しく、扉の右側を開きました。

「どうぞ、お通りを」

クリフ王子は白い執務服の襟を整えながら、赤い絨毯の上を真っすぐ歩いてゆき、緞子の前まで来てから膝をついて、頭を垂れました。

「ラドクリフ王の第一子、クリフトフ。ただ今御前に参上いたしました」

金糸銀糸で縫われた赤紫色の緞子の向こう側からは、若い女の囁くような笑い声が聞こえ、ラドクリフ王の野太い、人を威圧するような声がそれに続きました。

「そう堅苦しいことを言うな。まあ階段を上がってベッドの近くまでくるがいい。おまえに話したいことがあるのだ」

クリフ王子は王の言いつけどおり、大理石の階段を上がると、緞子を分けて王の寝室へと入りました。

「失礼いたします」

ラドクリフ王は天蓋つきの、広々としたベッドの上に横になっておられましたが、その隣には

年若い、下着姿の娘がひとりはべっていました。王は彼女の手には握りながら、ベッドの背もたれに体を預け、衣服の乱れも彼女に無言で整えさせています。

「今日は一体いかなる御用件なのですか、父上」

クリフ王子がさも軽蔑しきったような、冷たい侮蔑の眼差しを若い娘のほうに向けると、彼女は恥じらうように顔を真っ赤にして、タオルや桶などを慌てて片付けています。

「おお、怖いう、カミーラ」と、王は少女のほうをちらと見、震え上がるような仕種をしてから、

「ごくろうであった」

そう彼女に優しくねぎらいの言葉をかけました。

「おまえはきっと何か考え違いをしているのだよ、クリフトフ。カミーラはただ、動けぬわしの体をタオルで拭いてくれていただけではないか。わしはほらこのとおり、半身不随の不具の身ゆえ……」

「なんのことをおっしゃられているのか、わたしにはさっぱりわかりません。あの娘は王の新しい側女で、体を拭いていた、ただそれだけのことではありませんか」

<ただそれだけではない>ということを重ね承知していながら、クリフ王子はあえて当てつけるように王にそう言いました。

「やれやれ。相変わらずだのう」

寢室の脇部屋の向こうに下がったカミーラの後ろ姿を眺めながら、王は溜息を洩らしています。

「おまえとて、人のことは言えなかりょうに。おまえが一月ほど前に拾ってきた、どこの馬の骨とも知れぬ娘……クリフよ、おまえは結婚もせぬ前から、女を囲いはじめるつもりなのか。わしでさえ、あれがおまえを生むまでは、妾のひとりも持たなんだのに……」

王はいつも、公式の場以外では、クリフ王子のことをおまえと呼び、お妃さまのことをあれと呼んでいました。そしてお妃さまの名前というのが、先ほどの娘と同じ、カミーラという名前なのです。

クリフ王子は慚然として、自分の父上に言い返しました。

「お呼びになったのは、そのことだったのですか。それなら御心配には及びません。わたしはポーラのことを、正式な妃として迎えるつもりでありますから。ポーラはととても……容姿だけでなく、その心根までもが美しい、よい娘です。王も一度、彼女にお会いになれば……」

クリフ王子がみなまで言い終わる前に、王はファッ、ファッ、ファッと、特徴のある笑い声で、呵々大笑なさいました。

「さてはおまえ、その女にすっかりたぶらかされておるのであろう。近うよって、その女の様子をわしにとっくりと詳しく聞かせよ」

クリフ王子はビロードの背もたれの肘掛椅子から立ち上がると、王のベッドの脇へと腰かけました。

「何をお聞きになりたいのですか」

「決まっておる。どうやってそのポーラとかいう女が、潔癖症のおまえを口説いたのか、それを知りたいのじゃ」

王は年老いてなお、つやつやしている色艶のいい顔を、王子の耳元に寄せてそう言いました。先ほどのお気に入りの侍女にさせたのでしょうか、王のふさふさした白髪頭はきちんとカールされておりまして、髪粉もつけてあって、お召物さえおとり替えになれば、王の威厳を傷つけるものは何もなかったと思われます。

「ポーラは、王がお考えになっているような、そのようなふしだらな娘ではありません。海のほとりで倒れているところを偶然わたしが助けたという、ただそれだけなのです。わたしは……ポーラのことを妻に迎えることができるのなら、王の言うとおり、政治改革を断念してもよいと、そのようにすら思っています。ですから、わたしの一生に一度の我儘を、王にお許しいただきたいのです」

腹に据えかねる思いをなんとか忍びつつ、クリフ王子はこの譲歩案を王に提出いたしました。けれども心の奥底では、王亡きあとに、断固改革を推進する心積もりであったのです。

「いや、許せぬ」

王は切って捨てるような、きっぱりとした口調で息子に申し渡しました。

「そのようなことは決して許せぬぞよ。あれにも聞いてみるがいい。何を血迷うておるのかと、おまえのことを厳しく叱責するであろう。あくまでも妃は正妻、妾は妾じゃ。あれの意見を聞いてのち、もう一度頭を冷やしてから、ここに顔を見せい」

予想通りの展開に溜息を着きつつ、クリフ王子は形ばかりの敬礼をして、王の寝室の間を辞去しようとしていました。ところが王が最後に、

「ところでおまえ、その娘とはもう床をともにしたのであるかな？」

好奇心に満ちた声音で、からかうように王子に問いかけられましたので、クリフ王子は腹立たしげに緞子をめくって、振り返りもせずつかつかと大理石の柱の間を歩いていかれたのでした。

そして最後にまた、ファッ、ファッ、ファッ、という特徴のある笑い声が出たかと思うと、ベルの音が二度鳴り、「カミーラ！カミーラ！」と、王がお気に入りの側女を呼ぶ声が、王子の背中に聞こえたのでした。

クリフ王子が中庭を突っ切って、南翼にある王妃の館を訪ねたところ、王妃は外のガラスの温室におられるとのことでしたので、王子は生け垣がまるで幾何学模様の迷路のようにになっている外庭を通り抜け、やっとのことでお母上のいる温室へと辿り着くことができました。

「母上、お探しいたしました」

王子は肩で息をしながら額の汗を拭き、見事な薔薇の花園の主である、年老いてなお美しい、お母さまの手をとって御挨拶しました。

「そなたに会うのは、かれこれ一週間ぶりだったかの。元気にしておったかえ」

王妃は息子の接吻を受けた手指に白い長手袋をはめ直すと、もう自分のひとり息子にはちらとも目をくれず、薔薇の手入れを再開しはじめました。

「ええ、まあ」

王子は母上の隣で見事に咲き誇っている赤やピンクや白や黄色の薔薇の香りをかぎながら、暫くの間パチンパチンと鋏で薔薇の茎や葉が切りとられてゆくのを見つめたあとで、慎重にこう話を切りだしました。

「きっともう母上もお聞き及びのこととは思いますが、僕は一月ほど前に海のほこらである娘のことを拾ってきました。母上、単刀直入に申しますが、僕は彼女と結婚したいのです。決して一時的な気の迷いなどというではありません。父上は、母上がなんというかを聞いて、頭を冷やしてから出直してこいと申されましたが……母上？」

王妃が突然くつくつとさもおかしそうに喉の奥で笑われはじめたのを見て、クリフ王子は訝しげに首を傾げました。

「わらわがなんというかを聞いてから……とな」

カミーラ王妃はまたくつくつと笑いながら、鋏を棚の上に置いています。

「ようするにあの方はわらわにそなたを教え諭せと、そうおっしゃられたのであろう。馬鹿馬鹿しい。そなたもサイオニアの次期国王となる身なれば、己のことくらい己でしかと決めよ。わらわはそなたが誰を伴侶にしようと、別に反対はせぬぞえ。わらわがあの方と結婚した頃はの、まだ戦乱の激しい時代だったゆえ、政略結婚で嫌々ながらも夫婦<sup>めおと</sup>にならざるをえなんだが、今はこのとおり実に平和で貴族どもが私腹を肥やして太りきっておる時代だから。そなたがここでひとつ喝を入れて国を変えるもよし、どこぞの馬の骨とも知れぬ小娘と結婚して離縁するもまたよし、じゃ」

「母上、何を申しておられるのですか。わたしは彼女と……ポーラと離縁するつもりなど、毛頭ありませぬ。聖書にも書いてあるではありませんか。『それゆえ、男は父母を離れ、女と一体になるのだ』と。また、神が結び合わせて夫婦にしたものを、人が引き離すことはできないとも書いてあるではありませんか。なればこそ、母上も父上と離縁などせず、今日まで……」

「そなた、母であるわらわに向かって説教をするつもりかえ」

カミーラ王妃はくるりと振り返ると、敵意に満ちた眼差しで、自分の息子のことを睨みつけています。

「実に不愉快じゃ。もうよい。下がりや」

クリフ王子は、こうなってはもはや母上の御前から姿を消す以外にないということを重々承知しておりましたので、温室の前で一礼すると、迷路のような幾何学模様の生け垣の間を縫うようにして、東翼にある自分の部屋へと戻っていったのでした。

実をいうと、クリフ王子はご自分の母上のことがとても苦手でした。カミーラ王妃はサイオニア王国では春先にしか咲かぬ薔薇を四季咲きにする研究及び青い薔薇に関する研究を長くなさっておいででしたが、その研究費用及び造園のための費用と云ったら……国の財政の十分の一をゆうに圧するほどでした。

また王妃は、見どころのある絵描きや彫刻家、それに音楽家や詩人などをいづこからか見つけてきては次々と召し抱え、芸術全般を擁護するお立場にある方でもありましたから、それらの者に湯水を使うが如く経済的な援助を惜しまれない方としても有名でした。けれどもそうした財政支出があまりにも果々しいものであったので、王子は一度だけ王妃をお諫めしたことがあるのですが、一喝されて部屋を追いだされて終わりといったような有様でした。

王子はすっかり冷めてしまったポタージュスープに、パンを浸して食べていましたが、明日王

に母上が申されていたことをどのようにお伝えしたらよいだろうと思うと、あまり食が進みませんでした。

「クリフさま、何かお悩みごとでもあるのですか？」

ポーラはクリフ王子とふたりきりで、少し早めの夕食をとっていましたが、王子がぼんやりして、どこことなく元気がないような感じのするのが、とても心配でした。

「いや、なんでもないよ。僕の可愛い拾われっ子さん。君は何も心配せず、ただ毎日自分の興味のあることを勉強して、僕のそばにいるために、知識や教養を増してくれさえしたらそれでいいんだよ。シャーロット先生も、ポーラの覚えがあまりに早いので、教え甲斐があってとても楽しいとおっしゃっておられたし……」

「ええ。シャーロット先生のこと、わたしも大好き」ポーラはにっこりと可愛らしく微笑みながら言いました。「たぶん、クリフさまとメアリーの次くらいに、シャーロット先生のが好きですわ」

「じゃあ、僕とメアリーとでは、どちらが一番なの？」

「ええと、それは……」

ポーラがホタテとオマールエビのスープを、困りきったような顔をして見下ろしているのを見て、王子は優しく微笑みました。

「わかってるよ。男の人では僕が一番で、女の人ではメアリーが一番なんだろう。さあ、早くお食べ。猫舌の君でも食べられるくらい、もうスープは冷めているはずだよ。食事が終わったら、今日勉強したところの復習をしよう。そのあと僕のためにピアノを弾いてくれたら、そのお返しに、ポーラの好きな絵本を読んで聞かせてあげるよ。そしたら今日はおしまいだ」

ポーラは再びにっこりと微笑みながら、大好きなカキ入りのシチューを食べ、野菜やパン、デザートや果物などを食べました。ポーラは鳥や獣の肉を食べると体が受けつけなくて戻してしまうのですが、パンや野菜、果物や魚介類などは、なんて美味しいのだろうと思っていくらでも食べられそうな気がするくらいでした。そしてクリフ王子は、ポーラが幸せそうに食事をしているのを見るたびに、自分も幸せな気持ちになるのをいつも感じていました。王子はポーラのように純真な女性にはこれまで一度も出会ったことがないと思っていましたし、どうしても彼女のことを自分のお嫁さんにしたいと思っていました。

けれども、そのためにはまずポーラのことをたしなみと気品のある、一流のレディに育てあげなくてはなりません。幸い、ポーラはシャーロット先生が『まるで真綿が水を吸収するように』と形容されるほど、物覚えが早く、一般教養はもちろんのこと、言語学や数学、哲学、音楽など、なんにでも興味を示して次から次へとそれらを自分のものにしてゆきました。とりわけ、ポーラはピアノやハープ、ヴァイオリンなどを演奏するのが巧みで、その人の心を打つ楽曲は、まるで魂のアリアそのものといっても過言ではありませんでした。

ただポーラは楽譜というものがまったく読めませんでしたので、自分が弾いている曲を音符として五線譜の上に表す、ということができませんでした。それで、宮廷音楽家のひとりが呼ばれて、彼女が心のままに演奏する曲を、次々と五線譜に表していったのでした。また、その曲が先頃宮廷の夜会で演奏されて大変評判になったこともあり、王子は一日も早くポーラのことを自

分の婚約者として王侯貴族のみなに紹介したいという気持ちでいっぱいでした。

そしてそう思う気持ちと同じくらいの強さで、純真なポーラのことを世俗の垢にまみれさせたくないとの思いも混在し、自分がもし王子という身分でさえなかったなら……と、時々ひどくポーラのことを不憫でたまらなくなることもありました。

ポーラはあまりにも純粹で、アコヤ貝の真珠のように傷つきやすかったので、権謀術数の渦巻く宮廷で果たして穏便に暮らしていけるものかどうか、クリフ王子は彼女の無邪気な微笑みを見るにつけ、不安でたまらなくなることがしばしばあったからです。

## 第6章

その夜、王子がポーラの額におやすみのキスをして寝室を出ていこうとした、ちょうどその時——クリフ王子の第一従者であるアントニオが、ラドクリフ王の訃報を王子の耳にお入れしました。

「父上が……？」

廊下の燭台の明かりの照り返しを受け、王子の顔は神妙に曇りました。

「そんな馬鹿な。今日の午前中にお訪ねした時には、実にお元気そうなお様子だったのだぞ。それが突然急に悪くなるとはとても思えぬ。まさかとは思うが、もしや……」

刺客が、と言いかけた王子に、忠実なアントニオは頭を垂れて、哀悼の意を表しました。

「はっ。それが、カリール先生のお話によりますと、ある種の急激な興奮により脳溢血でお倒れになられたのでは、とのことでした。詳しいことはまた王子が王さまの寝室に参られました時にしたいと先生は申されておいででしたので、王子はどうか、今すぐにでも……」

「無論、そのつもりだ」

王子はそう答えるが早いか、踵を返して、王の寝室のある北翼の宮殿へと向かいました。革靴の音がモザイク模様の冷たい床の上に響き渡り、廊下の燭台の明かりが王子自身の影を壁に投げかけています。

クリフ王子はまだ実感がわからないせいか、父王の死を悲しいとは思いませんでした。それより、自分がこれから王位を継承するにあたって内部にいる反乱分子がどう動くか——これからの政治情勢についてあれこれ思いを巡らせながら、渡り廊下を歩いていったのでした。

クリフ王子が赤紫色の緞子を分けて王の寝室へ入室すると、ベッドの上には両手を組み合わせた父の臨終の姿、その両脇にはカリール先生と泣き崩れている側女のカミーラの姿がありました。

「王子、この度は……」

弔辞を述べようとするカリール先生を手で制すると、王子は先に事情を聞こうとしました。何より、何故今側女がここにいるのか、そのことが気にかかりました。

「父が、もう一度脳溢血を起こしたら命が危ないということは、前から先生に聞いてわかっていたことです。以前から覚悟はしていました。ただ、今日の午前中にお訪ねした時には王はお元気であられたのに、何故突然このようなことになったのか、それをわたしは知りたいのです」

「それはですな、その……」

カリール先生が言いにくそうにちらとカミーラのほうを見やったので、王子はいかにも忌々しいといった顔をして、泣きじゃくる側女に向かって冷たくこう言い放ちました。

「もう下がってよいぞ、女。それに今宵限りでもう二度とこの部屋へは呼ばれることもないであろうから、安心するがいい」

カミーラは真っ赤な顔をしたまま、跪いて深々と一礼すると、脇部屋のほうへ下がってゆきました。そしてこの脇部屋の通路の先には、王の抱える妾たち専用の部屋がしつらえられてあったのでした。

クリフ王子は昼間と同じ、王の色艶のいい肌や上気したような薔薇色の頬を見て、なんとなく



不審に感じました。あまりにも自分の父の死に顔が穏やかなので、とても死んでいるようには思われず、ただ安らかに眠っているようにしか見えませんでした。

「父の死には、先ほどの下女が何か関わっているのですか？」

「ええ、まあ……」と、カミール先生は言いにくそうに言葉を続けました。「ようするに、先ほどの女性が王のお戯れの相手をされている最中に、王は脳溢血を引き起こされたと、そういうわけですよ。わたしが駆けつけた時にはもう……王は息を引きとっておられました。彼女は最初、てっきり王が悦に入っておられるものと思って、王のご様子の変化に気づくのが遅れたようです。カミールさまにもご連絡したのですが、今宵はもう疲れて眠いので、面倒な話は明日以降にしてほしいとのことでした……けれども逆にそのほうがよかったのかもしれない。先ほどの側女はあまりにも、王妃のお若い頃に似ておりましたから」

「ふむ」

王子は顎に手をやると、目を閉じてしばしの間考えごとに耽りました。王妃である自分の母の若い頃によく似た、それも同名の側女というのがなんとなく引っ掛かったのです。

「あの娘がいつ頃から王にお仕えするようになったのか、先生はご存じですか？」

「いいえ、知りませぬ。しかし、わたしがあの娘のことを見たのは今日が初めてですから……後宮へきて、まだ日が浅いのではないのでしょうか」

クリフ王子は王の枕元にあったベルを二度鳴らすと、近衛兵を呼んで後宮の監督官である宦官のカルシュナを呼びにいかせました。あのカミールという側女が本当にカミールという名前なのかどうか、また彼女の素性について詳しく知りたいと思ったからです。しかし、このカルシュナという声の甲高い禿頭の男は——実をいうとラドクリフ王の弟で大蔵省の大臣でもあるカイゼルベルクのまわし者でした。彼はロイヤル・サイオニア号難船の報を聞いた時に自分の実の兄である王を穩便に暗殺する計画を思いついたのです。そこで後宮の監督官であるカルシュナに大金を握らせると、いかにも好色な王の好みそうな若い女性に、夜の相手を勤めさせたというわけなのです。

もっとも、当然のことながらクリフ王子はそのような事情をご存じありませんから、宦官のカルシュナが平伏して、カミールの素性について淡々と述べるのを、特に不審にも思わず黙って聞いていました。そして自分の杞憂だったかと思い、ラドクリフ王の死を脳溢血の発作によるものと断定し、王宮の書記官にもサイオニアの歴代誌にそう記すよう命じたのです。

ラドクリフ王の莊嚴な葬儀が終わり、クリフトフ王子が正式にサイオニア王国の王となった時、民衆は歡呼にわき返りました。クリフ王子——いえ、クリフトフ＝ラヴィニエール＝サイオニア王が王の就任式で民衆に語った言葉の中には、減税案を推進するという約束ごとが含まれていたからです。

このことに難色を示したのは、当然ながら事前に何も知らされていなかった貴族院の王侯貴族たちや枢密院の神官たちでした。クリフトフ王は＜農地改革＞の柱として小作人制度を廃止しようとしたから、広大な領地を持つ貴族たちにはたまったものではありませんでした。当然のことながら議会は紛糾し、小作人が地主から借りた土地を七年耕して税金を納めれば、その土地

の所有権は小作人のものになるという法案は、一旦見送られることとなったのです。しかし、そのかわりに王は国中の小作人の小作料を一エーカーごとに一定にするという譲歩案を議会で認めさせましたので、それまでその土地土地の地主が自分の考えによって勝手に取り決めていた小作料は、大分支払いやすくなるはずでした。

この貴族院の会議では、血こそ流れませんでした。毎日がそれこそ戦争のようなものでした。その上大蔵省の大臣(財政総監)でもあるカイゼルベルク卿が、何かと王と試案について反目いたしましたので、議会は常に真っ二つに割れていました。そこで動いたのが、王母であられるカミーラさまで、彼女はあらゆる情報網を駆使して、クリフ王のことを援助しました。まず彼女は大蔵省に何人かの刺客を送りこみ、財政査察官のコスティアスという男を抱きこむと、カイゼルベルク卿を公金横領の罪で訴える口実を見つけだそうとしました。また同時にこの頃、枢機卿のフィッツジェラルド卿が心臓発作で突然亡くなったというのも、カミーラさまにとってはなんとも都合のよいことでした。彼女は王である自分の息子に、フィッツジェラルド卿亡きあと彼の財産をすべて没収して国に返還させるよう助言しました。すなわち、百四十万エーカーもの土地や五千点にもものぼる絵画や彫刻などの美術品、四万巻にもものぼる蔵書の数々を国のものとして、新たに枢機卿に就任したモディアール卿には〈宗教改革〉を断固推進する熱意のみを求めたのでした。彼は枢密院で行われた投票によって選ばれた枢機卿ではありましたが、もはやなんの力もなく、司法権まで王に奪われてしまったのでした。そうなのです——〈農地改革〉の次にクリフトフ王が着手したのが、司法省の改革でした。それまで司法は枢密院の神官たちが裁判官としてその役職に就いていたのですが、王は自分が大法官の地位に就任すると、陪審員制度をとることにしたのです。すなわち、この陪審員には貴族や有力市民などが選ばれ、傍聴席には一般の民衆も出席することが許されるようになったのでした。

あともうひとつ、クリフトフ王には懸案事項があって、それは海港ダニスにほど近いサイゴン島にある王立賭博場をどうするかということでした。クリフトフ王は、前王のラドクリフ陛下が心配なさっていたように、大変潔癖な性格をしておいででしたから、賭博という行為そのものを許すことができなかつたのです。けれどもこのことを母上であるカミーラさまに相談したところ、賭博場は国の繁栄しているしるしとして、廃止すべきでないといひ責されてしまいました。それに、賭博場で多額の金をするのは私腹を肥やしている貴族たちばかりなのだから、大いに散財させてむしろそれを国益としたほうがよいというのでした。

カミーラさまは正式に摂政の地位に就いておられたわけではありませんが、クリフトフ王はもうその頃には、自分の母の政治的才覚を認め、何か事が起こった時にはカミーラさまに真っ先に相談するようになっていました。実際のところ、王にとって彼女は非常に優れた影の参謀でした。クリフ王が自分の母のことを何かの役職に就けたほうがよいのではないかと考えた時にも、彼女はそれを辞退し、あくまでも政治の表舞台には出ようともしませんでした。そうなのです——彼女の母国であるカンツォーネ王国の前王は、カミーラさまにそのような政治的才覚が備わっていればこそ、自分の娘である彼女を隣国へ嫁がせたのですが、彼が望んだとおりに事は運ばなかつたのです。すなわち、サイオニア王国とカンツォーネ王国との三十年戦争ののち、二国間で交わされた和平条約は次のようなものでした。これから後十二年間はいかなる理由によっても互いの国を侵略しないこと、またカンツォーネ王国のアルブレヒト王の長女カミーラ王女はサイオニ

ア王国の現国王ラドクリフ王と婚約するが、もしふたりの結婚後に男子が誕生しない場合、サイオニア王国は再びカンツォーネ王国の領地として併合されるものとする——カミーラ王女には当時、心から深く愛しあっていた海軍の提督がいたのですが、結局政治の道具として隣国へ嫁いでなくてはならなかったのです。カミーラさまはそのことで大変ご自分のお父上をお恨みになっておりましたから、その仕返しにと、何がなんでもラドクリフ王との間に男子を生んでみせると意気こんでおりましたし、またそれだけでなく、カンツォーネ王国の間者がサイオニアの宮廷に姿を見せた時にも彼らをひとり残らず血祭りに上げて、自分の父への返礼としたのです。

そのような事情もあってか、カミーラ王太后はクリフトフ王とポーラの交際には非常に寛容でした。確かに普通に考えればこれは尋常ならざることなのですが、カミーラ王太后だけではなく、今では王侯貴族の誰もが——ふたりのことをお似合いのカップルとして公認していました。それは何故かという、王宮歌劇場でポーラが歌う歌声に、その秘密がありました。彼女の美しい天使のような歌声を一度でも耳にしたことがある者は誰も、ポーラはさる高貴な生まれであるということ信じずにはいられなくなり、ついにはそれが強烈な暗示として記憶の中に刷りこまれるようになったのです。つまり、ポーラがどこの誰かは誰にもわからないのだけれど、とにかく彼女はクリフトフ王に相応しい身分を有しており、そのことについて深く考えようとすると頭痛が起きるといった具合に。

それでもふたりが御成婚されたのは、ラドクリフ王が崩御された約二年後のことでした。その間クリフトフ王は政治改革を断行するのに忙しく、御結婚の準備をするどころではなかったのです。ポーラはそのことを特に不満に感じたりするような娘ではありませんでしたし、何よりクリフさまのおそばにいられるだけで毎日この上もなく幸せでした。ただし、王宮で七日の間祝われたふたりの盛大な結婚式ののち、初めてポーラは人魚が人間になったことに対する代償について、深く自覚させられることにもなったのですが。



(イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」 <<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

## 第7章

クリフトフ王とポーラ姫の結婚式は、国の内外から千人以上もの貴顕が呼び集められた、それは盛大豪華、華麗なる結婚式でありました。毎日大晩餐会と大舞踏会が繰り広げられ、王宮歌劇場ではオペラやバレエ、野外劇場では騎馬競技が行われて、いつどの時間にも貴賓客を飽きさせるということがありませんでした。そして夜には壮大な仕掛け花火が夜空を飾って、夢のような一日が終わるといふわけなのです。

ふたりの結婚式には隣国のカンツォーネ王国の現国王夫妻はもちろんのこと、周辺諸国の主立った王さまやお妃、王子や王女が招待状を受けとっていましたから、誰もがみなサイネリア王宮の輝くばかりの壮麗な宮殿に目を見張りました。この時招待を受けていたエスカルド王国のシベリウス王子は、この結婚式のことを次のように記録として書き記しています。

<我々は、サイオニア王国を侮っていたのやもしれぬ。元は長くカンツォーネ王国の属領下にあった、七十ばかりの島国を集めただけの、ほんのちっぽけな小国であると。しかし、わたしがこたびのクリフトフ王とポーラ姫の結婚式へ参ったところ、首都サイネリアにある宮殿は華麗を極め、また国の贅を尽くした催し物にも目を見張るものがあった。何よりわたしが驚いたのは、サイオニア王国の文化的水準の高さである。中でも、王太后のカミーラさまの名を冠した王立図書館や美術館のコレクションは他の国に見られぬほど充実しており、その他わたしが是非にと王太后に頼んで見学させてもらった王立のタピストリー工場やガラス工場では、最新の技術による素晴らしい芸術品が日々生みだされているのである。あの技術水準の高さに比べたら、我が国のゴブラン織り工場や陶器工場などまるで話にならぬ。しかし王太后は我が国の織物職人や陶器職人の何人かと、自国のガラス職人や高級家具師の幾人かを、交換留学させてはどうかと、こうおっしゃられた……わたしが一も二もなく王太后さまの案に飛びついたのは、言うまでもなく当然のことである。

帰りの船に乗りこむ時、クリフトフ王は二国間の友好のしるしにと、船倉に穴が開くのではないかというくらいの、奢侈品の数々をお土産にくださった。すなわち、たくさんの神話や聖書の物語が描かれた精緻なタピストリー、様々な意匠を凝らした黒檀の戸棚や置き筆筒、その他寄せ木細工のコモードなどである。これから我々はこれらの作品を王宮で目にするたびごとに、サイオニア王国の今後の文化的隆盛について思いを馳せ、さて自国はどうであろうと思案することになるだろう……>

とはいえ、エスカルド王国のシベリウス王子とはまったく別のこと——すなわち、再びサイオニア王国を侵略してそれらの文化的・芸術的財産を我がものとしようとする、カンツォーネ王国のユトレヒト王のような方もいらっしゃいました。この方はカミーラさまの実のお兄さまであり、以前は妹御であられるカミーラさまと非常に仲がよかったのですが、互いの国の情勢が影響してのことなのでございませうか、今では赤の他人のように冷たい関係となられておいででした。

一応、カミーラさまは王太后として失礼のない対応をユトレヒト王におとりしたのですが、そ

こにはもはや普通の兄と妹との間に見られる情愛のようなものは消え失せており、肌寒いような儀礼的挨拶があるのみでした。

ユトレヒト王はサイネリア王宮の華麗を極める豪華さに目を見張り、毎夜嫉妬のあまり来賓室で自分の妃に愚痴をこぼす始末でした。何しろカンツォーネ王国はサイオニア王国との三十年戦争が終わったあと、今度はマスキル山脈を国境とするもうひとつの国——セイラムネイト王国に反乱を起こされ、その戦費調達のため国内が弱体化し、増税によって国民はみな喘いでいましたから、今のサイオニア王国のように文化的・芸術的事業にお金をかけるような余裕など、どこにもなかったのです。

大蔵卿カイゼルベルクは、この王の婚姻の宴を機会にユトレヒト王とお近づきになり、何かと思わせぶりの甘い言葉を王のお耳に囁いたのですが、結局のところ彼はこの十年後、公金横領の角で失脚しアディオオン島に幽閉されることになりましたので、ユトレヒト王の野心はその息子、マイヨリヒト王子の代に受け継がれることとなります。

ポーラはといえば、自分の結婚式が国家的事業であるなどとは夢にも思わず、またこの自分とクリフトフ王との婚姻の宴の水面下で何か政治的思惑が働いていようなどとは露知らず、ただもうひたすら（こんなに幸せでいいのかしら）と隣の立派な王衣を身に纏ったクリフ王のことを、うっとりで見上げるのみでした。

新婚初夜の夜、ポーラは人魚同士の交接の仕方と人間のその違いに驚き、また恥じらいもあり、最後には泣きじゃくってクリフトフ王を困らせたのですが、王はただひたすらそのようなポーラの純真さが可愛くてならず、とにかくもう口付けを繰り返して彼女のことを慰めるのみでした。

「大丈夫だよ、ポーラ。これは僕が心からポーラを愛しているという、その証拠のようなものなんだから……僕は決してポーラのことを裏切りもしなければ苦しめもしないし、一生の間ポーラのことだけを愛すると誓おう。だからポーラも、生涯僕のことだけを愛してほしいんだ」

「ええ、クリフさま。ポーラは生涯何があろうと、クリフさまだけを愛します」

ふたりは新婚初夜らしく互いの愛をそのように確かめあってから、裸で抱きあったまま深い眠りへと落ちていったのですが、夜明け前のもっとも闇の深い時刻——ポーラの変身がはじまりました。これまでポーラはクリフトフ王が彼女のために建てた離宮の寝室でひとり眠っておいりましたので、それほどその変身については神経質にならずにすんだのですが、心から愛する王とこれから毎晩枕をともにする以上、彼女はよくよくそのことに注意しなくてはなりません。

ポーラは深い闇の中で、ぐっすりと眠る王をお起こししないようそっと身仕度を整えると、廊下を急ぎ足で歩いて行って大理石の室内浴場へと向かいました。なんといってもそこが人に姿を見られない一番安全な場所でしたし、ひとたび人魚の姿に戻るやいなや、彼女は水が恋しくてたまらなくなるからでもありました。以前に一度、王宮の庭園にある噴水で気持ちよく泳いでいたところ、警護の兵に見つかって彼らの記憶を奪わねばならない事態に直面したことがありましたので、ポーラはこの離宮を王が建てはじめられた時に是非とも広い室内浴場をと、おねだりしたのでした。

クリフトフ王は王としての執務がどんなに夜遅くまでに及ぼうと、必ず<真珠の離宮>まできてお休みになられる方でしたから、ポーラとしてもなるべく王のお心をお慰めしたく思っておりまして、そのために翌日寝不足になろうとなんであろうと、とにかく夜明け前のもっとも暗い時間、大理石の浴場に身をひそめ続けました。もちろん時には王がお目覚めになられて「どこへいくんだい？」と眠そうなお声で聞かれるようなこともありましたし、ポーラの戻ってくるのがあまりに遅いので、侍女を起こして彼女を探させたというようなこともありました。そうしたことはふたりが婚姻を結んでから一年の間に二度ほどありはしましたが、その頃ちょうどポーラは懐妊して、喜びのあまり夜明け前に毎日一時間変身することの煩わしさなど、どこかへ吹き飛んでしまったくらいでした。

ポーラが身ごもったことを喜んだのは、クリフトフ王やカミーラ王大后、宮廷の家臣のみならず、サイオニア王国の全国民までもが熱狂に湧いたくらいでした。ふたりが結婚した時、サイネリアの城下町から海港ダニスまで、天蓋なしの馬車に乗ってパレードしたのですが、その時のポーラ王妃の優雅な気品や優しさあふれる笑顔のことを民衆は誰もが今も忘れていませんでした。その日、王宮の入口にある凱旋門からふたりが馬車に乗って出てくると、国民はみなサイオニア王国の繁栄を象徴する花である百合を手にして、新しい王さまとお妃さまに敬意を表したのでした。

ポーラ王妃は御結婚されてから、時折王立歌劇場でお歌いになる以外はあまり公式の場に出席しておられませんでした。それでも国民からは熱狂的に崇拝されておりました。宮廷の家臣たちの間でも、また国民の間でもポーラさまが公式の場にあまりお出にならないのは王がお妃さまのそのお美しさを独り占めしたいからだろうとの噂が流れており、実際のところそれはまったくそのとおりだったのでした。

クリフトフ王は誰彼かまわずにっこりと微笑む無邪気なポーラのことを、なるべく人目にさらしたくなかったのです。彼女はまさに王にとって、その名のとおり大切な真珠でした。そして真珠というのは大変傷つきやすいものなのです。王が王宮の会議の間や執務室での仕事の合間合間に思うのはいつもポーラのこと、彼女が今何をしているか、退屈していないか、ほんのちょっぴりでも不愉快な思いをしていないか、そんなことばかりが王は気になって仕方ないくらいでした。そしてクリフトフ王は自分の王妃への愛のあかしにと、王宮の外の庭園に動物園まで作りました。そこでは猿や孔雀や象や駱駝や熊など、その他珍しい動物たちがいて、ポーラはその見慣れない陸上の動物たちを飽きもせず毎日眺めてはテレパシーでお話ししたものでした。

ポーラのお腹が目に見えてだんだん大きくなってきた頃の、クリフトフ王の気の配りようといったらあまりにも神経質で、王妃に仕える侍女はみな、笑いたいのをこらえるのがやっとなくらいでした。何しろポーラが食事をする時にスプーンを手を持つのさえ、体に触るのではないかと心配するくらいだったのでから……。

けれどもポーラ本人にしてみれば、懐妊した喜びも束の間、次第にある不安が胸にこみ上げてくるようになりました。それはつまりこれから生まれてくる赤ちゃんのことです。果たしてこの子は人間の子として生まれてくるのでしょうか？それとも半人半魚の子供として生まれてくるのでしょうか……ポーラは懐妊してからもやはり夜明け前には人魚の姿に戻りましたので、生まれてくる子供がもし自分と同じ体質を受け継いだとしたらと想像しただけでもおそろしくなりま

した。そのせいで王の前では出来るだけいつもの明るいポーラを演じようとはするものの、ひとりになった時にはいつも、ロザリオを手にして一心に祈っておりました。

（おお、どうか神さま。わたしは罪を犯しました。陸と海との種族の壁を越えて、あなたさまのおとり決めになった掟に背いてまでも、わたしはクリフさまと一緒になりとうございました。最初わたしはそのことを罪とは思いませんでしたけれど、今は聖書に書かれている原罪ということの意味が、痛いほど身にしみてよくわかりました。でもどうか主よ、慈悲深いイエス・キリストよ。どうかこれから生まれてくる無垢な赤子である何も知らないこの子にだけは、その罪を負わせなさいませぬように。愛してはいけない人を愛してしまった罰ならば、わたしひとりがすべてこの身に負いますゆえ……ですからどうか神よ。慈悲深いイエス・キリストよ……）

ポーラは信仰深いクリフ王とともに、毎日曜、王宮礼拝堂にて礼拝を守っておりましたし、今では人魚たちの信じる〈造物主〉（エホバ）と聖書に書かれた神が同一人物であるということがよくわかっていました。神さまはこの世界にただおひとりであられ、地上に生きるものを造られたのも神なら、海の中に棲む生きものを造られたのもまた、同一の神なのです。そのことを理解した時、ポーラの頬には涙がありました。確かに人魚は人間の三倍以上の寿命を持っているかもしれないけれども、果たしてその魂は人間と同じように天国へゆけるのだろうか……そしてポーラはそれ以来、毎日のように神さまに熱心にお祈りし続けてきたのです。どうか神さま、わたしのお父さまもお母さまもお姉さまも、お義兄さま方も、人魚のみなが全員、あなたさまの天国へ死後にゆくことができますように、と。

クリフトフ王はまた、遅々として進まぬ宗教改革に痺れを切らして、王妃の安産を願うという気持ちもこめ、国中の聖堂や礼拝堂の補修工事や建て直しを推進する事業に着手しました。同時に、国を活性化させるための土木事業も展開し、少しずつ豊かになりつつあった市民階層はこの頃ますます王政に信頼を置くようになります。それだけでなく王は、大法官としても大変優れた裁きをなさいましたので、ラリス川の中洲に建てられた法務院では、王が裁判長の席に座られる時、市民が傍聴席を得ようとして長蛇の列を作るのはほとんど毎回見られる光景だったといっ

てよかったです。ポーラは出産予定の月が近づくにつれ、それこそカルヴァアの丘にいる気持ちで、血の滲む思いで毎日祈っておりましたし、彼女のお腹の子供の父であるクリフトフ王もまた、神に忠実に従ったダビデ王のように、多忙を極めながらも正しい生活を心がけるといって、そのような大変立派な方でありましたのに——どうしてあのような悲劇が起こってしまったのか、わたしにはまったくもってわかりません。

陣痛がやってきた時、ポーラは人払いをして、もっとも信頼している侍女であるメアリのことさえ近づけず、当然ながら王宮づきの侍医であるカール先生のことを呼ぶようなこともせず、たったのひとりでなんとかこの出産という難事業に挑もうとしていました。

その日の午後、初めて軽い陣痛に襲われた時、ポーラは動物的な本能によって、そろそろ子供が生まれる時期であるということがわかりました。そしてブロンズの像の時計が三時きっかりを指しているのを見て、すべては時間との勝負だと、覚悟を決めたのです。

ポーラはその日、隣の控えの間にいるメアリの王がきても決してお通ししないようにと厳しく言いつけておきましたし、それがどんなに苦しいものであろうとも、子供は必ず時が満ちれば生



まれてくるという自然の摂理を信じようと思いました。ただし、以前に一度カミーラさまが、大変な難産を経験して最後には帝王切開でクリフトフ王のことをお生みになったと話されていたのを思いだして——体が震えるのを感じました。

（大丈夫よ、大丈夫……お腹の子供の力と、神さまを信じるのよ）

その後、三時間四時間と経過し、だんだんに陣痛の間隔が短くなっていくにつれ、激しい痛みがポーラのことを襲いはじめました。夜の九時になる頃には額から脂汗が次から次へと流れ、あまりの苦痛に叫び声を上げそうになったくらいでしたが、ポーラは必死の思いでそれをこらえました。そして王立図書館で見つけた女性の出産に関する医学書に書かれていたことを思いだし、口にはさるぐつわをかみ、ベッドの天蓋から吊るした紐を力いっぱい掴んで、なんとか出産の時間が訪れるのを待ちました。

陣痛の苦しみは長く続き、ポーラにとっては永遠にも感じられる長い間、彼女は産褥の苦しみに耐えねばなりません。その苦しみの最中に一度だけ、メアリが眠る前に御用伺いに参りましたが、ドアの外で控える彼女にポーラが返事さえしなかったためでしょう、メアリはそのまま静々と下がっていったようでした。おそらくポーラがすでに就寝したものと思ったのではないのでしょうか。

その時ポーラは苦しみの中にもほっとするものを感じ、またクリフ王がまだ離宮にこられていないことにも安堵いたしておりました。

（今、自分はこんなにも苦しい……）

そのことを思うと、出産は間近だと感じましたし、なんとか子供さえ生んでしまっ、その子がきちんとした人間の赤ん坊なら——自分はもうどうなってもいいとさえポーラは思っていたのです。

しかし、不幸なことにはその日、クリフトフ王は王宮の図書室で裁判のための資料を探したり、また王宮の記録を書記官とともに調べる仕事などに熱中するあまり——王がポーラのいる＜真珠の離宮＞を訪れたのは、夜明け前の、闇のもっとも濃い時間帯でした。

ポーラは王が王宮の図書室の蠟燭をすべて吹き消し、その鍵をかけた頃に離宮でようやく出産したのですが、その時にはもうすでに＜変身＞がはじまっていた。ポーラは自分がちょうど人魚に戻ろうとする一瞬前に出産を終え、指と指の間にひれのある手でハサミを掴むと、自分がたった今産んだばかりの赤ん坊の、臍の緒を切りました。

「わたしの赤ちゃん……」

ポーラは鱗のある顔に涙を流しながら、愛しい我が子に頼ずりました。その男の子の赤ん坊は、きちんと人間の男の子の様子をしており、その時ポーラは出産を無事に終えることのできた喜びのあまり、クリフトフ王が今まさにここへやってくるかもしれない可能性のことなど、どこかへ吹き飛んでいました。けれども王は離宮の階段に足をかけた時に、オギャアオギャアという赤ん坊の元気のいい泣き声を耳にしていたので（もしや……）と思い、急いで階段を上り、廊下を走ってやってきたのでした。

「ポーラ！」

王妃の寝室を開けた時、クリフトフ王が目にしたもの——それは一体なんだったのでしょうか



。虹色に光り輝く何か得体の知れない不気味なものが、盛んに泣き叫ぶ赤ん坊を腕に抱えています。

「貴様っ！何奴……！」

王は帯刀していた剣を素早く鞘から抜きますと、化け物目がけて斬りかかってゆきました。ポーラは自分の肩に向かって振り下ろされた剣を、子供を守るために避けることができませんでした。そしてよろめいて床に倒れた時に、そっと赤ん坊をそこに置き、這いつくばりながら窓を開け、バルコニーから飛び下りたのです。

地面に着地した時、軽く足をひねりましたが、それでもまだなんとか走れました。ポーラはお産を終えた直後の弱った体で迷路のような庭園を抜け、また王が仕向けた王宮の警護兵に見つからないようにしながら逃げなくてはならなくなりました。でもそんなことは到底不可能なことのようには思われます。何故ならポーラにはもう、人間の頭の中から記憶を消すほどの力もありはしませんでしたし、体だって虹色にぴかぴか光っているのです。これではもう見つけてくださいと言っているようなものでした。そしてポーラが万事休すと思って、綺麗に刈りこまれた生垣の影に膝をついた時——手に燭台を持ったひとりの人間の女性が、彼女のことを発見したのです。

「しっ、どうかお静かに！」

彼女はローブのようなものをポーラの肩からかけると、燭台の火を吹き消して、ポーラと一緒に生垣の影に隠れました。すぐ目の前を王宮の警護兵が何人か、足早に通りすぎてゆきます。

『メアリ……どうしてここに……』

ポーラは涙を拭くと、彼女の心に直接語りかけ、また同時にすべてを知ったのです。メアリは以前に一度、ポーラが夜明け前にどこかへいこうとしたその後を尾けたことがあって、実はその時にポーラの正体を知ってしまったのです。そして心の金庫に中に鍵をかけてそのことは秘密にしていたのですが、ポーラがきのう人払いをした時に、きっとお産の時が近づいているに違いないと直感したのです。きのうの夜、御用伺いに声をかけたのも、ひとりで出産しようとしているポーラが苦しんではいないかと心配してのことであり、また彼女は一晩中寝ないで、隣の部屋の気配に耳を澄ませていたのです。

『もし王さまがやってきたとしたら、なんとしてでもドアの外でお待ちになるようにと、お止めしようと思ったのです。それがこんなことになってしまって……』

メアリはエプロンで涙を拭くと、自分の心優しい女主人のことを抱きしめました。

「すみません、ポーラさま。わたしがいたらないばかりに、あなたさまにこんなにもおつらい思いを……」

メアリはポーラの肩から血が流れていることに気づくと、エプロンでその部分をぎゅっと縛って止血いたしました。幸い、人魚の鱗はとても硬いものなので、剣の傷はそう大したものではなかったのです。それよりも精神的な打撃——愛する者に剣を向けられたというショックが、あの時ポーラのことを動けなくさせていたのです。

ふたりはそのまま匍匐前進するような形で王宮の北側を流れるラリス川を目指し、あやうく警護兵に見つかりそうになるたびにメアリは「わたしはポーラさまにお仕えする侍女で、ポーラさまをお探ししているのです」と警護兵に答えて難を逃れました。

やがて円形の野外劇場や動物園の脇を抜け、マロニエの並木道を過ぎるとラリス川の岸辺近くに到着しました。けれどもその断崖絶壁の上から川に飛びこむのは、人間にとってはほとんど自殺行為のように思えましたし、メアリはポーラの身を案ずるあまり、崖下の川の激しい流れに、眩暈すら覚えました。

『大丈夫よ、心配しなくても』

ポーラは闇色のローブを脱ぐと、自分の左腕から一枚虹色の鱗を剥がして、それをメアリの手に握らせました。

『これまであなたがわたしによくしてくれたお礼よ。これを生きている人間が食べると、どんな病気もたちまち治ってしまうの。わたし、海の国へ戻っても決してあなたのことを忘れないわ、メアリ……』

「わたしこそ、ポーラさま。あなたさまは侍女仲間から馬鹿にされ、いじめられていたわたしのことをとり立てて、その上たいへんお優しくしてくださいました。そのお陰でどんなにわたしが心を救われたか……」

遠くのほうで、警護兵が笛を鳴らす音が聞こえてきました。ふたりは互いに手を握りあい、もう一度抱きあうと、泣きながら体を離して別れを惜しみました。おそらく、もうこのふたりが出会うことは二度とないでしょう。でもそれでも、美しい友情と真心だけは、ふたりの心の中で永遠にすたれることはないに違いありません。

やがて、警護兵の笛の音がこちらへと近づいてきました。ポーラはさよならのかわりにメアリの額に口づけると、悲しみの中にも微笑みながら、崖下の川の中へと身を投じました。この時、激しい川の流れを下って河口を目指すポーラの心の中には、自分に対する心配は少しもありませんでした。ただ、メアリが警護兵から厳しい取り調べを受けたりしなければいいのだけれど……と、そのことがとても気がかりでした。そして愛するクリフトフ王と、生まれたばかりの自分の子供のことも気がかりでなりませんでした。

(ああ、愛するクリフさま。ポーラはあなたさまにこの人魚の姿を見られてしまった以上、海の国へと帰らなくてはなりません。あなたにだけは決して、この醜い姿を見られたくはなかったのに……ああそれに、わたしたちふたりの愛の証しである可愛い赤ちゃん。母なしでおまえはどうやって育っていくというのでしょうか。どうか至らない母のことを許しておくれ。そのかわりお母さんは遠くから、おまえのことを見守っているからね)

それからポーラはメアリのことを思いだし、彼女が自分の正体を知ったあとでもその前と態度が全然変わらなかったことに、胸が熱くなるのを感じました。その上、人間の目には化物のように映るであろう自分のこの姿を間近で見ても、メアリは驚くでもなくただ優しくいたわってくれたのでした。

(ああ、神さま！どうかメアリのことを、あの可愛い人のことをどうか、幸せにしてあげてください！そのためならばわたしは、どんなに厳しい罰でも受けますから……)

ポーラが河口付近までやってきた時、太陽はすでにその顔を水平線上にだし、海港ダニスの波止場では、幾艘もの漁船がロブスター漁に出ていくところでした。ポーラはまるで、曳航されるように彼らの船の後についていくと、途中で別れてサイゴン島の脇を通りすぎ、その時に遙か遠

くのサイネリア王宮の尖塔を見上げて、陸の世界に——心から愛する夫と息子とに永遠の別れを告げて、あとはただひたすら自分の生まれ故郷であるミドルネシアの海底神殿を目指したのだ。



(イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」 <<http://www.first-moon.com/>>のもので  
すm(\_ )m)

## 第8章

ポーラが失踪したあとの、クリフトフ王の落胆ぶりといったら、見るも痛々しいばかりでした。あの夜、王は泣きじゃくる赤ん坊を抱きかかえて、部屋中くまなく王妃のことを探したあと、半狂乱になって人を呼び集めました。そして生まれたばかりの赤子を侍女たちやカリエール先生の手にとすと、自らの手で王宮警護団の指揮をとり、ポーラと不審な人物のことを捜しにかかったのです。不審な人物——王は警護団の隊長に、それを虹色に輝く化物だとは説明できなかったのです。とにかくどんな些細なことでも洩らさず自分に報告するよう、夜勤の警護兵全員に通達したのです。

王は厩舎から愛馬を引きだしてくると、自分の手で鞍を乗せ、鐙に足をかけて綱に手をやると離宮近辺から広い庭をくまなく探しはじめました。王はこの時、まだ心の中に希望を持っていました。何故とって、ポーラ付きの侍女で、今は離宮の侍女頭でもあるメアリが、彼が見た時控えの間にはいなかったからです。

（きっと、これには何か事情があるのだ。ポーラはおそらく今、メアリと一緒にいるに違いない。そうするとあの化物は一体……？）

クリフトフ王には、訳のわからないことだらけでした。それでも王はその明晰な頭脳によって、次のような推測を立てていました。つまり、ポーラとメアリは真夜中にカリエール先生さえ呼ばずにふたりだけで無事子供をとりあげ、おそらくはほっとしていた矢先にあの化物が現れた……化物の姿に驚いたふたりは、赤子を置いて外へ逃げざるをえなかった、というように。

広い庭園のあちこちで篝火が焚かれるようになると、王宮の外はさながら昼間のような明るさでした。王は手に持っていたカンテラの火を消すと、〈妖精の噴水〉と呼ばれている大理石の噴水の前にそれを置き、大きな声でポーラの名を呼びながら彼女のことを捜し続けました。そして王が果樹園のあたりやら、彼がポーラのために作った〈真珠王妃の花壇〉のあたりを馬に乗って捜している時に、ひとつの報告が王の耳にもたらされたのです。

「警護兵のうちのふたりから、ポーラさまを捜しているメアリとかち会ったとの報告を受けました。彼女の話によると、真夜中に不審な物音で目が覚めた時、もはや王妃さまはお部屋にいらっしゃられなかったと……」

「そんな馬鹿な！」

クリフトフ王は怒りのあまり下馬すると、近くの樹に馬を繋いで、警護兵の隊長に思わず、自分が王妃の寝室で見た化物の話をしてしまいました。

「あれは、あれは……決して人間などではない。こう、虹色の鱗のようなもので全身を覆われていて、わたしはそれに斬りかかっていったのだ。しかし鱗は鋼のように硬く、どれほどの傷を負わせたか、わたしにもわからん。とにかくその化物が赤ん坊を連れ去ろうとしていたのだ。果たしてあれはどこかの国の間者なのか、それとも……」

王が花壇の花を踏みつぶしながら、落ち着かなげにうろうろと歩きまわっていると、警護兵の隊長のもとに新たな情報をもたらされました。北のマロニエ並木のあたりで、何やら不思議な光を見たとの報告でした。

「それだっ！」思わず王は叫びました。「その不思議な光の正体を突き止めた者には、褒美

として百万レーテル遣わすぞっ！早く追っ手をマロニエ並木のほうに差し向けるのだ！」

そう言うが早いか、王も樹から馬の手綱を離し、ひらりと愛馬に飛び乗るが早いか庭の列柱廊を駆け抜けて北のマロニエ並木へと急ぎました。隊長の笛の音が鳴り響き、四方八方から警護兵という警護兵が呼び集められ、すぐにその数は百人を越えるようになり、

「ポーラ王妃をさらったと見られる不審者を捕らえた者には、王から褒美として百万レーテルが与えられる！」

との伝令が飛びかいました。しかし、王宮の警護兵たちにとって、王からの褒美の額はなんら問題ではありませんでした。それよりも、あの美しい自分たちの誇りでもあるポーラ王妃を攫った不埒な卑劣漢を八つ裂きにしてやりたい思いで一杯だったのです。

クリフトフ王を先頭にして警護兵の隊長が笛を鳴らしながらマロニエ並木に差し掛かった時、兵士の数は二百人を越えておりましたが、松明を手に掲げ持つ兵士たちが再び四散してその近辺を捜しはじめた時——ラリス川がその下に流れる、切り立った崖のほうから、ひとりの女の影が現れました。

「メアリ！メアリではないか！わたしはおまえにもっと詳しく事情を聞きたいのだ。こちらへきて、王妃がいなくなった時の様子をよく話しなさい」

メアリは兵士たちの物々しい様子や、殺気立った気配に肝を潰される思いでしたし、ましてや気の毒な王に向かって真実を話すことなどは、とてもできないことでした。かといってメアリは本当に純真な娘でしたので、うまく嘘を言い繕うようなこともできず、王の足許に身を投げだすと、狂ったように泣き叫ぶことしかできませんでした。

「……こんなことになったのはすべてっ、すべてわたくしの責任でございますっ！牢屋に入れるなり打ち首にするなり、どうか王さまの好きになさってくださいましっ！」

そういう間にも、メアリはわあわあとわめき散らして、やがて兵士たちの何人かが彼女のことをとり囲みはじめました。みな王の判断を待っているのです。その頃には夜が白々と明けはじめておりましたから、薄い闇の中でメアリの赤毛が寝起きの時のように乱れ、そばかすだらけの顔が泥や涙で汚れてくしゃくしゃになっているのがよくわかりました。

本当なら王は彼女に、（おまえのせいではないよ）と優しく慰めの言葉をかけてやりたいくらいでしたが、今のこの状況ではそういうわけにもいきませんでした。王は警護兵の隊長にあたりをくまなく搜索するよう命じると、他の兵士たちにメア리를捕らえて王宮の〈衛兵の間〉まで連れてくるよう厳かに命じました。そこで王自らの手でメアリのことを取り調べるつもりであったのです。

〈衛兵の間〉の控え室のひとつで王はメアリとふたりきりになると、テーブルを挟んで彼女と差し向かいになりました。六月とはいえ、真夜中から明け方にかけては薄ら寒いものです。メアリはすっかり疲れきったような顔をしておりましたし、その上顔色が青白く、まるで病人のような顔つきでした。この時には王は大分気持ちが落ち着いてきており、一度離宮の王妃の寝室で、カリール先生と少し話をしてから王宮北翼の〈衛兵の間〉へとやってきたのでした。

王はまだ望みを捨てたわけではありませんでしたが、それでもなんとなくポーラがもう二度と

自分の元へは戻ってこないのではないかという予感がして、メアリと向きあったまま、しばしの間無言でいました。この離宮の侍女頭からポーラのゆくえについて決定的な一言を話されるのが怖かったのです。

「メアリ。おまえがどんなにポーラのことを愛し、またポーラもおまえのことを信頼していたか、わたしはよく知っているつもりだ。だからたとえそれがどのような事情のものであるにせよ、真実を話してほしい。わたしはきのうの夜……いや、正確には今日だが、深夜の三時頃に離宮へいった。そして階段に足をかけて三段もいかないうちに、元気のいい赤ん坊の泣き声を聞いたのだよ。あたりは静かな暗闇に包まれていたが、その時わたしの心には光が灯った。とうとう時が満ちて、王家の跡とりが——わたしと他でもない愛する王妃との間に、新しい生命が無事誕生したのだと思った。わたしは喜び勇んで階段を駆け上がり、廊下を走っていった。だがわたしが王妃の寝室で見たものは……何か得体の知れない虹色をした化物だった」

嘘のつけない正直なメアリは、この時思わずびくりと体を震わせてしまいました。緑色をした瞳の中には涙があり、その涙が静かに頬を伝ってゆきます。

「単刀直入に聞こう」王はテーブルの上で両手を組み合わせると、寝不足と疲れから、深い溜息を洩らしました。「メアリ、おまえはあれを見たんだろう？正直に言いなさい。そんな話をしても誰も信じないというので嘘をつく必要はないんだ。何故って、わたしもあの化物を目撃したのだからね。おまえはあの正体不明の化け物がポーラを連れ去るのを見た……それで半狂乱になって庭中を捜しまわっていたんだろう？だがわたしが思うには、あの化物はポーラを連れ去ったあと、どこかに彼女を隠して、今度は生まれたばかりの赤ん坊をおそらくは殺す目的で戻ってきたのではないだろうか。はっきりしたことはまだよくわからないが、衛兵の何人かがマロニエ並木のあたりで、何か光る物体を目撃したと証言している。おまえはそれを追っていたんじゃないのかい？」

「はい」とも「いいえ」とも答えず、メアリは暫くの間押し黙ったあとで、次第にまた啜り泣きはじめました。女性の涙に弱い王は、それ以上厳しくメアリのことを追求しはしませんでした。それでもかなりのところ自分の立てた仮説を信じていたので、おそらくはそれがもっとも真実に近いだろうと考えました。すなわち、ポーラとメアリが無事子供を取り上げたあと——あの化物が寝室に入ってきて驚いたメアリは、ポーラのことと赤ん坊のことも放っぼってひとり逃げだしたのだろうと。けれども王妃を置いて逃げてしまった自分を恥じ、彼女がおそろおそろもう一度戻ってきた時には、寝室にポーラの姿はなかった……すっかりとり乱したメアリは庭中を泥だらけになりながら捜しまわったものの、ポーラの姿を見つけだすことはできなかった——それが王の立てた仮説でした。

クリフトフ王は王宮の庭の広さを呪いたい思いで、迷路のように入り組んでいる生け垣の間か、幾何学庭園の茂みの中からでも気を失ったポーラが発見されはしないかと、警護兵の報告を今か今かと待ち望んでおりました。けれども結局三日三晩王宮中をくまなく搜索したにも関わらず、ポーラの姿は見つからず、その頃になってようやくメアリがぼつりぼつりと衛兵の質問に答えはじめるようになって、ポーラ王妃の搜索は打ち切られることになったのでした。

メアリはとても、心の底からポーラのことを愛している王さまに真実を話すことも嘘をつくこともできなかったのですが、王宮の衛兵相手になら、虚実入り混じった話をして、それほど胸

の痛みを覚えずにすみません。何しろ正式の取調官ではない衛兵ときたら、千人以上もの警護兵が毎日王宮を上へ下へと王妃のことを捜しまわっていると言っては、それもこれもあんたのせいだと言ってメアリのことをちくりちくりと責めたからです。

「……ポーラさまは、お亡くなりになりました」

それでも流石にその衛兵も、メアリがそう口を開いた時には、「嘘をつけ！」と言って顔に怒りをあらわにして彼女のことを詰りました。

「本当です。わたしは何か得体の知れない化物がポーラさまのことをさらい、北の断崖絶壁の上からラリス川へ飛び下りるのを見たのです。あとのことは王さまの推測のとおりですので、わたしにはこれ以上、話すべきことは何もございません」

メアリがこう話すと、今度はラリス川の上流から河口に至るまで、サイオニア王国の誇る海軍がポーラ王妃の遺体の捜索を開始しました。けれども当然のことながら化物の死体もポーラ王妃の亡骸も見つからず、一週間ほどで特別捜索隊は解散されることになります。

メアリは慈悲深い王さまの恩寵によって何も刑を課されることなく牢から釈放され、それだけでなくこれまで王妃によく仕えてくれた褒美にと、大変な額の退職金を渡されて、家へと帰されました。

実際には王家の記録の書にはポーラ王妃が化物に攫われたということはひとつも書き記されておらず、王妃の死は産褥死ということになっていたのですが、警護兵の間には緘口令が敷かれておりましたので、このことは王侯貴族たちの間でも公然の秘密として扱われました。

以来、夜勤を勤める警護兵の間には夜明け前の闇のもっとも濃い時間帯に〈妖精の泉〉から虹色をした化物が現れるとの評判が立ちましたが——それは何も根拠のない噂、というわけではありませんでした。ポーラは以前その大理石の噴水で泳いでいるところを警護の兵に見つかったことがあり、その中でひとりだけ記憶を奪い損ねた人間がいたのでした。彼——マキシム・ヨーデルハイトは、一応王の耳にそのことを御報告したのですが、王はマキシムからその話を聞くとすぐに、政務を放りだしてひとり自室に籠ってしまいました。王はその時こう考えたのです。おそらくあの化物は以前から離宮の近辺に身をひそめて、王妃のことを攫う機会を待ちまうけていたのだらうと。そのことに少しも気づくことのできなかった自分の迂闊さを王は呪いました。そしてこうも考えました。王は貴族たちや警護兵の間に流れる、妖精が王妃の美しさに嫉妬して彼の国へと連れ去ったのだ、などという馬鹿げた話は頭から信じておりませんでしたので、あの化物はいずこかの国からか差し向けられたスパイだったに違いないと決めつけました。何故とってそれ以外に王妃を連れ去り跡とりの王の御子息の命を奪って得をしそうな人物は、国内ではカイゼルベルク卿以外には存在しなかったからです。

それまで王はカイゼルベルク卿に対して、政敵とはいえ一応は自分と血の繋がった叔父であることを考慮して、寛大な態度で接してきたつもりでした。そこで公金横領の疑いが持ち上がった時にも見逃してやったりしていたのですが、次に何かそのような疑惑が持ち上がった時には——徹底的に調査して彼を島流しにする心積もりでいました。またポーラ王妃の死から一年後に、隣国カンツォーネから縁談話が持ち上がったのですが、王はこの時にあの化物はきっとカンツォーネ王国の間者だったに違いないと確信し、ユトレヒト王の次女、ミリアム王女との縁談を無下に

お断りしてしまいました。当然のことながらユトレヒト王はかんかんになって怒りましたが、サイオニア王国と戦争を起こすだけの財政的なゆとりが国庫にまるでありませんでしたので、「今に見ておれ」ととりあえずは沽券を保つためにミリアム王女をセイラムネイト王国のネイシャン王子にほとんど押しつけるような形で婚約させました。

カンツォーネ王国は昔から、周辺諸国に大変嫌われている国でしたので、今では彼の国から独立を果たしたベルグンド王国、エスカルド王国、バールワシュティ王国、ヨゼフファリア王国、ミッテルレガント王国などはサイオニア王国の永久独立への後押しをしておりました。何故といえば、今文化的・芸術的交流を通してサイオニア王国はそれらの国々と親交を深めつつあり、もし再びサイオニア王国がカンツォーネ王国の属領下に置かれることになると、精緻なタペストリーやガラス工芸品、高級家具を輸入するのに大変な税金がかかるのは目に見えておりましたし、またその職人たちひとりにつき大変な技術料を彼の国がせしめようとするであろうことは目に見えていたからです。

そのような事情はさておき、ポーラが王宮から姿を消したあとの一年間、クリフトフ王は大変な試練の時を過ごされました。何分、王妃を失った失意と悲しみのあまり、御公務のほうにまるで力が入らず、この時期はカミーラ王太后が正式に摂政の座に就いて代わりに政務をこなしたほどでした。サイオニア王国の国民は、ポーラ王妃が王子を出産後に亡くなられたと聞いてみな非常に悲しみました。そして王と悲しみをともにするために、一年の間喪服を身に纏って生活することさえしたのです。ポーラ王妃が亡くなった一年間は大変黒い服が流行いたしましたので、王はそのことに気づいた時に、これではいけないと思い以前のように政務に情熱のすべてを傾けようとされたのですが、その御無理がたたったのでしょうか、原因不明の発疹を伴う高熱に二十日の間うなされ続けました。そして静養をかねて北の湖水地方のほうへお出かけになり、そこで三か月ほど過ごしたのちに——再び御公務へと復帰されたのでした。

クリフトフ王がこの時なにより一番心にかけてしたのは、ポーラ王妃の忘れ形見である自分の息子、ダニエルのことでした。もしここで自分が死ねば、あの小っちゃな息子の肩にサイオニア王国の行く末のすべてがかかることになるのです。確かに、彼が成人するまでの間はカミーラ王太后が摂政として、また孫の後見人として立つことになるでしょう。しかし、カミーラさまだって今はお元気でも、いつなん時自分のように突然病いに倒られるかわかりませんし、王は母のいない哀れな息子のことを思って、せめても政治的に磐石な基盤をしっかりと築いてから彼に王位を継がせたいように考えたのでした。

クリフトフ王は湖水地方で静養されている間、美しい湖に白鳥が飛来してくるのを見ては涙を流されました。そして自分はその深く悲しい湖を心の底に溜めたまま、これからの一生を生きていく決心をなされたのです。





(イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n様」<<http://www.first-moon.com/>>のもので  
すm(\_ \_)m)

それから、十四年の歳月が流れました。サイオニア王国はカンツォーネ王国以外の周辺諸国と親交を深め、国庫も潤っており、国民の生活水準も以前に比べて随分向上いたしました。今では地方の小さな村のどこにでも学校がありましたし、どんな貧しい家の子供であろうと上の学校へ進学できるような制度もきちんと確立され、国の識字率もとても高くなっています。

国民はみな善政を敷いてくださるクリフトフ王のことを敬愛しておりましたし、その息子、ダニエル王子にも幼い頃より大きな期待がかけられていました。このダニエル王子は四歳の頃からピアノとヴァイオリンを大変上手に弾かれ、宮廷で天才児としてもてはやされていました。彼のお母上であられるポーラ王妃のことを知っている貴族たちの多くは、母親譲りのその才能に驚嘆いたしましたし、何より彼の容貌が父王のクリフトフさまにそっくりなのを見て今では彼が王家の血統を受け継いでいないのではないかと疑う者は、ひとりも存在しないほどでした。そうなのです——ポーラ王妃が亡くなった時、ちょっとした化物騒ぎがありましたので、一部の王侯貴族の間では本当にダニエル王子がクリフ王とポーラ王妃の息子なのかどうかと、疑いの声が持ち上がっていたのでした。けれども、ダニエル王子は髪の色こそ母親譲りの黒髪でしたが、そのサファイア・ブルーの瞳も卵形の輪郭も、あまり高くない鼻梁もすべて父親の性質を受け継いでおりました。

このダニエル王子は十歳の時には周辺諸国の五ヶ国語をマスターしておりましたし、彼の家庭教師は王子の英邁な頭脳におそれ平伏し、「わたしにはもはや王子さまにお教えできることは何もありません」と言って、次から次へとその職を解かれたがったほどでした。

そして彼が十四歳になった今、ダニエル王子の家庭教師は国一番の知恵者と言われる学者の工

ズラでした。クリフト王は彼に息子のダニエルに帝王学というものを教えるようその職に任じたのですが、エズラもまたダニエル王子が評判通りの天才児であることに驚嘆し、王子が王立図書館の数万巻にも上る書物をすべてお読みになっていることを知ったあとでは他の家庭教師たちと同じようにその職から解かれることを王に願っていました。

「王さま。このエズラにはもはや王子さまにお教えするようなことは何もございませぬ。ダニエルさまは五ヶ国語に通じておられるばかりでなく、数学・哲学・化学・植物学・天文学、その他あらゆる学問に通じておられ、このわたくしが帝王学をお教えするまでもないかと存じます。ただし……」

「ただし？」

王は謁見の間で玉座に肘をついたまま、この年老いた学者のことを尊敬の目で見下ろしました。何しろ彼は先の王ラドクリフさまの知恵袋であり、カンツォーネ王国との三十年戦争で属領下から独立を勝ち得ることができたのも、彼の策謀による功績が大きかったからです。ただ、ラドクリフ王はエズラがあまりに策士として優れていたために、国が平和となったあとは彼に荒れた狭い領地をあてがって、そこへ事実上追放したのでした。

「ダニエルさまは大変利発な方でいらっしゃいますが、わたしが見ますところ、愛情に飢えてらっしゃるのではないかと……」

「それは、どういう意味だい？」

王は前々から薄々そのことに気づいていながらも、あえてそう老学者に訊ねました。

エズラは最高位の賢者のしるしである紫色の角帽を手にしたまま膝をつき、

「おそれながらも王さま。どうかこの老いぼれの言うことに御耳をお傾けくださいませ。ダニエルさまは他でもないあなたさまの愛情に飢えてらっしゃるのです。失礼を承知でお聞きしますが、王が前にダニエルさまと一緒に食事をしたのはいつ頃のことでしょうか」

クリフト王は即座には返事をするできませんでした。少なくとも一週間以上は晚餐をともにしていないのは確かでしたが、それ以前ということになるともはや記憶があやふやだったからです。

「ええと、それは……おお、そうだ！二週間前に狩猟へいった時、わたしが仕留めた大鹿の肉や雉料理などを振るまってやろうと思って、ダニエルのことを大会食の間に呼んだことがあった。だが息子は気分が悪いと言ってこなかったのだ。それはわたしのせいではないぞ」

エズラは、王はまるで何もわかっていらっしゃらないというように、何度も首を振っています。

「クリフトさま、わたしが申し上げているのはそういうことではないのです。大切なのは食べ物のことや着る物のこと、あるいは暮らし向きの贅沢さといったようなことではなくて、生まれた時からお母上のいらっしゃらないダニエルさまのことをお父上であるあなたがいかに気遣い、忙しい中にもどのくらい時間を割いてダニエルさまと接してきたかということなのです。わたくしの見たところ、王さまは父親失格でいらっしゃいますな。それでもできることならこの老いぼれたじじいめがその代わりとなって勉学をお教えできればと、僭越ながらも思った次第でございませぬが、やはり赤の他人には限界がございませぬ。ダニエルさまはあまりにも賢すぎる方なのでございませぬよ——王さまとて、今のダニエルさまに何かお教えするのは難しゅうございませぬが

、もし王さまが帝王学を王子さまにお教えしたくば、御自分の口から直接、王さま御自身の言葉でお教えになることです。さすればダニエルさまもすでにわかっている歴史のことであれなんであれ、喜んでお父上のお話しすることにお耳を傾けることでございましょう。あの方に今一番必要なのは、そういうことなのですよ」

「いや、しかし、それは……」

クリフ王は落ち着かなげに玉座から立ち上がると、そわそわと何度もその前をいったりきたりしています。

「エズラ先生のおっしゃりたいことは、わたしにもよくわかる。しかし、先生。王家の教育というのはもともと、そのようなものなのです。わたしだって生まれてからすぐ産後の肥立ちがよくない母から引き離され、乳母の手で育てられたのです。その後も食卓に父と母が揃っているようなことは公式の行事以外ではほとんど滅多にありませんでしたし、食事をする時はいつもひとりでした。わたしには仲のいい乳兄弟のアントニオがおりましたが、彼でさえ身分の違いを自覚させるためにと、別室で食事をとらされたのです。わたしだって幼な心にも寂しく思ったし、何かというときばかりで、小さな頃から窮屈な思いをして育ちました。でも今はそれでよかったと思う部分も多少はあるし、わたしは父からも母からも愛情のようなものを受けた記憶はないけれど、自分でなんとか頑張っ努力するということを覚えたのです。先生、わたしは……正直いってあれの顔を見るのがとてもつらいのです。口にこそ出しはしませんが、時々『どうして自分にはお母さんがいないんだろう』と物問いたげな目でわたしのことを見るんです。小さな頃からそうでした。だからわたしは本当のことを話すのもうまい作り話をしてごまかすのも嫌で、あれからずっと逃げ続けていたのです」

「そこまでわかっていらっしゃるなら……どうか王よ」エズラは王の前で跪いたまま、申し上げました。その顔には包みこむような優しい微笑がありました。「お母上のいないダニエルさまと、そのお悲しみを共有してあげてくださいませ。クリフさまの話されることが嘘かまことかなど、実は子供にはそう大したことではないのですから。わたしも幼い頃、母を質の悪い伝染病で亡くしましたが、隔離された家の叔母が何を思ったのか、随分長いことわたしに母は生きていると嘘をついておったのです。そのことが何年かしてわかった時、不思議とわたしは叔母に対して怒る気持ちは持ちませんでした。何故かというとな彼女は愛情からそれをしたからです。今にして思うと、いつかお母さんが病院から退院したら会えると希望をもちながらも、心のどこかでは薄々わかっていたような気さえするのが不思議です。王さま、ただしこれはわたしのような凡人の場合のお話であって、ダニエルさまはあのお年でもうこんなじじいよりもっと知識を持っておいでなのです。このままいくとダニエルさまは根詰まりを起こして、王さまの目から見れば何がどうしたということもないのに、非常にお苦しい思いをなさることになるでしょう。あの方にはわたしが一言何かものを申す前に、すでにわかっていらっしゃるところがおありですから……どうか王さまにおかれましては、手遅れになる前にあの方の鋭すぎる感受性を正しい方向に導いてくださるよう、努力していただきたいのです。我が国サイオニアがこれからも、平和で繁栄した国であるためにも……」

ダニエル王子の家庭教師であり、王の顧問でもあるエズラが謁見の間から退出すると、王は玉

座に腰かけたまま、深い溜息をお着きになりました。実をいうと、クリフ王はエズラに話をした以上に、自分の息子のことが苦手だったからです。たった今エズラが言ったようなことは王にも理屈としてはとっくにわかっていることでしたし、自分でもなんとかしなくてはと、心の隅でいつも気にかけてはいながらも、どうすることもできずに今日まできた問題なのです。この時になって初めて王は、家庭教師を男ばかりにしたのがいけなかったのかもしれないと、後悔しました。何故とって、ちょうどダニエル王子の今と同じ年の頃に王は、家庭教師のシャーロット先生に恋をして、当時は随分彼女にのめりこんでしまい、先生を困らせるようなことばかりをした経験があったからです。だから王子である息子が自分のように身分違いの恋をして苦しい思いをしたりしないようにとのつまらない心遣いから、家庭教師を全員男の先生にしてしまったのでした。

（でも今にして思えばあれは、ひとりの人間が成長するためのプロセスとして、大切なことだったのだ。あれには知識好きの学者のように、どこか感情に乏しいようなところがあるから……誰か、母性的な感じのする女性にでも、話し相手になってもらったほうがいいのかもしれない。母上は大層あの子を可愛がっておいでになるけれど、昔わたしに対したのと同じく、あれは条件付きの愛情だから……そうだ！メアリを呼ぼう。メアリは昔ポーラに仕えていた頃の話であの子にしてあげることできるだろうし、何より今では結婚して三児の母だ。メアリが相手ならあの子も恋に落ちるような心配はないだろうし……）

王は側近の従者であるアントニオを呼び寄せると、令状を持たせて川向こうにある彼女の家まで遣いにだしました。その時メアリは上から十一歳、九歳、七歳の子供たちに囲まれて、庭で洗濯をしているところだったのですが——アントニオの話を聞くと「是非よろこんで！」とばかりその話を即座に快諾しました。彼女の夫は以前は王宮の警護兵で、今は法務院の牢屋で番兵をしている、マキシム・ヨーデルハイトという男でした。マキシムは国民のほとんどがそうであるように、熱心な王党支持者でしたので、王直々の御命令とあれば、喜んで妻を宮仕えに出させるに違いないことがメアリには聞く前からわかっていたのです。

こうして、クリフトフ王はうまい自己弁護を思いついてまたしても自分の息子と対峙する機会を避けた。王の顧問であるエズラにはそのことがすぐわかりましたが、あえて王には忠言せず、暫くの間様子を見守ることにしようと思いました。

メアリが王宮の東翼にある王子の部屋に出入りするようになると、確かに少しずつダニエル王子には変化の兆しのようなものが見えはじめましたが、それでもメアリの愛情は彼の孤独な心を完全には癒すことができませんでした。

初めて王子がメアリと会った時、彼女は涙を流しながらひしと彼のことを身分もわきまえずに抱きしめたのですが、その意味がダニエル王子にはさっぱりわかりませんでした。やがて彼女が昔自分の母である王妃に仕えていた侍女であること、面差しがあまりにポーラさまに似ているので思わず抱きしめずにいられなかったことなどがわかりましたが、ダニエル王子はただ単に（変な女だ）と思って冷たく彼女のことを眺めやるばかりでした。何故とって、ダニエル王子は小さな頃から「クリフトフさまのお小さい頃にそっくり」という話をおべっかを使う貴族たちに耳にたこができるほど聞かされてきたからです。

「メアリは変なことを言う。俺は母上にはちっとも似ていないという話だぞ。それに、肖像の間に一枚だけある母上の肖像画を見ても——俺とは全然似ていない。かといって俺は、自分が父上に似ているとも思わないがな」

「あらまあ」メアリはくすくすと笑いだすと、まだあまり背の高くない王子の黒髪を撫でながら言いました。「王子さまは、おふたりにとてもよく似ておいでですよ。わたしは毎晩寝る前にポーラさまの御髪を梳りましたが、あの方の髪はちょうど、今のあなたさまのように深緑がかっていて、黒絹のように本当にお美しゅうございました。瞳だって、あの方と同じように深い海の色をなさっておいでです。でも鼻の形や輪郭などはお父さまのクリフトフさま譲りでございますわね。本当に、お懐かしゅうございますわ。おふたりは心から愛しあっておられて、どれほどダニエルさまがお生まれになるのを心待ちにしていたことか……」

「本当か!？」

ダニエル王子はにわかに動悸が打つのを感じました。平生彼は、無口で無愛想な顔をしており、滅多なことでは微笑みさえ浮かべませんでした。今はメアリの話に心が震える思いだったのです。

「よし、メアリ。今日からわたしが直々におまえの家庭教師になってしんぜよう。なんでもおまえは、自分の名前さえ書けないそうではないか。ここは王宮だが、なんでも世間ではサインのかわりにXと書くような人間は騙されやすいという話だからな。さあ、こちらへきてもっと詳しく母上の話を聞かせなさい。そのあとに褒美として勉強を教えてやろう」

メアリは本棚に本のぎっしり詰まった王子の部屋で、黒檀の飾りテーブルに差し向かいになると色々な話をダニエルさまにお聞かせしました。ポーラさまがどんなにお優しい方だったか、クリフトフさまが王妃さまをどんなに大切になさっていたか、そしてそれほど愛しておられた王妃を失って、どんなにお悲しみになったか……ダニエル王子は、それまで誰も話してくれなかった自分の父と母の本当の姿について知ると、ますます自分の父である王への尊敬を深めました。

ダニエル王子は御自分のお父上であるクリフトフ王のことをとても尊敬していたのですが、王さまが本当には自分のことを愛していないということを知っていました。もちろん欲しい物はなんでも買い与えてくださいますし、公式の行事などで顔を合わせる折々に優しい言葉をかけてもくれるのですが、王子にとって王さまは、いつもどこか遠い人でした。時には自分のことを嫌っているのではないかとさえ思っておりましたので、メアリが話してくれたことは、彼にとっては一生を変えてしまうほどの、大きな出来事だったのです。

（そうか。父上はきっと俺のことを見るたびに、大好きだった母上のことを思い出すので、それでなかなか小さい時から俺の部屋にきてはくださらなかったのだ。でも今は、俺にも父上の気持ち少しはわかる。もし俺がもう少し大きくなって、肖像画の母上のような美しい人を妃に迎えたとしたら——そしてその人を結婚してからたったの一年ほどで失ってしまったら、今の父上と同じようにしか、子供と接することはできなくなるのかもしれない……）

ダニエル王子は母上のポーラ王妃がとても気に入っていたという侍女のメアリのことがすぐに気に入りましたし、彼女は王子にとって生まれて初めて心を許した女性かもしれませんでした。ダニエル王子の乳母はひどく神経質な女性で、王子が授乳を必要としない歳になると王大後の命令ですぐに首になりましたし、カミーラさまは独占的ともいえる愛情をダニエルさまにお注ぎになられましたが、王子さまはあまり自分のおばあさまのことを好きになれずにいました。幼少の頃、厳しい英才教育をダニエルさまに施したのもカミーラさまでしたが、彼がほんの時々スペルを間違えただけで彼女が自分をつねってきたことを、今も王子は忘れていませんでした。

またダニエル王子は、小さな頃から従姉妹やら貴族のお嬢さまやらが大嫌いでしたし、あんな気どった連中と話をするくらいなら、池の鴨を相手にしていたほうがよほどましだとさえ思っておりましたので、本当に親しいといえるほどの女性との接触は、メアリが生まれて初めてだったのです。

もっとも、メアリは農村の生まれであり、自分の名前も書けないような貧しい家庭で育ちましたから、王子は彼女が何度教えても簡単な数式さえ解けないので呆れましたが、そのうちそんなこともどうでもよくなり、もっぱら彼女が読みたいという本を朗読して聞かせてあげるようになりました。そしてダニエル王子の心の飢えは一旦、それで納まったかのように見えたのですが、実はそうではなかったのです。ダニエル王子はメアリが自分の三人の子供たちの話を笑顔でするたびに、顔の表情にこそ出しませんでしたが、ひどく苦しい思いをその度に覚えていたのです。自分は王の子供であるかもしれないけれども、この女にとっては自分の三人の子供のほうがよほど大切なのだ……そのことを身にしみて感じるたびに、王は心からメアリに甘えるということができなくなりましたし、それどころか、彼の本当に欲しいもの——「お母さん！」と叫んで甘えられる膝は、いかに自分が王子といえども手に入れられるものではないのだと思い知り、時にメアリのことを憎らしく感じることもさえあったのです。

そしてメアリが再び王宮に出入りするようになって、三か月ほどが過ぎたある日のこと——メアリの三人目の子供が風疹にかかって、彼女が暫くの間王子の部屋へやってこれないことがわかると、ダニエルさまは癩癩を起こして部屋中の本という本を床の上に放りだしてしまいました。「ちくしょう！ どうしてなんだっ！ どうしてなんだっ！」

ダニエル王子は地団駄を踏んで悔しがったあと、王宮の廊下を走って外へ出てゆきましたが、誰も止める者はありませんでした。王子を追いかけようとする従者のことをエズラが止め、「暫くの間ひとりにしてあげなさい」と言ったからでした。

このエズラの言葉の裏には王子がどこかにいくとしても、せいぜい王宮の裏庭くらいのもなのだから、ということが含まれていたに違いありませんが、そんなのはとんでもありません！ダニエル王子は王宮を抜けだすと、自分だけの秘密のルートをつたって海港ダニスの波止場へと向かっていたのですから！彼は以前からたびたび、自室に引きこもって勉強している振りをしては外へ抜けだし、息抜きに波止場からボートに乗っていたのです。

その日も彼は、日暮れ前には王宮へ戻るつもりで、小舟の櫂を漕いでサキュバス海門のほうへ向かいました。そして夏の陽射しを浴びながら舟の中に寝転んで、自分の行き場のないやるせない気持ちをもてあましていたのだった。

(あーあ、死にたいなあ……)

ずっと前から時々、王子は真剣にそんなふうを考えるようになりました。もしこれで自分以外に男の兄弟がもうひとりいたら、誰に遠慮するでもなく好きなように自殺できるのになあ……王子はそんなことを考えながら、いつも海の上をたゆたい、死への憧憬を胸に思い描きました。

「もし俺が死んだら、父上は悲しんでくださるだろうか……」

思わず誰にともなく王子がそう呟いていると、どこかから返事が返ってきました。

『そんなことは絶対にしてはいけませんよ、王子さま。そんなことをしたらお父さまがどんなにお悲しみになられることか』

ダニエル王子は自分の心に直接語りかける者の声を聞いて、飛び上がりそうになるくらい、びっくりしました。

「だ、だれ？」

身体を起こして周囲を見渡してみるも、当然ながらそこには誰もいはいません。王子から見て右手には海門が、左手には遠くサイゴン島の賭博場が見えるだけです。他にあるものはといえば、ゴツゴツとした岩場に真夏の太陽、青い空と海、彼方の水平線くらいなものだったでしょうか。

王子は微かにそよぐ風にぶるっと身を震わせると、急いでオールを漕いで、元きた海の道を波止場へと引き返しました。そして誰にも見つかることなくこっそり王宮の東翼の宮へ戻り、今日あった不思議な出来事を自分の日記に書き記したのでした。

(あーあ、死にたいなあ……)

そうダニエル王子が心の中で呟くのを、ポーラはやるせない思いで聞いていました。これまで、自分の息子は王宮で何不自由なく幸せに暮らしているに違いないということが、ポーラにとって唯一の生きる支えのようなものだったのですが、十四年ぶりに会った息子が死にたがっていると知って本当にショックでした。それで思わずテレパシーで話しかけてしまったのですが、ポーラは自分の息子が不憫でならず、アクアポリスに戻ってからもただひたすら我が子のことを想い続けるばかりでした。

あれからポーラは、セイレーンと禁じられた取り引きをした罰として、十年の間深海の牢屋へ



と入れられておりました。海の王である父も母も、またお姉さま方もお義兄さま方も、そのようにせざるをえないことを非常に悲しまれましたが、規則は規則、罰は罰です。ましてや王族であるポーラが禁を犯したのに罰を免れるのであれば、一族にも示しがつきませんし、ポーラは十年間深海で監禁生活を送ることを余儀なくされたのでした。

とはいえ、それはある意味ではポーラにとって相応しい罰であり、彼女はの時もう誰とも話をしたくない、テレパシーを交わしたくないという心境でしたから、哲学者のような深海魚とだけ時たま話すような生活も、そう悪いものとは思いませんでした。時には友達のクジラが慰めにきてくれることもありましたし、番兵の地獄イカと楽しく世間話をすることもありました。

人間にとってはどうかはわかりませんが、人魚にとって十年というのは、そんなにびっくりするような長い時間ではありません。ただ、十年という刑期が過ぎてポーラが再びアクアポリスへの出入りを許された時、彼女の全身の鱗は虹色の輝きを失っていました。クリフトフ王から受けた左肩の剣の傷から腐食がはじまり、鱗はすべてセイレーンたちの醜い鱗のように緑色に変化していたのでした。

それはまるで、セイレーンたちとの取り引きに応じたらこのような結果になるのだという証拠が海を泳いでいるようなものでしたが、ポーラはすべてのことを少しも後悔していませんでした。彼女が<sup>おか</sup>陸にいた期間はたったの三年ほどであったかもしれません。でもポーラにとってその三年は、永遠にも思われるようなとても幸福な三年でした。ポーラのお父さまもお母さまもお姉さま方も、お義兄さま方も、彼女の鱗が損なわれて以前のようにでないのをひどく悲しまれましたが、ポーラはちっとも悲しくなどありませんでした。ただ、他の人魚のみんなには自分がどれほど地上で幸福な体験をしたかということがうまく伝えられませんでしたので、どうして誰にもわかってもらえないのだろうという疎外感だけをポーラは悲しんだのでした。

以来、ポーラは毎日のように朝早くにアクアポリスを出ては、サイオニア王国の近海を泳ぎまわり、時々サイネリア王宮の尖塔を眺めては愛するクリフトフ王と愛息子が今なん時どうしているだろうということにずっと思いを馳せていたのです。

ポーラはサキュバス海門の近くをたゆたう一艘の小舟に近づいた時、よもやそれが自分の息子とは思いませんでした。ただ<sup>おか</sup>陸の暮らしを懐かしく思ったので、舟に乗っている人間に接触して今王宮の様子などはどうなのだろうということを知ろうとただけなのです。ところが……  
(あーあ、死にたいなあ……)

何ひとつ不自由なく幸福に暮らしているに違いないと信じていた息子が、死にたいと思っているだなんて！ポーラは悲しみのあまり、胸が潰れる思いでした。叶うことならもう一度人間の姿になって、我が子の口から直接どうして死にたいと思うのか、その事情を詳しく聞かせてほしいと思いました。そのためなら人魚の一族から追放されることも、死ぬことだって厭いはしないとポーラは思いましたが、もはやセイレーンと取り引きしたくても、虹色に輝く鱗が自分にはないので、海の深みで自分の可哀想な子供のことを思って涙に暮れる以外はないのでした。

(ああ、わたしの可哀想な赤ちゃん！おまえは今、一体どんな苦勞を王宮でしているというのだろうか？お優しいクリフトフさまのことだから、何も心配はいらないとこれまで思っていたけれど、もしや王さまは隣国のお姫さまとでももう一度結婚なさったのかしら？もしそうなら、あの子



の居場所は王宮の中にはないのではないかしら？ああ！自分のこの魚の姿がうらめしい……せめてセイレーンたちのように、一月に一度でいいから人間の姿になれば、王宮へ駆けてゆくことができるものを！)

それからポーラは、サイオニア王国の近海を漂っては、もう一度自分の子供が舟に乗って出てくるのを待ち続けました。すると最初にダニエル王子と出会った場所で、一週間ほどのちに再び彼と会うことが叶いました。

ダニエル王子はしきりに周囲をきょろきょろしていましたが、おそらくは不思議な声の主がどこからか現れはしないかと思っていたに違いありません。ポーラは舟の真下へ潜ってゆくと、彼が驚きのあまり舟ごと引っくり返ったりしないよう、<sup>キール</sup>竜骨の部分を支えながら、静かにそっと息子の心に語りかけたのでした。

『今日は一体どうしたのですか？また死にたくなって海へ出てきたのですか？』

「ち、違うよ！」王子は明らかに狼狽した様子でしたが、すぐに舟の真ん中に座り直して答えました。「今日はまたあなたに会えないかと思って、ここへきたんだ」

ポーラは思わずも、その息子の返事に涙ぐむものを感じました。もう二度と会えないと思っていたのに、立派な青年に成長した息子の姿を見ただけでなく、話をすることまでできるだなんて！神さまはやっぱり、地上にも海中にもおられるのだと、ポーラはそんなふうに感じました。

「ええとね、僕、ダニエルっていうの。あなたはなんていう名前なの？」

『シーポーラっていうのよ、ダニエルちゃん』

ダニエル王子は他の人間にダニエルちゃんなどと呼ばれたら腹を立てたに違いありませんでしたが、不思議と怒りがこみ上げるようなこともなく、＜彼女＞と話を続けました——そう。姿は見えないけれども、ダニエル王子には相手が女性的な存在であるということがはっきりわかっていたのでした。

「シーポーラ……へえ、不思議だね。僕のお母さんの名前はポーラっていうの。とっても綺麗な人なんだ。でも僕を生んでからすぐに死んでしまったの。お父さんはね、そのことがあんまり悲しくて、僕のことをあまりよく見てくれないんだ。もちろん、とてもよくはしてくれるんだけどさ……最近、メアリっていう侍女が僕のところへきて遊び相手になってくれるんだけど、メアリにはもう三人も子供がいるし、僕はその代わりにはなれないっていうことがわかっているから、とっても寂しいの。この間はね、あんまり寂しいから死んでしまおうかなって思って舟を漕いでここまできたんだ」

『そうだったの……』ポーラはダニエル王子の心に直接接触しておりますので、彼がみなまで言い終わる前に、すべてのことがわかっていました。そして自分の息子があんまり不憫で、返す言葉もなく涙に暮れるばかりでした。

「あのね、もしよかったら僕、シーポーラちゃんに僕の友達になってもらいたい。僕は王宮に住んでいるから、なかなか会いにこれないとは思うけど、時々僕の話し相手になってくれたら嬉しいなって思うの。だって僕、友達なんてメアリ以外にひとりもいないんだもの」

『もちろんよ、ダニエルちゃん。シーポーラはいつでもここでダニエルちゃんのことを待ってますよ』

「本当!？」とダニエル王子の顔の表情がぱっと輝きました。「約束だよ。もしすぐにシーポーラちゃんがきてくれなくても、僕はずっとずっと待ってるから。僕ねえ、この間はちょっとびっくりしたけど、シーポーラちゃんはきっといい人に違いないってことがすぐにわかったの。なんだかとても優しく、温かい感じがするから」

『嬉しいわ、ダニエルちゃん。でもそろそろ風も強くなってきたし、帰ったほうがいいんじゃないかしら?途中まで送って行ってあげるから』

すると、ダニエル王子が櫂を漕がなくても、スイーっと舟が波止場に向けて走りだしました。ダニエル王子はなんて楽ちんなんだろうと思いました。波止場が見えたところで舟は止まり、それきり不思議な声の存在の気配も、どこかへ消えてしまったようでした。

王子は櫂を漕いで波止場に辿り着くと、舟を繋ぎ、急いで王宮へ戻ろうとしましたが、その顔はとても明るく、少年らしい輝きに満ちていました。

十一月初旬のその日、天気はとても曇っていて、折しも北西から冷たい風が吹き渡ってきていました。ダニエル王子は小舟の中に乗りこむと、メアリからもらった毛糸の帽子をかぶり、その上からベルベットの帽子をのせ、手袋をはめた手でもやい綱をときました。

これから何時間後のことになるか——あるいはもしかしたら、まったく誰にも気づかれないですむかもしれませんが——寝室で眠る自分の人形のことを誰かが気づいたところを想像しただけでも、王子はとても愉快でした。

ダニエル王子はこの日、もうシーポーラには来年の春まで会えないだろうと思いつつも、自分としてはこれで今年最後のお別れのつもりで、舟に乗ってオールを漕いでいたのです。

(僕はこれから、お父さまの後を継いで立派な王さまになって、メアリののような市井の人たちのためになることをするんだ。メアリはようやく自分の名前だけは書けるようになったけど、書類を代筆した人間が悪さをしたという判例が、いくつもあったものなあ。僕もソロモン王のように公正な裁判ができるよう、これからもっと勉強しなくちゃ)

ダニエル王子は遠くの空の一点が濃い灰色の雲で包まれているのを見て、雨が降ってくるだろうかと思いはしたものの、それならそれでその時だと思っていましたので、サキュバス海門のあたりで櫂を漕ぐのをやめると、舟の中で横になって、シーポーラちゃんがやってくるのを待ちました。あたりの海に向かって大声で彼女の名前を叫んだりしなくても、シーポーラちゃんにその気があるなら話しかけてきてくれるだろうし、もしそうじゃないなら、今日を最後に来年の春まで、王子は舟に乗らないつもりでおりました。

風は少し冷たかったのですが、それでも王子が注意して厚着してきただけあって、体はぽかぽかしてそんなに悪くない按配でした。ダニエル王子はそのうちに、ぐうぐうと眠りはじめると、舟がどんどん沖のほうへ流されていっていることにも気づかず、やがて日暮れ時を迎えました。

なんていうことでしょう！ダニエル王子が次に気づいた時には、どことも知れない紺碧の大海原でたったのひとりぼっちになっていたのです。折しも輝きを失った鈍い光を放つ太陽が、水平線の彼方に沈んでゆくところでした……流石にダニエル王子もこの時には（大変なことになった！）と思って慌てたのですが、いまさら泣き叫んでみたところでどうにもなりません。

(きっと、メアリにあんなひどいことを言ったから、罰が当たったんだ)

でも、後悔してもいまさら遅いのです。王子はがっくりと肩を落とし、呆然とあたりのだだっ広い海の波を眺めましたが、なんとか自分のことを励まそうとしました。

(そうだ。舟に乗ってサキュバス海門のあたりに出た時には、雨が降るかもしれないと僕は思ったんだ。少なくとも天候が落ち着いていることだけでも喜ばなくちゃ)

ダニエル王子は太陽が沈んだのとは反対方向に舟を漕いでいこうとしましたが、それとは逆向きに風が吹いておりますので、櫂を漕げども漕げどもてんでお話になりません。次期夜になってあたりが真っ暗闇になったところを想像しただけでもぞっとしましたが、星を見て帰るべき方角がわかるかもしれないとも考えました。けれども、それで帰るべき海港ダニスの方角がわかったとして、こんな小さな舟では思いどおりの針路を風に逆らってとれるわけではありませんから、ダニエル王子はほとんど途方に暮れてしまいました。

(いくら勉強ができたって、こんな時には船乗りの経験がものを言うんだ……このへんの海の気候は変わりやすいから、もしかしたら夜のうちに嵐になるかもわからないし、突然雷雨になるかもわからない。ああ、僕はなんて馬鹿だったんだろう。王宮でぬくぬく暮らしていれば、今頃は美味しい夕食にもありつけたのに……)

王子はきのう、詰め物をした七面鳥の丸焼きを食べたくないと言って下げさせたことを思いだし、今こそあれが食べたいとさえ思いました。そしてぐうぐうと鳴るお腹を抱え、權を漕ぐ気力もなく、やがて宵闇の中でわあわあと泣きはじめたのでした。

「おかあさーん！おかあさーん！おかあさーん！」

ダニエル王子はもちろん、シーポーラちゃんの名前も呼んでみたのですが、あたりは静かな波の音に包まれているだけで、誰の気配の訪れも感じることはできませんでした。王宮では王子のベッドに身代わりの人形が置かれてあることに気づいたエズラが、警護兵に命じて王宮中をくまなく探させているところでしたが、彼はよもや王子が闇の海でひとり漂ってしようとは夢にも思いませんでしたし、従って搜索範囲も王宮内とその近辺、また港町付近に限られていたのでした。

この時、ダニエル王子の乗る小舟の付近を泳いでいた人魚のひとは、奇妙なSOS信号を脳内に受信すると、そのことを仲間の人魚たちに知らせにゆきました。その波動は人間のものでもなければ人魚のものでもありませんでしたので、彼はそのSOS信号の送信者を救うべきかどうなのか、判断がつきかねたのです。

「オ・カ・ア・サ・ン、オ・カ・ア・サ・ン……いや、ちょっと待て。彼はシーポーラの名前を呼んでいるのだ。彼女には人間との間にできた子供がひとりいるということだったから……彼はおそらく、シーポーラの息子なのだ！」

すぐにも人魚たちの間には素早く伝令が走り、その報告はアクアポリスの神殿で鱗の手入れをしていたシーポーラの元にすぐにもたらされました。魚の[ホソソメワケベラ]はシーポーラの鱗についた寄生虫を食べているところだったのですが、食事を中断されるのもいとわず、

「大変だわ！早く行ってらっしゃいよ！」

とシーポーラのことを快く送りだしてくれたのでした。

『まあまあ、泣き虫さん。こんなところで一体どうしたの？』

すでにあたりは真っ暗闇で、ダニエル王子の乗る舟は風に吹かれてますます陸地から離れゆくばかりでした。うねる生き物のような波の間からぬっと突然シーポーラは顔をだしたのですが、彼女の存在はあたりの闇と同化しているようで、彼には最初シーポーラちゃんがどこにいるかもわかりませんでした。

「シーポーラちゃん、ぼく……ぼく……」

あとのことは言葉になりませんでした。それでも泣きじゃくる我が子の心の内を読みとるうちに、すぐにポーラにはすべてが理解できましたし、これからどうすべきかもよくわかっていたのでした。

『さあさあ、そんなに泣かなくてもいいのよ。シーポーラがこれから、ダニエルちゃんのことを港まで送って行ってあげますからね。ダニエルちゃんは何も心配することはないのよ』

「……ありがとう、シーポーラちゃん」

それでも王子がまだくすくすんと鼻を鳴らしていたので、ポーラは彼を慰めるために心の中で歌を歌ってあげることにしました。そして二曲三曲と歌っているうちに、それはポーラが以前宮廷音楽家のひとりに音符を書きとらせた歌になりました。『生きていて楽しいと思うことには』という歌曲です。

「僕、その歌知ってるよ。僕のお母さんがね、作ったお歌なの。でもそれをどうしてシーポーラちゃんが知ってるの？」

ポーラは舟の下で一瞬ぎくりとしました。さざ波のような動揺が、ダニエル王子の心にも伝わったのでしょうか、その瞬間に彼にはすべてがわかってしまったのです。

「もしかして、シーポーラちゃん……シーポーラちゃんは僕のお母さんなの？」

『わたしはあなたのお母さんの知りあいなのですよ、可愛い坊や。この歌も、あなたのお母さんから教えてもらったのです』

「ふうん……」

ダニエル王子は釈然としませんでした。今はお腹も空いていましたし、海を吹く風に体温も奪われておりましたので、うまく思考力がまとまりませんでした。それでそれ以上深くは何もシーポーラちゃんに訊ねず、彼女と一緒に楽しくお歌を歌って、空腹を紛らわせようとしたのでした。

さて、遠くにサイゴン島の賭博場が見えようかという頃、大変不幸な出来事がふたりを襲いました。賭博場へ遊びにきていた貴族の船がクルーズを楽しんでいたのですが——おそらくは悪ふざけが過ぎたのでしょうか、その船はダニエル王子の乗るちっぽけな舟のことになど気づかず、王子の小舟目がけて全速力で突き進んできたのです！

何かにぶつかった、ということに気づいた彼らは、船の上から松明を手にしてあたりの海をくまなく調べはじめました。ぶつかった時に何か、人間の叫び声のようなものを聞いていたからでした。そして小舟が転覆した拍子に気絶したダニエル王子を抱えた、何やらよくわからない生き物を発見したのです。

最初、暗くてよくわからなかったこともあり、彼らはそれを人間だと思いました。けれども近づいていくにつれ、それがびっしりと魚の鱗に覆われた、魚人間であることがわかってきたのです。

「おい、そこのおまえ！そいつを放せ！」

当然のことながら、ポーラは自分の命よりも大切な息子のことを、決して離しはしませんでした。ここで彼らの記憶を眩ませて逃げるにしても、まだ海港ダニスの浜辺までは相当な距離があります。サイオニア王国唯一の正統な王位継承者であるダニエル王子の身の安全を第一に考えるなら、ここは彼らに息子の身柄を預けるのが一番の得策だと思いました。まずはダニエル王子の身体を引き渡し、そして彼らの記憶を奪って逃げる……ポーラは瞬時にそう計算したのですが、その間に彼らは漁猟用の大きな網を放っていました。

こうして気を失ってぐったりしているダニエル王子とポーラはかつて海軍の将軍であったクロイツネイル卿の息子の船に引き上げられ、ポーラは彼らの記憶を奪う隙さえ与えられずに、銚で頭をしたたか殴られて失神してしまっただけです。



## 第12章

次に目が覚めた時、ポーラは王立法務院の牢屋の中にいました。この法務院は石造りの古い建物で、何万人もの罪人や謀叛人を拷問・処刑してきた歴史を持つ、血塗られた城として有名でした。

ポーラが今いるのは、石畳の冷たい床の上で、そこはひどい匂いを放つ簡易式のトイレと、ノミだらけの小汚い寝床があるだけのとても狭い部屋でした。実をいうとこの地下牢は今は使われておらず、裁判のために拘留される人間は、一階にあるここよりずっとましな留置場で必要最低限の環境下に置かれるのでした。

ポーラの前にはひとりの番兵が、警護兵用のフロックコートを着て、槍を片手に持ち、厳しい顔つきをして微動だにせず前方の青灰色の石の壁を眺めています。ポーラは彼の意識に接触すると、あれからダニエル坊やはどうしただろうと、探ることにしました。

そしてポーラにわかったのは、次のようなことでした。

ハインリヒ・クロイツネイル海軍大尉は、網から引き上げられたのが他でもないサイオニア王国の唯一の世継ぎであられるダニエル王子であることに気づくと、すぐに船室<sup>キャビン</sup>のほうへ気を失っている王子のことをお運びしました。幸い、水はほとんど飲まれていない様子でしたし、たまたまその時同乗していた友人の医師が「暫くすれば、自然と目をお覚ましになるだろう」と請けあってくれたので、彼は心底ほっとしたのでありました。それにしてもしかし、何故ダニエル王子ともあろう方が、こんな夜更けにあのような化物に捕らえられていたのか——クロイツネイル大尉は手足を縛られた状態の、見れば見るほどぞっと怖気立つ半魚人のことを甲板で眺め、一応奇妙な嫌疑をかけられた場合に備えて、とりあえずはこの化物を王の役人たちに引き渡すことにしようと決めました。

クロイツネイル大尉がダニエル王子を保護して、港町の開業医の家の二階におられるという知らせがクリフトフ王の元に伝えられると、寝ないで王宮中を探し回っていた警護兵たちも、エズラも、カミーラ王大后もみな、心からほっと致しました。この時はみな、とにかく王子が無事で良かったということが第一で、何故サイゴン島付近で彼が大尉の船に見つけられたのかという疑問については、それほど深く考えませんでした。すべては王子が目をお覚ましになれば明らかになることでしたし、おそらくは十代の若者特有の冒険心から、賭博場がどんなところかを知りたかったのではないかと、警護兵たちはそのように噂しあいました。

しかし、クリフトフ王もエズラもカミーラ王大后も、ダニエル王子がそのようなことに興味を持つ傾向がまるでないのを知っておりましたので、その夜はほっと安心しながらも、なんとなく釈然としないものを感じながら寝室で眠りについたのでした。

ダニエル王子は港町の開業医、レオナルド・ロイド医師の元で手厚い介護を受けていたのですが、船にぶつかった時、どこか打ちどころが悪かったのでしょうか、翌日の朝になっても王子は一向に目を覚まされる気配を見せませんでした。こうなってくると、大法官でもある王の裁きの匙かげんによって、もしかしたらクロイツネイル大尉は有罪になるかもしれず、お父上のように勇敢ではないこの小心な息子は、もしもの時にはすべてをあの化物のせいにするべく、あの時船

に乗っていた貴族の遊び仲間の全員と口裏を合わせることにしたのです。すなわち——大尉とその友人らが夜にクルーズを楽しんでいると、偶然にも魚の頭をした化け物が、人間を海中に引きずりこもうとしているのを目撃してしまった。そこで網を放ってふたりを捕らえてみると、なんとそれはダニエル王子さまだった……クリフトフ王は朝の奏上が終わったあとで、そのように大尉から内密に報告され、その半魚人とやらの強い興味を持ちました。

「まさかとは思いますが、その者……もしや虹色の鱗をしてはおらぬか？」

クリフトフ王は十四年前にあった王妃の失踪事件のことをついきのうのこのように今も思い出すことができました。

「いいえ、王さま。わたしが捕らえました不気味な化物は、緑色をした蛇のような鱗を持つ、醜悪な生き物でございます。わたしもよやもあのような生き物がこの世に存在しようとは、思いもしませんでした。半魚人というのは酔った漁師どもの見た空想の産物というくらいにしか考えたことはありませんでしたゆえ……」

王はそれでも、もしかしたらその不気味な化物が、王妃を攫った虹色の化物の仲間かもしれないと考えました。そこで、クロイツネイル大尉の一存で、夜まだ暗いうちに法務院の地下牢に放りこんだという、その化物を見に行くことにしたというわけなのです。

その時、ポーラはまだ気を失ってぐったりと横たわっている状態でしたから、王が地下牢へやってきたことなど、少しも知りませんでした。彼は牢屋の錆びた鉄柵ごしに半魚人を眺めると、肩に走っている刀傷に目をとめて、おそろしいほどの殺意が体内に漲るのを感じました。

「……この下手人めをどうするかは、もちろんわたしの一存にまかせてくれるな、大尉よ」

いつもは物静かで冷静なクリフトフ王が、いつになくおそろしい顔をしているのを見て、クロイツネイル大尉はぞっと背筋が寒くなったくらいでした。

「も、もちろんでございます、王さま。何ごとも王の御心のままに」

そのあと王は大尉にダニエル王子を救ってくれた褒美として百万レーテルの報奨金と、海軍の将軍の地位を正式に授与しました。ハインリヒ・クロイツネイル卿は小心で姑息な人物だったのですが、父親譲りの美貌によって宮廷では人気のある人物だったので、誰もがみなこのことを喜び、また彼の功績を讃えたのでした……もちろんこのことはもう少しあとの出来事ではあるのですが、とにかくこの時ポーラは、クリフトフ王がこの見すばらしい牢屋へついさっきやってきたこと、また可愛いダニエル坊やが今も目を覚まさないことを知って、深い悲しみに沈みこみました。

(この醜い姿を、クリフさまに見られてしまった……なんということでしょう。その上下手人呼ばわりされるとは。ここから脱出するのはそう難しいことではないけれど、せめてダニエル坊やが目目を覚まして元気になったのを確認するまでは……わたしはここでじっと我慢していなくてはならないのだわ)

それからポーラは毎日、メアリの夫であるマキシム・ヨーデルハイトの意識を探っては、ダニエル王子がどうなったかを知ろうとしました。ダニエル王子はあれから三日後に隠密裏に王宮の自分の寝室へ移されましたが、その後一週間が経過したのちも、やはり意識をとり戻されないままでした。

マキシムの妻であるメアリは、毎日のように東翼の宮で王子の看病にあたりましたが、一向に



彼が目を覚ます気配がないのを見て、王子がこのまま死んでしまうのではないかと、大層心配しておりました。そこで、彼女が以前にポーラ王妃からもらった虹色の人魚の鱗——それを王子の唇に入れてみることにしたのです。ポーラ王妃の話によりますと、これを食べればどんな病気も治るとのことでしたから、祈るような気持ちでメアリは、口移しでそれを王子の唇にお入れたのでした。

その翌日のことです。いまだ目を覚まされないダニエル王子の御体に、変化が表れはじめたのは。皮膚という皮膚にはうっすらと鱗状の形をしたものが表れはじめ、手や足や指の間には鰭のような膜ができはじめていたのです。夜、王子の看病をしながら、揺り椅子の上でこっくりこっくり眠くなりはじめた看護婦は、明け方近くに目を覚ますと、大きな叫び声を上げました。「キャ————ッ！」

彼女が驚いたのも無理はありません。王子の豊かな色艶のいい髪の毛はすべて抜け落ちておりましたし、石膏のように真っ白な顔の肌には不気味な鱗ができはじめていたのですから。

その太った看護婦が大きな体を揺らすようにして王子の部屋を出ていくと、その叫び声の騒々しさによってダニエルさまは目を覚まされました。

枕元には自分の黒い髪の毛が散らばっており、頭に手をやると髪の毛が何もありません。しかも、自分の手の指と指の間には魚の鰭のような膜が——あるいはカエルの雨かきのようなものができているではありませんか！

「……夢じゃないんだ」

実をいうとダニエル王子はこの時、眠っている間ずっとひとつの夢を見ておいででした。ここでは自分は虹色の人魚で、海の国の王さまだったのです。そして自分の隣にはシーレイラという名前の、とても美しい王妃が珊瑚の玉座に腰かけていたのでした。

「僕、帰らなきゃ……」

ダニエル王子はそう思ったのですが、ベッドから足を下ろそうとしたちょうどその時、王宮の侍医のひとりとなったロイド先生が寝室に入ってきました。

「こ、これは……っ！」

ロイド医師もまた、驚きのあまり王子に近づくことさえ嫌なようでした。彼はもしかしたらこれは質の悪い伝染病かもしれないと考えたのです。

「君っ！すぐに薬師を呼んできなさい。それと王宮中の医者に声をかけて召集するんだっ！」

カリール先生はもう十年も前に亡くなっておりましたので、今王宮にいるのはあまり腕のよくないヤブ医者ばかりでした。彼らは王子をとり囲んで熱をはかったり口を開けさせて喉を見たりしたあと、すぐに隣の控えの間でああでもないこうでもない話しあいをはじめました。

「こんなに不気味な皮膚病は、これまで見たことがない。何より気がかりなのは王子の紫色をした唇と舌だ。体温だって、普通の間人よりも遥かに低いのに、ダニエルさまは特に寒気を感じられているわけでもなさそうだし……」

「今まで意識が戻られない以外はどこもなんともなかったのに、一晩で髪の毛がすべて抜け落ちてしまうとは。王子は御記憶のほうもしっかりされているようだし、ここはもう少し様子を見たほうがよいのではないか」

「いやいや、何を悠長な。わたしが思うにこれは——半魚人の呪い以外の何ものでもないぞ。お

まえたちは法務院の地下牢にいる化物を見たことがないから、そんなことが言えるのだ。おそらくはあの魚人間を牢屋から出し、海に帰しさえすれば王子の御病気もよくなるに違いない」

カリエール先生の弟子であったランブイユ医師がそう言うと、控えの間を落ち着かな気にいったりきたりしていた五人の医者たちは、一斉に頷きました。そして王子にくれぐれも安静になさるようにと囁んで含めるように納得させたのでした。王子は何度も「シーポーラちゃんはどこなの？」と繰り返し医師らに聞いたのですが、彼らは王子がまだ意識が戻ったばかりで、夢の登場人物の話でもしているに違いないと勝手に決めつけたのです。

ダニエルさまは大変賢い方でしたから、こんなヤブ医者どもを相手にしても仕方がないと思い、エズラかクリフト王、あるいはメアリがきたら、本当のことを聞こうと心に決め、一旦は大人しく引き下がったのでした。

そしてランブイユ医師が王の寝室へダニエルさまがお目覚めになられたこと、御体に変調をきたしておられること、またそれは半魚人の呪いに違いないということをお話すると、クリフト王は血相を変えて、お召物を着替えもせずに息子のいる東翼の宮へと向かったのでした。

王はあまりにも変わり果てた我が子の姿を見て、ベッドの脇に腰かけたまま泣き崩れました。ダニエル王子のことをしっかりと抱きよせると、何度も「おまえの病気はわたしが必ず治してみせる」と言い、姿が変わっても自分の愛情は変わらないということを示すために、肩を抱きよせたり頬や手に触れられては大切なものに触るように撫でさすったりしました。

王子はこんな様子の父上の姿を見るのは初めてでしたし、勝手に王宮を抜けだして海でボートに乗っていたというのに咎め立てもしないお父さまに対して、心からの尊敬と愛を覚えました。そしてこれからこんなにもお優しいお父さまとお別れしなければならないことを思うと、苦しみと悲しみのあまり涙があふれました。

「あのね、お父さま、僕……シーポーラちゃんと一緒に海の国に帰らなくてはならないの。僕は本当は地上の王国の王さまでなくて、七つの海の国の王さまなの。もう何年かしたらシーボルクのおじいさまがお亡くなりになられるから、そしたら僕が次の王さまになって千年の間海の国を治めるの」

クリフト王はランブイユ医師から、王子が何かおかしなことを口走っても気になさいませんよと言われてはいたのですが、この時ばかりはどんなおかしなことを自分の息子が話そうと、きちんと聞いてあげなくてはいけないような気がしていました。これまで、まともな親子らしい会話などあまりしたことがなく、おそらくは王子が以前から寂しい思いをしていたであろうことは、それとなく肌で感じていたのですから。

「シーポーラちゃん？そのシーポーラちゃんというのはダニエルの友達なのかい？」

王は、多分それは息子の空想上の友達なのだろうと思いました。そして想像上の話を自分にしているに違いないと思ったのです。

「ううん、違うの。シーポーラちゃんは本当は僕のお母さんなの。でも僕が本当のことを知ってショックを受けちゃいけないと思って、友達のふりをしてくれたんだ。僕、自分の乗っていたボートが船とぶつかってから、ずっと夢を見ていたの。そこではお母さんは虹色に輝く人魚で、シーポーラという名前だったの。そして僕の名前は本当はシーダニエルというの」

クリフ王は訳がわかりませんでした。おそらく息子は頭をぶつけたショックで、少し記憶が混乱しているに違いないと判断しました。そして「あんまりたくさんおしゃべりすると疲れるから」と言って、奇病にかかってしまった可哀想な息子のことを、ベッドの中へ寝かしつけました。

「お父さん。シーポーラちゃんはあれからどうしたの？」

ダニエル王子は立ち去ろうとするお父上のガウンの裾を引っ張って、なおもしつこく訊ねました。彼女が自分を見捨てていなくなるなどとは到底考えられないことでしたので、それならばどうして自分は助かったのだろうと不思議でならなかったのです。

「あれからってというのは……一体いつのことなんだい？」

クリフさまは王子が納得するまで息子の空想話につきあってあげるつもりで、そう訊ね返しました。

「だから、僕のボートが船とぶつかったから。ロイド先生が言うには、僕がサイゴン島の近くの岩場で倒れていたのを、クロイツネイル大尉の船が見つけたってということなんだけど……シーポーラちゃんがそんなところに僕を見捨てていくなんて、ありえないことだから」

「そのシーポーラちゃんってというのは……」王は我知らず、ごくりと喉が鳴るのを感じました。

「どんな感じのする人なんだい？」

「顔と体が魚の鱗でびっしり覆われていて、テレパシーでお話をする人なの。見た目はちょっとギョッとする感じだけど、とってもとっても優しい人なの。僕、前から王宮を抜けだしてはずっとシーポーラちゃんに会ってたんだ。だって、僕の話を実際に聞いてくれるのは、シーポーラちゃんだけだったんだもの」

クリフ王は深い溜息を着くと、「もう寝なさい」と、幾分厳しい口調で言いました。そして「シーポーラちゃんのお話はお父さんにまかせなさい」と最後に言い残して、静かに息子の寝室から出ていったのでした。

シーポーラとポーラ……果たしてこれはただの偶然の一致だろうか。クリフトフ王は思いあぐねました。王は最初、シーポーラちゃんというのは、母のいない息子の作りだした空想上の友人だろうというふうに考えたのですが、現実問題として王立法務院の地下牢には今、彼の話した魚の鱗にびっしり覆われた魚人がいるわけですから——すべてのことを考え合わせると、彼女が息子の命を救ったと想像するのが一番自然であるように思われました。

実をいうと王はあの不気味な半魚人を捕まえて以来、王宮中の文献という文献を引っくり返して、昔から伝わる半魚人伝説とはいかなるものか、どんな些細な民話も逃さず調べていたのです。その全体を集めて見ますと、どうやら人間の世界と同じく、人魚たちの間にも良いのと悪いのが存在するようでした。

たとえば——良い人魚の昔話にはこんなのがあります。ある時、ヨセフォスという男が漁をしていると、魚の顔をした赤ん坊が網にかかりました。ヨセフォスはびっくりしましたが、彼と妻との間には何年たっても子供がいませんでしたので、この魚の顔をした赤ん坊を連れ帰り、自分たちの家の子供としました。それ以来彼の家では豊漁続きで、子供が大きくなる頃には立派な御殿に住むほどの金持ちになりました。ところがある時、彼の本当のお父さんとお母さんである

魚の顔をした両親が現れて、この子は実は海の王国の跡とり息子なのだと申します。心から愛しあう両親と息子は別れを悲しみましたが、月に一度だけ満月の夜に——彼は<sup>おか</sup>陸に上がることを特別に許されて、これまで立派に育ててくれた恩返しにと、たくさんの海の宝物を持ってきたのでした。

また、悪い人魚というのはそのほとんどが上半身女性の姿で、下半身が魚の尾をしていました。彼女たちは満月の夜になると決まって饗宴を開き、海の難所へ船を引きずりこむのだという伝説が、サイオニア王国には昔から数えきれないほどたくさんあるのです。そして、彼女たちにはあるサイクル——頭から体まで全身魚の鱗で覆われる時期と、上半身だけが人間になる時期というのがあるらしいと古い文献で見つけた王は、もしやあの地下牢の化け物が月の満ち欠けによってその姿を変えるのではないかと、これまで番兵によく注意して見張るよう厳しく言い渡しておいたのです。

クリフ王は一度あの化物と会って以来、法務院の地下牢へはいきませんでした。何故とって見ていてあまり気持ちのいい生き物ではありませんでしたし、何よりあの化物が王妃の命を奪ったかもしれないことを思うと——手足をもいで首をはねてやりたいような、残虐な殺意を覚えるからでもありました。

その日、王はエズラに閣議の間での会議へ王の代理として出席させると、自分は王宮の図書室にこもって、人魚に関する文献を調べ続けました。そして人魚の肉を食べると不老不死になるという伝説と、人魚の鱗を食べるとどんな不治の病いでも必ず治るといふ伝説があるのを知って、「これだ！」と思ったのです。

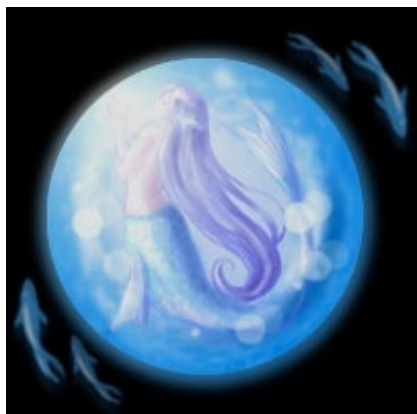
一体どこから話が洩れたのかはわかりませんが、貴族たちの間では法務院の地下牢に半魚人がいるという噂が立っており、王の元にももし本当にそうなら解剖して徹底的に調べるべきだという声が届いていました。ロイド医師などはあの半魚人の肝を抜いて食べさせれば王子の病気は治るなどと申しますし、王としてもあの人魚の処遇をどうすべきか、頭が痛いところだったのでした。

クリフトフ王は今朝方、息子のダニエル王子の口からシーポーラという名前を聞くまでは、あの人魚を吊るし首にして解剖するのも悪くないという考えだったのでした。もし息子の言うとおり、彼女が他でもない彼の息子の命を救ったのであれば——それは人の道に外れた行為ということになりますし、何より彼女のことを友達として慕っている息子のことを裏切る行為でもあります。またこのことでは、ランブイユ医師とロイド医師が真っ向から反発しあっていて、ランブイユ派の医師ふたりは彼の言うとおりに半魚人を海に帰せば王子の病気は治るといふ意見でしたし、逆にロイド派の医師ふたりは、彼と同じく人魚の肝を食べさせれば王子の病気は治るといふ譲りませんでした。

そしてクリフトフ王がどうしたものかと金銀の髪をかきむしって悩んでいると、ある文献の挿し絵が目にとまりました。それは他でもない王が初めてポーラと出会った海のほこらによく似た洞窟の絵でした。その隣にはこんな文章が添えられています。〈この洞窟は、人間が海の神の怒りに触れてできたものである〉と。

王はその巻き物を手にすると、そこに記されている物語を急いで、でも丁寧に読みました。サ

イオニア王国という国ができるよりももっとずっと遥かな昔のこと——この地に住む漁師たちは浜辺に何人もの人魚たちが打ち上げられているのを見ると、弱っている彼らの鱗をとり皮を剥いで、その臓物を鍋の中に入れて食べました。それは一度食べると忘れられないほど美味しい肉だったので、翌日もまた彼らは人魚が浜辺に打ち上げられてはいないかと、見にゆきました。するとまた何人もの人魚が弱った姿で浜に打ち上げられているではありませんか。彼らはその年、弱った人魚が浜辺にいるのを見ては人魚たちの頭をはね、両手両足をもいで臓物を抉り取ってはその肉を食べました。しかし、それ以来彼らは不老不死の身となり、村の人間の誰もが死なないために——深刻な食料不足が起きたのです。弱った人魚が浜辺に打ち上げられるようなことは最初の年以来二度とありませんでしたし、人魚の美味しい肉の味が忘れられなかった村人たちは、互いに争ってはお互いの肉を食らいあうようになりました。そしてそのような人間の愚かで貪欲な性質を嘆いた海の神は——大きな津波を起こすと、浜辺の住人を全員わだつみの底へと飲みこんだのでした……。



(イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」 <<http://www.first-moon.com/>>のもので  
すm(\_ )m)



(イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」 <<http://www.first-moon.com/>>のもので  
すm(\_ )m)

クリフトフ王は決して迷信家というわけではありませんでしたが、不思議とこの物語には心惹かれるものを感じました。普通に考えるとするなら、このような話は昔から漁師の語り部たちに伝えられているただの伝承だというように誰もが思うことでしょう。でも王はこう考えたのでした。ポーラ王妃が命と引きかえに王子を出産されたとの正式な発表がなされた時——国民はそのことを我がことのように悲しんで、一年の間喪服を身に纏って過ごしたのです。けれどもその時王は、彼より四代前のクリフトフォロス王の時代に黒い服が大変流行して、その数年後にサイオニアがカンツォーネ王国の属領下に置かれたことを思いだし、自分がしっかりしなくてはいけないと思ったのです。後世の人間はみな、クリフトフォロス王の治世に黒い服が流行したのは、戦争の起こる先触れだったのではないかと言いますが、当時の彼らにしてみればそんな気持ちなどどこにもなかったに違いありません。

(国民の間で黒い服が流行しようがしまいが、結局のところ戦争というものは起きる時には起きてしまうものだ)

だが、避けられるに越したことはない——そう考えるとクリフ王は、午後からは通常通り閣議の間で政務を執り、議会で決定したいくつかの法案の書類に、王の認証のサインをしました。そして朝見た時にもまして魚人化が進んでいるダニエル王子のことを見舞うと、そこに泣きじゃくるメアリがいるのを見て、彼女のことを隣の控えの間へと連れだしました。

「おまえは、何かをわたしに隠している。そうだね？」

クリフ王は決して、ダニエル王子に人魚の鱗を食べさせたことを責めているわけではありませんでした。第一彼はそんなこと、知りもしなかったのですから。

「王さまっ、王さま……ダニエル王子があのような姿になられたのは、すべてわたくしの責任でございます。わたしは以前——ポーラさまより、よく仕えてくれたお礼にと、虹色の鱗を一枚い

ただいたのでございます。それを人間が食べると、どんな不治の病いも治ると聞かされていたものですから……でもまさか、ダニエルさまがあのようなお姿になられてしまうだなんて……」

「つまりそれは……」クリフ王は窓扉より離れると、縺子のソファに腰かけているメアリの隣に座りました。「おまえはあの虹色の化物の正体を最初から知っていたのだね？それじゃあ、ポーラは……」

その時、稲妻のような戦慄がクリフトフ王を襲いました。そして「なんということだ！」と叫んで、自分の膝を拳で何度も打たれたのでした。

「あれは——あれは……わたしが見たあれは、ポーラだったというのか！どうしておまえはそれを、そんな大切なことを……っ！」

そう口走りながらも王には、すべてのことがわかっていました。もしあの時すぐにメアリが本当のことを打ち明けていたとしても自分は到底受け容れられなかつたろうこと、結局のところメアリのしたことは、自分にとってもポーラにとっても最善であったこと……。

クリフさまが頭を抱えこんでいると、メアリはそっと、王さまの肩に触れて優しくお慰めしました。

「クリフさま、あの方は決してあなたさまのことを恨んでなどおりませんでした。ただ、母なし子となるダニエルさまのことをひどく気に病んでおられて……実をいうとわたくしは離宮に移って間もない頃、あの方が夜明け前にどこかへ姿をお消しになることに気づいて後をお尾けしたことがあったのです。何か不用心なことがあってはいけないと思ったものですから……そして離宮の室内浴場で、あの方の本当のお姿を見てしまったのでございます」

「どうしてっ……！何故なんだ、メアリ！おまえはその後も、以前と変わらず……」

王が顔を上げると、メアリは悲しげに首を振っておりました。そして王にはあらためてすべてが理解できたのでした。ポーラが夜明け前にどこかへ行って戻らなかった時、王である自分が探せと命じたにも関わらず、彼女が冷静に「次期戻られますよ」と言ったことがあったのを思い出したのです。その時王はメアリが怠け心を起こしているものと思いこみ、腹が立って別の侍女を叩き起こしたのでした……今にして思えば、すべてが合点のいくことばかりだったというのに、何故自分は今の今まで、疑う気持ちさえ起こさなかったのだろうと、王は自分自身を呪いたいようにさえ思いました。

虹色の人魚が王妃の寝室で、生まれたばかりの赤ん坊を抱いていたのは当然のことだったのです！何故って、その子供は彼女が自分のお腹を痛めて生んだ、実の子だったのですから！

「メアリ……教えてくれ。わたしはどうしたらいいんだ？わたしにとっては、ポーラが海のものでも陸のものでも、そんなことはもうどうだっていいんだ。でも、ああして人間の姿でわたしの元に現れたのだから——もう一度、同じ姿になる方法だってあるのではないか？」

「それはわたしにもわかりません」と、メアリは苦しい溜息を洩らしました。「でも、もしそうできるものなら——誰よりもそうなすりたかったのはポーラさま御自身だったはずですよ。でも、それができなかったからこそポーラさまは、海の国へと戻っていかれたのではないのでしょうか」

「そうか……」

クリフさまは王衣の袖で涙をぬぐうと、これから自分が真っ先に何をしなければならないかに思いを馳せました。いかにそうと知らなかったとはいえ、おそろしいことに王は自分がこれま



でもっとも愛したものを——あのような獄中に放りこんだままでいたのですから！それだけでなく、生きたまま解剖してその臓腑を抉りだし、息子に母の肉を食べさせようとしていたなんて！

王はその夜、闇がもっとも深くなるのを待ってから、こっそりと王宮を抜けだし、王立法務院へと向かいました。きっと彼女ならダニエル王子を元に戻す方法を知っているに違いありませんでしたし、何よりクリフさまは——王としてではなく、またひとり息子の父親としてでもなく、彼女の夫として、最愛の妻に会いにいこうとしていたのです。

ポーラは地下牢に放りこまれてから一週間もしないうちに、重い病気にかかってしまいました。実をいうと海の中にいる時からその兆候はあって、やたら寄生虫が得意ようになっておりましたし、今ならポーラにも何故セイレーンのセイラが虹色の鱗を欲しがったのかがよくわかりました。ポーラも以前鱗がまだ虹色であった時は——一度も寄生虫などできたことはなかったからです。けれどもその後、虹色の鱗を持つセイレーンが百名、人魚たちの手によって鮫に処刑されておりましたし、ポーラはそのことを義兄のひとりに聞かされた時、あらためて自分の罪の深さを自覚したのです。

ポーラの呼吸は荒く、喉からヒューヒューゼイゼイという喘鳴がしておりました。実は肺炎を起こしかけていたのですが、このくらいならまだ、水をたくさん浴びればきっと回復すると思っていました。目の前にはメアリの夫である、番兵のマキシム・ヨーデルハイトが今日もいかめしい顔をして、槍を片手に青灰色の壁を睨んでいます。

ポーラにとって、マキシムの心に触れるのはとても快いことでした。彼は誠実で実直なあまり、出世にはとんと縁がありませんでしたが、持参金のたっぴりついたメアリと結婚しましたので、住み心地の好い家で愛する家族とともに、経済的にはなんの不自由もない家庭を築くことができました。といっても、彼は何もメアリの持参金が目当てで結婚したというわけではありません。メアリのことを本当に愛していたから結婚し、そして三人の子供にも恵まれたのです。

ポーラはマキシムの意識を探るうちに、彼こそが可愛いメアリの夫であることを知り、とても嬉しく思いました。何故ならマキシムは、いかめしい顔つきこそしているものの、実は内気で繊細で、心根の優しい男だったからです。

マキシムは毎日法務院の地下牢を、仲間で交替で見張っていたのですが、彼は他の番兵とは違い、内心ではこの不気味な生き物に対して同情さえ覚えていたのです。貧しい漁師の家に育ったマキシムにとって、ポーラのような半魚人はいわば守り神のような存在といえました。彼も両親が亡くなる十五歳まで家の手伝いをしておりましたので、航海中に不思議な出来ごとに遭遇したということは何度もありましたし、その度に漁師たちはいつも海の神ダゴンのことを崇め奉ったものでした。

(可哀想に……海から離れて随分経つので、魚と同じく呼吸が苦しくなっているんだろう。俺にできることなら、なんとかしてやりたいものだが……)

そのうちにポーラが始終咳きこむようになりますと、マキシムはますますやるせなくなってきました。彼の亡くなった母親ももともと喘息持ちで体の弱い女性でしたから、よく今のポーラのように咳きこんでいたものでした。



「……おっかさん」

そう呟くとマキシムは、フロックコートの袖で目尻の涙をぬぐい、警護兵の規律を破って持ち場を離れ、外の井戸まで天秤を担いで走ってゆきました。他の警護の兵たちには「王さまの御命令で」と言ってごまかし、彼は桶の水を可哀想な人魚に何度もかけてあげたのです。

『ありがとう』

ポーラはマキシムの心にそう直接語りかけたのですが、彼はそれをただの空耳としか思いませんでした。当然といえば当然のことながら、人間には人魚が何を食べるかなどまるで想像もつきませんから、毎日彼女の元には一日に三回、魚が何匹も届けられたのですが、ポーラは新鮮な魚にも死んだ魚にも、まるで見向きさえしませんでした。

マキシムは彼女が病気になったのは何も食べずに一週間も過ごしたからだろうと思い、家からワカメを持ってきてはポーラにこっそりあげました。そして彼女が嬉しそうにそれを頬張っているのを見て——マキシムは人魚というのはやはり良き存在に違いないと感じたのです。何故って、同族の魚を食べるのでなしに、ワカメなどの海藻を食べているのですから！

マキシムたち番兵には守秘義務というものがありましたから、実はメアリは彼が半魚人の見張りをしているだなどということは少しも知りはしませんでした。それで何故夫がいつもワカメをたくさん家から持ちだすのか不思議に思っていたのですが——心から夫のことを信頼しておりましたので、特に何も聞かずに黙って見過ごすことにしていました。

クリフトフ王が夜陰に乗じて王立法務院の地下牢へ姿を現した時、入口を警護していた兵は居眠りをする寸前だったのですが、王のお姿を見るなり背筋がぴんと伸び、仰々しく敬礼いたしました。

「こっ、これは王さま……もしやあの化物の様子を見にこられたのですか？」

「化物ではない」と、自分もついきのうまではそう思っていたにも関わらず、クリフさまは微妙に訂正いたしました。「わたしは半魚人の様子を見にきたのだ。これからわたしが何をしよう——もし知らぬふりをしてくれるならば、これを授けよう」

王はぎっしりとレーテル金貨の詰まった革袋をふたつ、地下牢の入口を守っていた番兵ふたりに手渡しました。

「も、もちろんでございますとも、王さま。わたしたちが今日平和で豊かな生活をしておりますのも、すべては王さまの仁徳のお陰でありますれば……我らが王のお言いつけに背くなど、とんでもないことでございます」

彼らは見たこともないような大金に目がくらみ、黙って王さまのことをそのままお通ししました。クリフ王がこれから何をなさろうとしておられるのか、彼らには興味などありませんでしたし、結局のところどんなまずいことがこれから起こるにせよ、すべては王が責任をとってくださるのですから、自分たちは知らぬ存ぜぬで通せばいいだけのことだと思っていたのです。そしてずっしりと重い金貨にちらちら目をやっては、ひとりはこのをどうやって女房の目から隠してへソくろうかと考え、いまひとりはこので家族に楽な暮らしをさせてやれると思って、心を輝かせていたのです。

クリフ王は地下牢の入口にあるガーゴイルの彫像に目をやると、壁に蝋燭が灯っている石畳の廊下をそのまま真っすぐ歩いてゆきました。かつかつという虚しい自分自身の足音のこだまを聞きながら、王は今囚人が誰もいない牢屋の前を通りすぎてゆくと、やがて一番奥の拷問部屋の手前にある、腐った魚のようなひどい匂いのする牢の前までやってきました。

「御苦労である」

クリフ王が夜勤の番兵——マキシム・ヨーデルハイトにねぎらいの言葉をかけられますと、熱心な王党支持者であるマキシムは、膝をついて頭を垂れました。

「わたし如き下賤の者に、もったいのうお言葉でございます」

「ところでお主、ここの鍵を持っているか？」

マキシムは顔を上げますと、王はこれからどうなさるおつもりなのだろうと、ためらうような表情をその<sup>おもて</sup>面に浮かべました。もしや王さまは、この哀れな人魚を拷問部屋にある身の毛もよだつような拷問器具の数々にかけておしまいになられるのでは……そんな不安がマキシムの心をよぎりました。

「鍵を持っているのかいないのかと、聞いておるのだ」

もう一度王がそう問いただされますと、自然のうちに音もなく牢の扉が開きました。王もマキシムも驚きましたが、真っ暗な牢の奥にふたつの哀願するような眼を見つけますと、ふたりにも

すべてが明らかでした。

王は腐った魚のあとでぬめっている床で足を滑らせそうになり、よろめきつつ哀れな人魚の前に膝をついて言いました。

「おかえり、ポーラ」

ああ、なんということでしょう！王はとうとうすべてを知ってしまったのです！ポーラは鱭のついた鱗だらけの手で顔を覆いながら、さめざめと泣きました。

『わたしは、ポーラなどという名前ではございません。シーポーラというのです』

そしてそう王の心に直接話しかけたのですが、彼の愛にあふれる心には嘘など通用しませんでした。

「何も言わなくていい」クリフ王は昔の日のように慈しむような優しいお声で言われました。「何も知らなかったとはいえ、こんなひどいところに閉じこめてすまなかった。ダニエルも目を覚ましたし、君がこんなところに閉じこめられている必要はない。さあ、一緒に外へでよう」

ポーラはその時少し咳きこみましたが、海へ戻ることでさえできれば——自分の病気などすぐに治ることがわかっていましたし、何よりもクリフさまの深い愛が心にしみこんで、それが肺の炎症を癒したのです。

王は自分が着てきた闇色の暖かなローブをポーラに着せると、フードで魚の頭を隠すようにしてから一緒に牢を出ようとしてました。

マキシムは涙を流しながらも、やはりいかめしい顔つきで青灰色の壁を睨んでいます。そして王のほうなどちらとも見ないで、「わたしは何も見ませんでしたし、聞きもしませんでした」と、そう答えたのです。

王は彼にも賄賂として金貨を用意してきたのですが、直感として彼が金を受けとりそうもないことがわかりましたので、彼の名前だけ聞くと、

「マキシム・ヨーデルハイトか。覚えておこう」

そう言ってポーラの肩を抱いて薄ら寒い地下牢の廊下を戻っていかれたのです。実は王さまはメアリの夫が番兵であることは知っていましたが、彼の名前も風貌もよく知りませんでしたし、メアリの姓が結婚してヨーデルハイトになったことも覚えてはいなかったのです。

それで数日後にマキシムを王宮へ呼びだして王の従者のひとりに加えますと、その時初めて彼がメアリの夫であることを知って驚いたというわけなのでした。マキシムは王の従者となったあと、エズラ先生について勉学を修め、やがては王の顧問へと出世してゆくのですが——それはまた後日のお話です。

地下牢の入口を守っていた番兵のひとりが、早速明日この金を使って淫売宿で楽しむことを夢想しておりますと、入口から王さまと、もうひとり得体の知れないローブを纏った者が出てきました。番兵たちは王に対して敬礼しながらも、ローブの袖からは鱭だらけの手が、裾からは鱭だらけの足が垣間見えるのを見て、ぞっとしながらふたりの後ろ姿を見送ったのです。

王はカンテラを手にして舟に乗ると、ポーラに手を貸して彼女のことを座らせ、櫂を漕いでリス川をゆっくり下りはじめました。王立法務院の中洲があるこのあたりは、比較的流れも緩やかで、ここから河口まではそう遠くはありません。

ふたりは濃い闇の中、川を下って誰もいない浜辺に辿り着くまで、ずっと無言でした。とはいえ、ポーラにはクリフさまのお考えになっておられることがすべてわかっていたから——言葉もなく静かに涙にくれるのみでした。

クリフさまはポーラがどうすれば一番幸せなのかについてお考えになっておられたのでした。もし今の姿のままでも、ポーラさえよければ離宮に戻ってきてほしいと思っていました。何しろ人間の王妃としてのポーラはすでに亡くなっているわけですから、あれ以来誰も使っていない離宮に住んでも、そう都合の悪いことはないだろうと思いました。確かに、警護兵の間に奇妙な噂が立つかもしれませんし、ポーラにもひどく窮屈な思いをさせることにはなるでしょう。でももしポーラが海を離れてはそう長く生きられないのであれば……彼女は海へ帰ったほうがいいのかろうと思ったのです。

何故、美しい人間の女性の姿となって海のほこらで倒れていたのか、何故、今のような人魚の姿から人間に戻れなくなったのか、何故、赤ん坊を生んだ時人魚の姿をしていたのか、何故、以前は虹色だった鱗が、今は鈍色がかかった緑色をしているのか……そういったことは、今のクリフ王にはもうどうでもよいことでした。でもポーラにはそうした王が心の中で疑問に感じていたことに答えるのが、せめてもの愛の証しのように思え、彼の心にそっと優しく声をかけたのでした。

『わたしは昔——クリフさまが今よりずっとお若い頃に、ロイヤル・サイオニア号が難船した時、救命艇から波間に投げ捨てられたクリフさまを、あの海のほこらまでお運びしたのです。それ以来わたしは人魚の身でありながらも人間になりたいという望みを持つようになり、海の魔女と呼ばれるセイレーンとある取り引きをしたのでした。わたしは自分の虹色の鱗百枚と引き換えに、セイレーンから人間になる薬をもらったのですが——海の魔女と取り引きをすることは人魚にとっては禁忌だったのです。でもわたしは一度人間にさえなってしまうえば、自分は陸に属する存在となり、海の理には属さない者になると考えて——その禁忌を破ってしまったのでした。セイレーンはわたしから虹色の鱗を百枚受けとったあとでこう言いました。人間になる薬には副作用があって、一日に一時間くらい元に戻ってしまう時間があるのだと。でもそう聞かされてもわたしの心は揺るぎませんでした。そして海のほこらで人間となり、倒れているところを……偶然にもクリフさまが発見してくださったのです』

そうだったのかと王は思い、悲しい運命の偶然に胸が痛みました。もし彼女が難破した自分のことを助けてくれていなかったら、今ごろサイオニア王国はどうなっていたでしょう。また自分が海のほこらで人間となったポーラのことを一番最初に発見していなかったら、今ごろ彼女はどのようにいたでしょう。きっと淫売宿にでも売られて、身をひさいでいたに違いありません。

王はそうしたことのすべてを考えあわせて、神にすべてを感謝いたしました。果たして、三年の間といえど、心から愛した女性と生きた歳月を過ごすのと、愛してもいない隣国の王女と結婚し、やがては愛妾を囲うようになるのと、どちらがいいかと問われたら、王はやはりポーラに出会えてよかったと、そのように思うのでした。王にとってはポーラが人魚でも人間でも、今はもうどちらでもよくなってさえいました。人魚には不思議な＜感化力＞という能力がありましたから——もし王がこのまま長くポーラと一緒にいたとしたら、人間の女性のことをただの贅肉の塊のように考え、鱗に覆われた肌こそが世界でもっとも美しいというようにさえ思いはじめてい

たに違いありません。

ふたりは舟から降りると、恋人のように肩を並べて浜辺を散歩しました。夜明けが近づいてきたら、ポーラは海の世界へ帰らなくてはいけないということが王にはわかっていましたし、ポーラには再び愛する夫と息子と離れて暮らす寂しい生活が待っていたのでした。

「さよなら、ポーラ」

クリフさまはポーラの鱗だらけの額にキスすると、いつまでも愛していることを約束しました。そしてダニエル王子が元の人間の姿に戻るために——ポーラは鈍色の鱗を一枚、腕から剥いで王に渡したのでした。

『さようなら、わたしの愛しいクリフさま』

ポーラは海の中へ飛びこむと、たちまちのうちに白い泡の漂う蒼い海の彼方へ消えてなくなりました。ふたりは口にだしてこそ言いはしませんでした。もしクリフ王が一国の王さまなどでなかったとしたら——彼は何もためらうことなくどこかの小さな島で、人魚の妻と半魚人の息子と家族三人で仲睦まじく暮らしていたに違いありませんでした。

クリフさまはポーラがいなくなったあとの浜辺で、朝陽に照らされた美しい海を暫くの間ご覧になると、手のひらの中の鈍色の鱗を握りしめ、苦しい思いを抱えながら重い足を王宮に向けました。これから息子のことをなんとか説得してこれを飲まさないといけないことを考えると——クリフさまは自分が地上の王国のひとつを治める王であり、また大地に属する人間であるということがほとんど嫌になるほどでした。そして生きていても虚しいという厭世観を覚えながらも、これからも王としての職務をまっとうしていかなくてはならないのだと思うと、いっそのこと出家して僧侶にでもなりたいというようにさえ思ったのでした。



(イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」 <<http://www.first-moon.com/>>のもので  
すm(\_ )m)

それから、さらに五十年の歳月が流れました。サイオニア王国のクリフトフ王は最愛の妻と浜辺で別れてから二年後に、エスカルド王国のシベリウス王の娘と再婚し、一男一女をもうけ、今ではその息子の治世となっています。クリフ王は七十七歳の時に脳溢血を起こされて、お亡くなりになる八十八歳まで十一年間——左半身が麻痺したままで過ごされました。といいましても、その頃にはユリシア王妃との間にできたエルクリフ王子が王位を継いでおりましたので、その時には陛下はもはやいつ死んでもよいというお考えでいらっしゃったようです。

本来なら、クリフトフ王とポーラ王妃との間にできたダニエル王子が彼の後を継いでサイオニア王国の次代の王となることを——国民の誰もが望んでおりましたのに、彼は十四歳という若さで夭折してしまったのでした。本当は彼もまたポーラ王妃の時と同じく、ある日突然失踪したのですが、サイオニア王国の歴代誌には彼の死因は原因不明の奇病によるものと書き記されています。

後世の人々の中にはこのダニエル王子が実は吟遊詩人のシャルハイードではなかったかと推測する人もいますが——実際、このふたりは同時代を生きただけでなく、容貌もとてもよく似ており、あらゆる学問に通じているという点やあらゆる楽器を弾きこなしたという点でもそっくりでした。けれども本当の事実は、ダニエル王子は海の王国の王さまとなるために、母上を追ってあの後すぐに海の世界へと消えていかれたということでした。クリフ王はそのことを大変お嘆きになられ、またカミーラ王太后さまに至ってはそのことが原因ですっかりぼけてしまわれました。そして一年もしないうちにより政治の相談役までなくされたクリフ王は、周囲の人間が勧めるままにエスカルド王国のユリシア王女と婚約し、何を考える暇もなく気がついたら結婚してしまっていたのでした。

結婚当時ユリシア王女は十六歳で、まだあどけなさの残る顔をされていましたが、自分より

夫が二十四歳も年上でも、全然気にしていませんでしたし、むしろこの縁談は彼女自身が大乗り気であったからこそ、実現したようなものでした。実をいうと周辺諸国ではクリフトフ王がポーラ王妃を亡くされて以来、サイオニア王国の次の王妃には是非我が娘をと考える王がたくさんいたのです。でもクリフ王がカンツォーネ王国から持ちかけられた縁談を無下に断り、ユトレヒト王の顔に泥を塗ったという話はあまりに有名でしたので、どの国も縁談話には二の足を踏んでいたのです。

そうになると、自然と関心は次の王となる世継ぎのダニエル王子のほうに移り、ユリシア王女もまた本当なら、彼のお妃の第一候補として上がっていた女性なのです。クリフ王もシベリウス王からこの話を持ちかけられた時、あまりに年が離れていることを理由に断ろうとしたのですが——ユリシア王女が自分と結婚できなければ修道院に入るといっているので、いつの間にやら婚約するという事になってしまったのです。

実をいうとユリシア王女はお父上のシベリウス王からクリフトフ王の噂を聞くにつけ、少女が空想上の王子さまに恋するように、とても好きになってしまっていたのです。とても深く愛した王妃さまを結婚後たったの一年で亡くされて、その後もずっと王妃さまのことだけを想い続けていらっしやられるだなんて——なんてロマンチックなんでしょう！ユリシア王女はクリフトフ王のことを心に思い描くたびに、ほうと甘い溜息が洩れるのです。

このような場合、普通であれば恋に恋する乙女の二十日病いとしてそのうち自然と目が覚めるものなのですが、クリフ王がやはり年の差を理由に婚約を解消なさろうとした時、ユリシア王女は本当に病気になってしまわれました。そしてクリフさまと結婚できなければ自分はこのまま死ぬと言って、半ば脅迫するような形でサイオニア王国の王と御結婚なされたのです。

その後、ユリシア王妃が四十八歳という若さで亡くなるまで、彼女にかかった恋の魔法は解けることがありませんでした。クリフトフ王は何から何まで彼女が思っていたとおりの人でしたし、王にしてみればそれは四十の男が世間知らずの七つの娘を騙すのに近い行為だったわけですが——ユリシア王妃はクリフ王にとっても大切にされて、一男一女にも恵まれ、幸福な生涯を送ったと、後世の歴史家たちはみな口を揃えてそう言います。

クリフ王もユリシア王女にどれほど心慰められたかわからないほどでしたが、彼はダニエル王子に犯したのと同じ失敗を、またしても自分の息子に繰り返してしまいました。もうひとりの娘のシンシアのことは目に入れても痛くないほどの可愛がりようだったのですが、王はエルクリフ王子を自分の後継者として養育するために少し距離を置いて接することにしました。

エルクリフ王子は小さな頃から病弱で、非常に神経質な少年として育ちました。何かにつけて自信がなく、自分がいつも天才児として有名だったダニエル王子と比べられているような気がしていました。それでますますひねくれて、自分の固い殻の中に閉じこもってしまわれたのです。

エルクリフ王は王の顧問であるマキシムが活着している間はよい政治を行って民からも好かれたのですが、マキシムの死後は王にとり入ろうとする家臣しか自分に近づけようとせず、やがて政局は混乱し富裕層の市民の反乱まで招くようになりました。またそれだけでなく、国内の建て直しをはかったカンツォーネ王国のマイヨリヒト王がマスキル山脈を越えて攻めて来、再びサイオニア王国はカンツォーネ王国の属領下に置かれることになってしまいます。

剛毅なことで知られるマイヨリヒト王は、エルクリフ王子の病的なまでの繊細さを知るにつけ

彼のことを気の毒に思い、彼をお飾りの王としてそのままの地位に就けておくことにしましたが、彼らの息子や娘を互いに縁組みさせるなどして、独立戦争が起きたりしないよう備えることも忘れはしませんでした。

もっとも、こうしたことはクリフトフ王がお亡くなりになった二十年以上も後の話ということになりますし、その頃には彼は——地上の煩わしいことなど一切忘れ、海の世界を自由に泳ぎまわっていたのでした。

昔はサイオニア王国の王さまだったクリフトフさまは、今は人魚たちの間でシークリフさまと呼ばれ、七つの海の統治者であられるシーダニエル王のお父上として、みなから大変尊敬されておりました。彼は人間としての自分の肉体が滅ぶ時、海のほこらに自分の遺体を安置するよう遺言を残したので、そのとおりに葬儀が執り行われたのでした。そしてクリフさまの御遺体を納めた棺は、その日の夜のうちに人魚たちの手によって海の中へ運ばれ、彼は人魚の一族に伝わる特別な秘儀により三日ののち人魚として生まれ変わったのです。

最初、シークリフさまは自分が金銀の鱗だらけの体をしていることにギョツとなさいましたが、すぐにそのことにも慣れ、地上の人間界のことなどほとんど忘れてしまいました。そして虹色をした美しい妻と一緒に世界中の海を旅して楽しく泳ぎまわりました。そうなのです——シーポラの左肩の刀傷は、王が真実を知ってもその愛が変わらなかったあの瞬間に、癒されていたのでした。やがて彼女の鱗はすべて元に戻り、以前と同じく虹色に光り輝くようになっていたのです。

海の世界は本当に素晴らしく、この世の天国だというようにさえシークリフさまには思っていましたし、いつも彼のそばには美しい最愛の妻がおりましたから——彼は彼女と一緒にイルカの群れと泳いだり、ジャイアントケルプの森で隠れんぼをして戯れたり、また時には地上の無人島の浜辺で日向ぼっこをしたりと、なんの悩みも苦しみもない世界で第二の生を百年以上もの間満喫しました。

そしてとうとう、シーポラが寿命尽きて三百歳の生涯を終えた時に——シークリフさまも彼女と一緒に第三の世界へと旅立たれたのでした。わたしたち人間が天国と呼んでいる、永遠の魂の世界へと……。

終わり



新説・人魚姫～わだつみの底にあるもの～

<http://p.booklog.jp/book/29215>

著者：ルシア

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lmnlive/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29215>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29215>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.